

夜明けの狩人

猫又提督

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何時か書いてみたかったものです。主人公は暁ちゃんです。でも、暁ちゃんぼくくないです。全然似てないです。なのでそういったものが苦手な方にはお勧めしません。

暁ちゃんにこれといった目的はありません。自由気ままに夢から艦これの世界にやってきました。彼女が満足したら夢に帰ります。

投稿に関しては本当に不定期で続くかどうかとも分からないので、こいついつになったら失踪するかな、程度でいてくれればいいです。

目次

第12話
第11話
第10話
第9話
第8話
第7話
第6話
第5話
第4話
第3話
第2話
第1話

132 119 107 92 81 70 59 46 35 23 11 1

第22話
第21話
第20話
第19話
第18話
第17話
第16話
第15話
第14話
第13話

257 241 228 216 204 192 179 167 155 144

第1話

目の前で知らない3人が海に沈んでいく。否、彼女はこの3人知っている。彼女は海から突き出す手をつかむ。否、彼女は何もできなかつた。暗闇が覆い何も見えない。心地よい鐘の音がなつた気がする。どこかで、誰かが呼ばれたような。

目を開くとそこには知らない風景が。否、彼女はこれを知る。階段を登り扉を開けば、そこには彼がいる。

「狩人様。」

彼女が声をかけると、彼はこちらを振り向き机の前から体をどかす。彼女が用があつたのはその机だつた。

「ありがとう。」

彼女は微笑む。彼は何も反応しないが、彼女には確かに彼の感情を理解していた。彼女が取り出したのは、その華奢な体軀からは到底想像できない仰々しいもの。彼女が作業していると彼は彼女を撫でる。

「狩人様?」

彼女の問いかけに彼は一切応じない。ただ彼女の頭を撫で続けるだけだつた。

「…そう。そうなのね。分かったわ、狩人様。」

しかし、彼女は理解した。彼の意図を汲み取った。彼女は作業を足早に終わらせ持ち物を整理し始める。彼は2つのものを差し出した。輸血液と水銀弾であった。

「大丈夫よ、狩人様。ちゃんと持つてる。もうここに二度と来れないわけではないもの。また来れるわ。」

彼女には、彼が些か寂しそうにしているように感じたようだった。

「ねえ、狩人様。私は狩人かしら。獣かしら。…上位者、もしくはそのなりそこない？ それとも、昔殺した艦娘かしら。」

彼女は出口で問う。彼女自身それが答にならないと知っていた。だが、聞きたい。他人の瞳は自分に何を見出すのかと、自分の瞳と違って何を見ているのかと。彼は、ただ一つ頷くだけだった。回答とは一切思えない行為。到底理解などできないその行為。しかしやはり、彼女は理解した。なにゆえそれを理解したのか。

階段の人形に挨拶をし、広い庭園の大木の根本。車椅子の横に大きく存在する慰霊碑。かつてここで高かったものと彼女は一切の関係がない。あの瞬間全てはもう終わっていた。後ろから足音がした。彼と人形が見送りに来てくれたらしい。

「えへへ。うまく行くといいな。」

彼女は微笑み、慰霊碑の前に手を掲げる。彼女の念じに使者が答えた。瞬間、この場

に彼女は消滅した。

そこは森の中。明かりはついていて使者が祈りを捧げている。近くに砂浜があつて、静かに波が砂地を撫でている。空には星と満月が浮かんでいる。しかし、ここはヤーナムではない。だから獣狩りの夜はないし、獣の病もない。いずれ夜は明ける。ここはどこか知らない場所。でも、必ず自分が知っている場所の近くのはずだった。彼女は森を出て砂浜を歩く。直ぐに砂浜は終わりヤーナムにはないはずの建物が見えだす。コンクリート製の建物。夜でも明るい建物群。ヤーナムよりも多い人口。ここは日本だ。彼女は狩人の衣装から学生服へと着替える。昔は毎日のように着ていたはずの服。何時しかそれは狩人の衣装へと変わっていた。彼女は懐かしい建物を背に海へ向かう。

波止場の先。向こうの喧騒はここまで届かずわずかな音を波がすべて打ち消してしまふ。今宵は本当にいい月だ。思わずその場で交信してしまふ。なにも考えず、その月の向こうにいる存在を感じる。ふと手が伸びてくる。その手が彼女を包み込もうとして…。

「……。」

後ろから笑い声が小さく聞こえる。どこかの学生二人。こちらを見て笑っている。

どうやらスマホで映像もとっているらしい。狩人になってからいろいろな感覚が研ぎ澄まされてきた。特に耳と目は。鼻だけは少し衰えたかもしれない。しかし、これは見世物ではない。あまり見られていいものではないし、気が散る。彼女はメスを一つ手に取り投げる。まっすぐ学生たちの足元に刺さる。それだけで逃げてしまった。情けない。

彼女はやはり再び仮装束へと身を染めて海面へ降り立つ。そのまま月へ向かって歩き出した。

彼女は当てもなくただ海面を歩いていく。気づけば周りはずべて水平線で月も沈もうとしていた。彼女がこの瞬間に我に返ったのには訳がある。彼女の視線にあるものが映った。全身が黒くかつ金属のような光沢。見たことがないようなフォルムでもなぜか生き物であると確信できるその姿。深海棲艦が艦隊を組んで過ぎ去ろうとしていた。彼女の狩人としての本能が目覚める。

相手も気づいたらしく各々が砲門を向ける。しかし、すでに彼女の姿はなく唐突に一本の腕が舞い上がる。彼女の腕か。否、それはその艦隊の旗艦であったへ級の腕であった。すでに彼女は自身の間合いに入っていた。これで艦隊は総混乱。近接戦など一切考えられていない奴らの武装では彼女を攻撃しようとも仲間を巻き込んでしまうと躊躇ってしまう。しかし彼女は止まらない。尚も鉈を操りへ級を切り刻む。寸刻にも及

ばずして見るも無残なへ級の残骸が海に浮くこととなった。彼女の姿は返り血で染め上がり夜のせいで色こそわからないものの月の光でも返り血は鈍く光るのである。思わず深海棲艦ですら後ずさりしてしまう。

次に彼女はイ級を狙った。瞬きする間もなく近づく相手にイ級はわずかな思考でまといつてゐる装甲で受け止めることを選んだ。が、その決断虚しくまるで肉を切るかのようになり級の体が二つに切断され李。上位者の体すら難なく切断する狩人の仕掛け武器。深海棲艦の装甲程度訳なかつた。装甲が意味をなさないと悟つたのか逃走を開始した。しかしそんなことを許す彼女ではない。逃走を図る深海棲艦に片っ端から鉈を振り下ろす。残つてゐた深海棲艦は四隻。彼女は獣狩りでもあり、上位者狩りの狩人でもあつた。が、さすがに力では対応しきれぬもの数では対処のしようがない時もある。何とか三隻は狩つたが残りの一隻が早々に潜つて逃げてしまつたため取り逃してしまつた。

わずか数分の出来事。数分の喧騒が収まり再び静寂が訪れる。浮いてゐた残骸もゆつくりと沈みだした。周りに波のなくなると彼女はまたあてもなく歩き出した。彼女は先ほどのことを思い出してゐた。なぜか砲撃を躊躇つた。仲間の無残な死にざまに狼狽えた。頼みの綱が効かないと悟つた瞬間に逃走した、それもまるで恐怖にかられたかのように。深海棲艦があんなに人間のような態度をとるとは知らなかつた。いや、

彼女の昔の記憶ではやはり深海棲艦に感情の類は一切感じられていない。人間も新兵は感情が行動に出やすく熟練へになるほど行動には出なくなる。深海棲艦も同じだろうか。あれやこれやと考えているうちにだんだんと空が白んできた。水平線が太陽が昇り強烈な光が彼女を刺さんとばかりに照らす。彼女はまた歩みを止めた。

それまで望んでいたもの、取り戻さんとばかりにヤーナムを駆け回ったあの頃。それがいつからか獣を狩るために、上位者を狩るために、時には血に酔った狩人を狩ることが目的となったのはいつ頃だったろうか。今の自分はきつと血に酔っている。狩人が通ればきつと自分を狩ろうとしてくる。かつて求めたものがここでは毎日やってくる。夜明けがやってきた。

「暁……」

彼女の名前でもある現象をつぶやく。見慣れないものをみて少し眉を顰める。まるで夜明けを嫌うかのように今度は太陽を背に歩き出した。

もう何日も歩いた。夜も夜明けも何度も体験した。暁を何度も見た。いくつ艦隊をつぶしたか分からない。艦隊を見つけたとき彼女の瞳は希望を見出したかのように光り、狩りつくせばまた虚ろになり歩き出す。狩りの対象や自分に牙をむかんとするもの以外に反応しない彼女には数日前からずっと見られていることに気づいていなかった。

そして、前方から近づいてくるものの音にも。

「止まれ。」

前方から聞こえた声に彼女は顔をあげる。するとそこには一人に女性が立っていた。いや、一人ではないその女性含めて五人いた。彼女は女性の言葉に従い止まる。すると、その女性がほかに二人引き連れてやってきた。彼女はその女性を知っていた。昔の記憶が蘇る。女性の名は長門。そしてその両脇にいるのは吹雪と叢雲だ。長門たちは少し離れた位置で止まり、話しかける。

「…。単刀直入に聞く。貴様は何者だ。ここが日本の海域だとしているのか。」

「…狩人。」

「女の子?」

「しっ。」

「日本語が分かるのか。じゃあ次はその帽子とマスクを取るんだ。」

彼女はその言葉に従い帽子と布を降ろす。その姿に吹雪と叢雲は驚いた様子だった。長門は依然として平静を保っている。流石だ。記憶の中の彼女もそうしていつも厳格であった。それであって時折優しい物腰になるのだからみんなから好かれていた。かくいう自分もその一人であった。だから彼女が苦悶に満ちた表情を見せたときは心配し絶望したのを覚えている。そんな変わらない彼女が今自分の前に立っていた。

「……海上を立っているところを見る限り貴様は艦娘のようだが、あいにく『狩人』という名の艦娘は聞いたことがない。詳しい話は鎮守府で聞かせてもらう。抵抗しようなどと考えるなよ。もし抵抗する気がないのならその手に持っているものを渡し、我々の指示に従え。」

彼女はおとなしく長門にノコギリ鉋とエヴェリンを渡した。次に府引きと叢雲が近づいてきて「腕を後ろに」というので、後ろにやるとそのまま体ごと縛られてしまった。さらに手錠をはめたような音も聞こえた。これで両腕を完全に封じられてしまった。叢雲が背中を押す。なすがままにされるとポート——大発の前まで案内された。どうやらこれに乗れということらしい。少し狭い大発に座ると。先から伸びていたワイヤーを吹雪が自身に取り付けた。長門の号令で艦隊が出発する。吹雪が前進し、寸分遅れて大発が引つ張られる。艦隊は太陽を背にしたまますすんでいった。

艦隊の一人赤城は大発の右側で監視していた。自らを狩人と名乗る少女。赤城はこの少女に底知れぬ恐怖を抱いていた。が、決してそれを顔には出さない。あくまで平静を保つ。この少女に恐怖を抱いているのは何も自分だけではないだろう。恐らく逆側にいる加賀と長門もそれを感じているはずだ。現に二人ともちらちらと少女を見てい

る。吹雪と叢雲はずっと周囲警戒をしている。これと言って気にしている様子はない。この恐怖はきつとある程度実戦を体験したものにしかわからないのだろう。少女が顔を見せたとき駆逐艦の二人はその見た目に驚いていた。むろん自分も件の正体が少女の姿をしていたのには驚いた。しかし、それよりも驚くべきはその眼だ。生きているとは思えないほど濁った眼。その眼に気づいたとき何かを見たような気がした。とても、恐ろしいものを。とてもではないが根移譲できるものではない。あんなに恐怖を感じるのは初めてだった。姫や鬼級と対峙した時よりも純粹な、それでいて異常な恐怖を感じた。

その少女は先ほどから一切その体を動かさない。言葉の通り波で大発が揺れても一切体が動くことはない。潜水艦の娘たちから報告を受け数日前から加賀と交代しながら監視し続けた。観測機が撮った映像を見たときは戦慄が走ったのを覚えている。ただ歩いているだけかと思いきや深海棲艦に近づくや否や突撃先ほど長門に預けたあの武器で深海棲艦を攻撃しだした。少女は一切の躊躇なく武器をふるい続けていた。その中でも最も恐ろしかったのは空母機動部隊と主力部隊を無傷で壊滅させたことだった。敵の艦載機の攻撃をすべてかわし、戦艦の砲撃すら弾くことがあるル級の盾を一刀で切り落とす姿を見て言葉を失った。

その映像を見て直ちに提督に報告。何人かの艦娘も含めて会議した結果、接触し会話

が可能であれば拘束して鎮守府へ移送。こちらを鎮めんとした場合はその場での処分が決まった。結果として、その対象はこうしておとなしくこちらの指示に従っているわけだが……。少々の少女に気を取られすぎてしまったのか出発も早くに鎮守府近海へ戻ってきた感覚がした。

第2話

連れて行かれて数十分後。大きな建物群が見えてきた。あれが鎮守府だろう。昔より規模が大きい。彼女はそのままうちよつと過ぎたところで、ほかからは死角なのだろう。ドッグへ連れて行かれた。ドッグで待つていたのは数人の艦娘。その艦娘が立っている後ろに扉が見える。きつとその扉の先が目的地なのだろう。艦隊が止まり長門が立っていた艦娘の一人と言葉を交わす。

「準備は……」

「大丈夫です。…報告を……」

コソコソと話す二人。耳をすませば誰でも聞こえそうなものだが彼女は聞く必要はないと判断したようだ。話が終わると彼女は立たされついてくるよう指示される。案の定、一人が扉を開け長門はそこに入っていく。彼女もついていく。後ろから艦娘がもう一人ついてくる。その艦娘のことも彼女は知っていた。赤城だった。扉の先は真つ暗で少し埃っぽい。そう長くついていくわけでもなく扉から少しまっすぐ行った先の階段下が目的地だった。コンクリートが撃ちつばなしの部屋で光源の類はなく部屋の上部に小さく採光窓が取り付けられているだけ。鉄格子で仕切られているスペースがい

くつかある。なるほど、禁錮室か。彼女は、その一つに案内させられた。

「私が見張っているから、提督を呼んできてくれ。」

「わかりました。」

長門の命で赤城は別の扉から出て行った。長門はさっきの言葉通り彼女が入っている牢の前で立ち始めた。彼女も長門も何も話さない。彼女は長門との邂逅の事を思い出していた。あの時長門が彼女に行つた質問のことを彼女はいい加減だつたように思えた。たつた二、三の質問で結論を出した。彼女はただ従つたにすぎない。そも、長門は彼女のことを憶測で艦娘と決め、結局それを確認することはなかつた。言葉が通じることだけを確認したかつたのか。と、すれば艦隊は最初から彼女を鎮守府に招き入れるかあの場で処分するのが目的だつたのだろうか。

「長門。」

「提督。こつちだ。」

彼女の思考は早々に打ち切られる。赤城が出て行つた扉から男性が入ってくる。長門が声をかけたように彼がここの提督のようだ。その後ろから赤城と加賀も入ってくる。提督は彼女の牢の前で立つた。

「やあ、初めまして。僕がここの提督だ。君のことは報告書でよく知っている。：君の目的は何だい？」

「…ない。」

「目的もなしに深海棲艦を蹂躪したのかい？」

「…。」

「おい、答えろ。」

「まあ、まあ。えーつと？君は艦娘なのかな？映像も見せてもらったけど海面に立っている時点で人間ではないはず。でも私も長年提督をやってるけど君みたいな服装の艦娘は見たことがない。」

「…昔。」

「昔？」

「昔はそうだった。」

「…じゃあ、本当の名前。艦娘としての名前教えてくれるかな。狩人つてのは違うんでしょ。」

「暁。」

提督はずつと優しい顔をして話しかけていた。が、彼女が顔を変えずに相手を驚かせようという気など全くなく、まるでおまわりさんに名前を聞かれたときのような彼女の言葉にその顔はすこし崩れることとなった。

「暁…!？」

長門と赤城が驚愕の顔をあらわにする。それもそうだ。彼女たちが知る暁と、今日の前でそう名乗った少女とは似ても似つかないのだから。彼女たちの知る暁は決してこんなにも暗い死人のような、この世のものではないような雰囲気を漂わせるような少女ではない。

「…それは本当かい？」

「ええ、本当。」

「貴様嘘をつくな！それはいくら何でも無理がある！」

「私もそう思います。提督やはりこの者は深海棲艦の…。」

「いえ、赤城さん。それではわざわざ深海棲艦を蹂躪する理由がありません。」

「なんだ加賀。じゃあ貴様はこいつが嘘をついてないというのか。」

「そういうわけではありません。彼女が本当に暁なのかは疑わしいことです。ですが、深海棲艦の仲間というのもおかしいと思います。」

「僕もそう思うね。何、疑わしいなら確かめてみるだけだよ。」

「確かめるとは？」

「艦娘つてのはそれ専用の艦装を持っているだろう。長門が長門専用の艦装を持っているようにね。専用とはいっても長門の艦装は長門ではあればだれでも作動するからそれをこの娘にもすればいい。加賀、明石から暁の艦装借りてきてくれ。」

「分かりました。」

加賀が部屋を出る。提督、長門、赤城は牢から少し離れて話し出した。やはり、彼女はその会話を聞く気がなかったため何を言っているのかはわからなかったが、大方彼女自身のことを話しているのだろう。加賀案外早く戻ってきた。更にはその後ろにもう一人いた。その艦娘のことも彼女は知っていた。明石だった。

「すいません。どうしても言うので。」

「いや、明石には話しているから大丈夫だよ。それよりも工廠はいいのかい？」

「はい！夕張産に頼んでるんで大丈夫ですよ。彼女がそうですか。」

「ああそうだ。本当かどうかは今から決めるがな。」

長門が牢を開け彼女を外に出す。そして腕の解かれた。が、長門の手は彼女の肩に置かれたままだ。警戒されている。逃げ出すつもりなど毛頭ない彼女は加賀に促されるままに艤装を取り付ける。

「よし、じゃあ艤装を起動してみて。それでその艤装が動き出したら君は暁だと証明される。」

彼女は艤装を起動させた。本人にしか聞こえないほどのモータ音が聞こえた。体内を血液とは別のものが流れていく感覚を覚える。それから数秒後その違和感もなくなくなり、とうとう彼女はその艤装を操作しだした。主砲の砲塔回転、魚雷発射管の操作。後

ろの錨のロツクも外し起用に回つて伸びた鎖をつかんだ。これで彼女が正真正銘駆逐艦暁であることが立証された。

「これは……どうしましょう。」

「うーん。確かにこの娘は暁のようだね。……長門、後で何人か呼んでくれ。」

「了解した。」

「あ、あの。拿捕した武器つてのはどこにあるんですか？私それが気になつて気になつて……。」

「ああ。それならここにあるが？」

「うわー。これですか。これであの深海棲艦を真つ二つに……。でもなんかちよつとごついでだけでそれほど切れ味が良さそうには……。こればらしてみてもいいですか？」

「……いいんじゃないか。」

そんな声が聞こえたのはちょうど加賀に手伝つてもらつて艤装を外し終えた頃だった。きつと加賀には急に彼女が消えたように思えただろう。そしてその場にいた全員が見たのは明石の首元に突きつけられた剣と長門に向けられた銃口だったろう。

「だめ。それをバラさないで。こつちならいいわ。あなたも勝手に許可を出さない。拿捕した武器の扱いは提督が権限を持つてる。艦娘は提督がその場にいない、かつ判断を急するとき。……今はどつちでもないわ。」

「ウヒっ!?…え、あ、ありがとう?」

「うっ…す済まない。…というか!」

明石はギクシヤクしながら受け取る。

「な、なぜそんなものを持っている!あれで全部ではなかったのか!」

長門は激昂して問いたです。しかし、彼女はキョトンとしている何を言われたのかわからないような様子だ。

「ええい!いいから持つている武器を全部出せ!」

仕方がないので彼女は持つている仕掛け武器を全部出した。ノコギリ槍にルドウィークの聖剣、慈悲の刃等々途方もないほど出てくる。どう見たってその体軀では納め切れない武器の数々。その場にいた全員が言葉を失った。

「…全部出したわ。…没収?渡しははするけどそれ以外バラさないでね。大変だから。」

机には収まりきらずその周辺にゴマンと置かれた武器を前に彼女はぶつきらぼうにいう。長門は動揺しながらも応えた。

「…あ、ああ。これで全部だな?貴様の言うとおりに没収する。扱いは今夜決めるから、今夜はここで過ごせ。」

彼女は頷いて自ら牢の中へ戻っていった。長門が鍵を締める。

「…これどう運ぼうか。置く場所は…数が多いから工廠に持っていくしかないかな」

「ですね。夕張さんはこの件のことは承知で？」

「あ、はい。私と一緒に話だけは聞いてますよ。」

「となると問題は、これを他の娘たちにバレずに持っていくことですね。」

「この件を知っているのはあと何人だ。」

「あとは、吹雪さんと叢雲さんだけです。」

「じゃあ、その三人にも手伝ってもらおうか。バレないようにね。」

「了解した。」

それぞれ仕掛け武器を運び出した。途中から吹雪と叢雲も手伝いだした。やはり彼女の顔を見ると少し顔が歪む。彼女が暁であったことを聞いたのだろうか。最後の一つを持っていくとき長門が言った。

「…貴様は今、特別処置で捕虜の立場にいる。この場監視の目は入れないが外はそうではないからな。絶対に抜け出すなよ。処遇については明日報告するからな。」

そう言つて部屋を出ていく。結果としてこの場にいるのは彼女ただ一人だけとなった。外から足音が遠ざかっていく音がする以外何も聞こえない。採光窓から入ってくる光が埃を照らす。簡易的な椅子やテーブルがあるが彼女は床に座り壁にもたれた。

ここには変わるものがない。必然的に視線は埃を照らす光とその光が入ってくる採光窓に行く。太陽の光なんてものを感じるのは本当に久しぶりだった。見れても悪夢の中でモドキの光が、ただそこが明るかっただけだった。だが、彼女には太陽に出会った感動は薄かった。もはや、太陽を見ることが感動には値していなかった。

扉が開いたときに彼女はこの世界を再認識した。誰か入ってきた。入ってきたのは吹雪だった。

「えつと…夜ご飯持ってきました。」

吹雪はお盆を持っていてその上には軽食が乗っていた。吹雪は近くのテーブルにそれを置き机の上のランプもつける。この部屋の唯一の光源。それを持って牢の中に入った。

「ここに置いときますね。30分後に取りに来ます。……。」

「…何かしら。」

彼女は吹雪の言葉に返事をするつもりはなかったが、吹雪がやけに彼女の顔を見つめるため、つい彼女は声をかけてしまった。

「ああ、いや。こうしてみると本当に暁ちゃんなんだなあと思って。」

「…私は暁だもの。」

「でも雰囲気とか全然違うから。」

「…そうかもね。」

「あ、じゃあ。また後で。」

吹雪は部屋を出ていった。彼女の前にある食事。狩人に食事は必要ない…と言ってもそれをあちらが知っているはずもない。何も必要ないからと言って狩人が飲食ができないわけではない。獣ではあるまいし。ただ、普段口にしてきたものに比べて自身はその昔よく食べていたものは不思議と何か落ち着く感じがするのだった。30分後やはり吹雪がやってきた。

「あれ？着替えたんですか？」

「ええ。ちよつとね。改められないと分からないというのは少し寂しいから。」

「あはは。思ったより人間味がありますね…あ、そ、その人間ぼくなくとかじゃなくて、その、映像で見たときはなんか機械みたいで感情がまるで感じられなかったから、寂しいって思うんだなあと思って…。」

「…そうね。私も不思議に思うわ。」

もはや彼女には人間である要素などなかったはずだった。少なくとも夢以外では感

情を捨てたはずだった。ここに来てから不思議といろいろな感情が浮かび上がってきた。これも、ここが昔慣れ親しんだ場所と似ていて昔の仲間と似た人と話しているからなのだろうか。吹雪は空になった皿と一緒に机を外に出し「消しますね。」という声でランプを消した。「お休みなさい」と言つて部屋は再び暗闇が閉ざす。

彼女は珍しく意識を保つていた。何も聞こえてこない。ただ空気の音が聴こえてくるのみ。こんな夜は初めてだった。ヤーナムでは必ず何か聞こえてくる。獣の足音、うめき声、市民の声、何か金属を引きずる音、肉を引きちぎる音、いろんな音が聞こえた。こつちに来て波の音は聴こえるし深海棲艦の声だつて、何を言つてるかはわからないにしろ何か話しているような音が聴こえる。故に彼女は恋をした。この静かな夜を欲した。彼女にとってこの夜は夜明けよりも大切なものになった。もつと感じたい。認知したい。：もつと瞳を得てこの夜を認識していたい。：医療協会の気持ちもこのよいうなものだったのだろうか。彼らもまた何かのために瞳を得ようと。だが、もう少し見た目を気にしようとは思わなかったのだろうか。今となつてはもう分からない。彼女が全て狩ってしまった。もう獣しかいなかったから。さっきの行動もこの静かな夜のせいかもしれない。

彼女は結局、再び窓から月の光ではなく太陽の光が差し込むまで夜を楽しんでいた。遠くから喇叭のような音がする。起床時刻なのだろう。恐らく6時。そこからもうし

ばらく経ったごろ遠くから足音が近づいてくるのが分かった。吹雪よりも早い。きつと長門とか加賀あたりだろう。扉を少し乱暴気味に開けたのは長門だった。手にはお盆を持っている。恐らく彼女の朝食だろう。長門はテキパキと机にお盆を載せ牢に入る。

「食べながらでいい、聞け：何だ貴様着替えたのか。どこから持ってきた。」

「最初から持ってた。誰かさんが信じれないって言うから。」

「…はあ。もういい。貴様の処遇が決まったから今から聞け。」

第3話

彼女は今、ある部屋の中にいた。

「…案外広いのね。」

「今は、ここしか空いてないからな。」

「部屋の内装はしっかりしてるのに物置みたいね。」

「実際物置だ。確かにもとは客室として使っていたが別に専用で作ったし、あっちのほう而立地とか警備とかしやすいから。」

確かに今彼女がいる部屋は鎮守府の中でも端っこの方だ。この部屋がある棟は二部屋ずつの二階建てで彼女は二階にいた。なぜ彼女がこんなところにいるのか。それは今朝長門から彼女を捕虜から艦隊へ編入することに決めたと伝えられたからだ。しかし、ここの提督は彼女を『個人的』に使いたいらしく存在を伝えられている数名以外には知らせずに箝口令もしいたらしい。

「…『個人的』に使いたってどういうことなの？」

「…作戦も近いからこの場でも話しても構わんかな。一週間後大規模な作戦がある。ほかの鎮守府と共同で進めていく。」

「ふーん。私は大きな作戦には参加したことないからわからないけどほかの鎮守府と合同なら相当ね。」

「ああ。しかも今回の作戦は大本営主導だ。ここみたいな中規模から呉や佐世保なんかも参加する。」

「あら、それはまさに相当ね。で？私を使う理由と関係はあるの？」

「うちの提督は戦果を求めている。もつと権限が欲しいらしい。こういった大規模作戦はうまくやれば戦果も大きくなる。だが、呉や佐世保みたいところが参加するとしたらとそういうのはかなり難しいからな。」

「ふーん。で、私を利用しようって？」

「そういうことだ。今回の作戦において開始前にお前には前もって出撃してもらう。」

「つまりは私という秘密兵器で戦果をぼろ儲け？」

「まあ、そういうことだな。幻滅したか？」

「いいえ。そんなことで幻滅はしないわ。それに私はただこの人たちさえ知らないだけの存在だけでもうここの艦娘。別に横取りとか不正でも何でもないわ。この鎮守府所属の艦娘が深海棲艦と交戦し、それに勝つ。…ね？それは立派なこの鎮守府の戦果。」

「…そうか。」

「でも、私の分をどうやって戦果に加えるのかしら?…大本營発表?」

「まさか。それについては心配するな、ちゃんと考えてある。…潜水艦にも一人息をかけたほうがいいな。」

「ま、そういうことならお任せするわ。私の仕事はただ深海棲艦を狩ること。…あなたは提督のやり方に疑問は持たないの? 私が知っていた長門はこう、不正は全部許さない! って感じだったわ。」

「…なに、私たちはただ提督に従うまでだ。今こうやってお前と普通に話しているのも提督がお前を仲間と認めたからに過ぎない。…確かにほかの私がこのことを知れば絶対に許さなかっただろう。貴様は知らないだろうが同じ長門でも鎮守府によって多少の違いは出るものなんだ。私はただ『そういう』長門なだけだ。」

「…。」

「…実を言うのだな、お前の存在を知らせないのにはもう一つ理由があつてな。ただ単純に同じ名前と同じ姿のやつがいると混乱が生じかねない。」

「…まともね。て言うかいの? 暁が。」

「ああ、いるぞ。むしろ、こつちが先だ。さつき話したことは後で思い付いた。…おつともうこんな時間か。すまないがそろそろ行かなければならない。あとで吹雪と叢雲を向かわせるがそれまで一人で片付けててくれないか。」

「いーえ、部屋を用意してもらっただけでも感謝よ。」

長門はそれを微笑で返し小走りで部屋を出て行った。

部屋に居るのは彼女一人になった。改めて部屋を見渡すと至るところにダンボールが積まれている。机の上、ベッドだったのだろう土台の上にも。唯一ある窓に近付き開ける。見える風景は一面の海だった。少し体を乗り出し右を見ると小走りの長門が少しだけ見えた。体を戻した部屋を見る。片付けると言つてもどこに置けばいいのか。隣の部屋でいいのだろうか。と、部屋を見渡すと置かれていた棚の後ろに周りとは違う色の壁が見えた。棚を動かすとそれはドアであった。特に鍵穴も見当たらない。試しにドアノブを回すと錆びていたせいか少し抵抗があつたが割とすんなり回った。ドアを開けるとそこは小部屋になつていた。光源を探すと部屋の真ん中に豆電球がついている。紐を引つ張るとまだついた。小部屋は本当にただの部屋で、前からおいてあつた荷物以外何も無い。こっちのほうに物置に思われる。その荷物というのはどうやら本のようなだ。物置の外にあつた棚は本棚として使えそうだし、2台あつたのでこの本と交換する形で置いていけば片付くだろう。というわけで、早速開始する。納められていた本は意外にも彼女が昔艦娘であつた頃に話題となつたものが多かつた。本の束はそれぞれジャンルがバラバラだったがとりあえず本棚に納め紐を切る。それを繰り返してちようど本棚2台に全部収まつた。と、ここで部屋のドアが開いた。

「手伝いに来たわ。」

「どう？片付け。」

入ってきたのは吹雪と叢雲だった。

「あんまりね。荷物をこつちに入れるから持つてきてくれると助かるわ。」

吹雪と叢雲が近くにあつたダンボールを持ち上げる。ものが詰まっているのか重そうだ。彼女が物置まで誘導する。それから彼女もダンボールを物置に納めていく。三人でやったおかげで、早々に終わった。

「ありがとう。早く終わったわ。」

「ベッドのシーツは大淀さんに頼んでおくね。」

「…片付くとここ広いわね。流石元客室。」

「なにー叢雲ちゃん。羨ましいの？」

「ちよ、や、やめてよ。人前で。」

「えー。いいじゃん曉ちゃんだよ。」

「い、いや、でもこつちの曉はほら、雰囲気か…。」

「いいのよ。わざわざ私を曉と呼ぶなくても。好きに呼べばいいわ。」

「ああ、いや。別にあなたがどうだからとか言うわけじゃなくて…あなたは曉だから、ね。」

「曉ちゃんは家具はいる？」

「家具？」

「うん。椅子と机とベッドとあとは本棚2つだけだから。他にいるものがあれば大淀さんに言っておくけど…。」

「…：今は必要なものはないわ。ありがとう。」

「そっか。また後で必要になったら言っておね。」

「こんなにも人と会話をしたのはいつぶりだろうか。こんなにも獣を恐れていない人と話すのは。少なくともヤーナムに来てからは一度もなかった。こうして二人で話しているときを思い出す。」

「あ、姉さん。そろそろ昼食の時間よ。早くしないと席埋まるわ。」

「うん。あ、でも曉ちゃんはどうかするの。」

「どうするのって、長門さんに許可取らないと外に出せないわよ。」

「いいのよ。狩人はそんなに物食べないから。」

「でも、食べれないわけではないでしょ？」

「…：まあね。」

「でも、どっちみち長門さんに許可取らないと…。」

そんな押し問答が続いていると階段を登る足音が聞こえてきた。しかも二人分の。

来たのは長門と、スク水を来た艦娘だった。

「お。お前たちまだいたのか。食堂の席が埋まるぞ?」

「あ、長門さん。あの、暁ちゃんを一緒に連れてはだめですか?」

「駄目だ。申し訳ないが出来るだけリスクはゼロで行きたいんだ。食事は後で持つていく。」

「そうですか…。」

「そんなもんよ。ほら、早く行かないと。」

「うん。またね、暁ちゃん。」

「随分と仲良くなったようだな。」

「そうね。駆逐艦同士、自然と仲は良くなるものね。」

「『駆逐艦』ね。…確かにそうだな。」

「ちよつと！イクのこと忘れないでほしいのね!」

「おつと、忘れてた。」

長門の後ろから出てきたのは先程見えた青髪のスク水。さっきの二人のことですっかり忘れていた。しかしそのスク水の姿を見たときにふと、昔のそいつのあだ名を思い出してしまった。

「あ、泳ぐ18禁。」

「紹介するこいつは…なんて？」

「ちよ、ひどいのね！」

「あ、ごめんなさい。ちよっと昔の記憶が。」

「どういう記憶してるのね！」

「あー。うん。つづけるぞ。こいつは伊19だ。」

「第一印象最悪なのね。」

「ごめんなさいって。」

「…見た目は本当に暁ちゃんそっくりなのね。」

「そっくりじゃなくて本人だけどね。」

「今回の作戦でイクにも手伝ってもらうからな。一応顔合わせで来てもらった。あとは伝令が一つ。今夜早速作戦の打ち合わせをする。消灯時間を過ぎてからやるつもりだが一応誰か呼びに来てもらうからそれまでここにいてくれ。」

「…了解。」

「じゃあ、またなのね。」

二人も出て行って再び一人となった。彼女を迎える部屋はさつきと違って片付いている。静寂が彼女の世界を包み込む。ここにきてから少し話過ぎたように感じた。こんなところでなきや話すことはない。何回もそう感じる。もうすっかり太陽がある生

活に慣れてしまった。一週間後に行われる大規模作戦。そこで行う狩り。あと一週間待たなければならぬ。昔の経験からして後の一週間毎日作戦会議が行われるだろう。他の鎮守府とも協力するとなれば猶更。さらに彼女を一切の味方に知られないように暴れさせる。それはもうかなり緻密な作戦が要るだろう。そうぬけぬけと向けさせるものではないかもしれない。いや、終わったらそのままぬけだせばいいか。幸いこの部屋唯一の窓は海を向いている。この建物自体海にかなり近い。今日は久々に狩りができそうだ。ああ、その前にちゃんと狩り道具を返してもらわなくては。

気づけば本棚の前で一冊の本を手にしていた。昔、刊行されて一回は読みたいと思っていたが結局読むことのできなかったこの本。まだ初版だった。残念ながらそんなに人気がなかったのか、それとも発売されて日が浅かったのか。側面について埃を払って改めてみる。この本を読もうと思った理由はよく覚えていない。確かにカバーに描かれている絵は彼女の好みであったが別に理由があった気がするのだ。思い出せないまま椅子に座りページと一つめくる。20章に区切られているらしい。もう一枚めくる。主人公が出てきた夜の公園でベンチに寝そべっているらしい。昔の私はこんなに活字を読むことを好んでいただろうか。今、こうやって読んでるのであればきつと当時からその兆候はあったのだろう。あまりに没頭したため後ろでドアが開いた音に気づいていなかった。

「…本を読むのですね。」

「……………ええまあ。」

主人公が夜の棧橋でブレイクダンスをしながら大福を食べているところで声をかけられた。加賀が隣で昼食を持っていた。

「ここに置きますね。」

「…VIPにでもなった気分だわ。」

「そういうのであればここはもとはそのVIPのための部屋ですからね。」

「でも私はVIPではないわ。私は提督が所持する弾丸よ。」

「…そうですか。20mmそれよりも何倍も大きな弾丸ですね。むしろ砲弾では？」

「あら。私はそんなにも大きいのかしら。」

「ええ。あなたはとても大きいのですよ。だから注意して取り扱わなきゃいけない。

間違っても暴発させないように。」

「買いかぶりすぎよ。」

「いいえ、買い被りではありませんよ。1時間後に取りに来ます。」

昼食は鯖定食らしかった。残念ながら本を読みながら食べるものではなさそうだ。

彼女は昼食を食べながらさつき読んでいた本のことを考えていた。なぜ主人公はあんなにブレイクダンスにこだわるのか。彼にとってブレイクダンスは月よりも大事な

のだそうだ。彼女には理解しかねた。なぜ月よりも大事なことがあるのだろうか。そんなものがあつていいのだろうか。しかし、実際に彼には月よりも大事にしているものがあるのだ。そうすると、月よりも大事なものがある人は存在するのである。

さて、昼食も食べ終わり加賀が食器を持つて行つたあと、できることは何か。外に出ることはできない。狩りに行くなどもつてのほか。つまりは読書しかない。彼女自身まさかこんなにも本を読むことに熱中する日が来るとは思わなかつた。今度、ビルゲンワースや教育棟から本を拝借してみようか。読み進めて数十ページ。とうとう彼も恋をした。結局のところ彼も人間。その彼の恋人は月が好きだそうだ。ある日は恋人と彼の親友とともに夜の砂浜を歩いていた。突如彼はブレイクダンスを始める。親友は『またそんな意味のないことを』という、恋人は『意味がない行動なんてない』という。恋人は月の下でブレイクダンスをする彼が好きなのだそうだ。だから、このブレイクダンスには恋人を喜ばせるという意味があるという。親友は『意味がない行動だつてあるに決まつてるだろう』と反論する。恋人は『たとえ誰も意味がない行動だと思つても本人にはきつと意味があるはずだ』という。『本人が無意味だといえど』と聞かれると、『それは本人にすらわかつてない意味がある』のだという。

ふむ、なかなか面白いと思う。突拍子もない言動が多いこの本だが、不思議と理解

できてしまう。ふと、自身を振り返る。『意味のない行動などない』。果たして、過去にやった行いのすべてに意味があっただろうか。ふりかえってみれば意味もなく豚のケツを掘っていたような気もするがきつとあれにも意味があるのだろう。『本人にすらわかってない意味』が。そろそろ終盤かと思っていたそのころ後ろのドアからノックが聞こえた。返事をするが入ってきたのは吹雪だった。

「迎えに来たよ。」

窓を見るといつの間にか外は真つ暗になっていた。

「あら、もうこんな時間なのね。」

「もう消灯時間は過ぎてるから大丈夫だと思っけど一応ね。」

「分かってるわ。」

あともうちよつとで読み終わるはずだったので少しもどかしいがこの後の会議も重要なのでとりあえずは一度お預けである。本を閉じ、電気を消して二人暗い廊下を歩きだした。

第4話

案内されたのは執務室と書かれた部屋。入るとそこには見慣れた者ばかりいた。

「連れてきました。」

「うん。それじゃ始めようか。」

長門が持っていた筒状の紙を広げる。海図だったようだ。

「私たちの鎮守府はここだ。担当海域は明日大本営から通達が来るはずだ。」

「それで、僕の予想としては担当海域はここらへんだと思うんだよね。」

提督が、取り出した赤ペンで丸を付ける。

「…思ったより狭いですね。」

「この戦力が整いだしたのはつい最近です。まだ定期報告で戦力の増加を通達できていませんからね。」

「問題は、暁をどう使うかなんだよね。」

「この範囲だと、今の戦力で十分カバーしきれますね。」

「この予想された範囲外でやってもらうのが必須だな。一番いいのはこのあたりだろうか。」

長門が青いペンで新しく丸を付ける。

「そこは、最近レ級や姫級以上の深海棲艦が目撃されるところですね。」

「ああ、まだこの海域がそう言った深海棲艦の拠点になつて確証がないからまだどこにも報告はしてないし、暁を発見したところから逆方面だからきつとまだいるはずだ。」

「昨日の偵察の報告を見る限りでは、その海域が拠点となつて居るのはもう確實そうだから、確かにそこがベストだね。」

「それでは、その時の編成としてはやはりこの海域の担当は私と加賀さんが？」

「そうだな。ついでに吹雪を入れよう。私は…恐らくこの本来の海域の主力をたたく部隊に入るのが自然だろう。できるだけ時間稼ぎをしてここの主力にみんなの目を注目させたほうがいいか。」

「じゃあ、私は必然的に赤城さんたちとは逆方向に進む部隊のほうがいいわね。」

「イクはどう動けばいいの？」

「ああ、イクには単独で暁への伝令を頼みたい。」

「伝令？」

「うん。暁が一定の戦果を挙げた後に芝居をかけるからね。流れとしては暁が一定の戦果を挙げた後イクがそれを赤城に報告。芝居のために艦載機をあげるからそのこと

を暁に知らせて暁は撤退してもらう。そういえば、暁は一度にどれくらいの敵に対処できてる？」

「ん…私？別に何体でも？」

「あいまいだな…。」

「まあ、彼女が圧倒的な戦力であるのは間違いないですし特に問題はないでしょう。」

「…ねえ、私の道具そろそろ返してくれない。」

「道具？ああ、あれのことか。そうだな、明日明石に返すよう言っておくよ。」

「今じゃダメかしら。」

「今日は明石呼んでないからもう寝ちゃってるだろうからね。申し訳ないけど我慢してもらえるかな。」

「今日は特にこれ以上話すことはなかった。また明日会議をするらしい。けつよく今日中に狩り道具が帰ってくることはなかった。素手でできなくもないが圧倒的に効率が悪い。失意のまま部屋に戻ると物置のドアが開いていることに気づいた。」

「…。」

一瞬警戒する。しかし人間の気配も獣の気配もない。ただの閉め忘れかと近づくと中に灯されていない灯りがあつた。

「…なんでこんなところに。」

疑問には思ったがとりあえず灯りをつける。使者が出てきて祈り始めた。見慣れた光景だ。なぜこんなところに灯りが出てきたのかは謎だったがこれで夢に帰れるのは便利だ。道具もないので一度戻って適当にノコギリ鉋でも買おうかと思つたがふとあるものを思い出した。今まで使つたことはないが一応使えないことはない。水銀弾消費が激しいのでせいぜい一艦隊が限界だがまあ、狩りができるなら何でもいい。そもそも今日はあまり月が見えない。そんなにいい夜にはならないだろう。

唯一の窓から外に飛び降りる。直下の狭い建物と海の間部分に降りた。そこからまた降りて海に立つ。何歩か歩いてから振り返つた。やはりいる。吹雪と会議に行つた時からアメンドーズがずっと張り付いていてるのだ。今も同じ体制で建物のほとんどを覆うようにして張り付き彼女をじつと見つめている。奴は彼女を殺そうとはせずただじつと見つめているだけのようだ。奴らにとって彼女はもはやただの狩人などではない。もはや彼女は奴らを狩ることさえできる。ゆえに彼らは彼女を監視する。監視したところでそれがいつたい彼らにとって何になるのかは一茶不明だが、ただ見ているのだ。彼女は早々に思考を打ち切り歩き出す。せめて今日一番の狩りとなるように。

ああ、いた。艦隊がいた。獣だ。獣がいるぞ。今日は夜だ。獣狩りの夜なんだ。月も

二つある。奴もまたそこに存在する。血に酔うため、狩りをする。青ざめた血を求めるのだ。血を恐れてはならない。全うせよ。しかし、今夜彼女は祈りを行う。ああ、医療協会よ。汝らは素晴らしきものを生み出してくれた。はるか彼方への交信。それは必ずしも失敗ではなかったのだ。力だ。この交信は特別な力なのだ。だから彼女は祈り、交信する。

彼方への呼びかけを

彼女の周りに光弾が浮かぶ、数秒ののちすべてが艦隊めがけて飛んで行った。呼びかけを行い応じたのは上位者ではなく星そのものであった。その星は本来この場で存在などできないものだ。ゆえにその形を保てるのは数秒。直後に爆発を起こす。何も知らない艦隊は光弾を食らいその爆発も受けてすべてが吹き飛んでしまった。原型を残したものなど何一つない。すべては星の爆発とともに消え去ったのだ。

……というわけでもないらしい。彼方への呼びかけなんて初めて使った。一応一度は使ってみたかったので神秘を鍛えはしたが、確かに威力は絶大で直撃したものはチリになったし、爆風で十分吹き飛んだ。それでも外したり中途半端で生き残ったものがない。しまった。武器なんて持ってきていない。最悪素手で殴るしかないだろうか。

相手には、ヲ級がいた。夜中だし艦載機は出さないだろうと思っていたがなんと普通

に発艦してきた。まさか獣狩りでヤーナムを訪れている間にこんな個体が出てくるのは。艦載機からの攻撃をよけるのは簡単だ。しかし狩るのは難しい。武器の類はいまだに没収されたままだし、なんか手元に残しているものは……あ、あった。こんなものがあった。

彼女は懐からずさんに止められたはさみのようなものを手にはめた。

艦載機が爆弾を落とし至近弾、もしくは直撃したのかヲ級から彼女は水柱で見えなくなる。攻撃を続けるべきか否か、水柱が崩れ相手の様子が見えた瞬間に判断を下す……はずだった。水柱に穴をあけて突撃する一つの塊があった。艦載機の攻撃をやめる判断と相手を確認してから判断を下すという思案の間に起った出来事にヲ級は水柱が収まってから判断しようという考えを頭に残したまま本能で防御態勢をとった。頭より上のものが強く後ろに引つ張られる感覚がした。予想以上に強いその衝撃はヲ級を後ろに引き倒した。確認しなくともわかる。格納庫がやられたのだ。その証拠に頭の上がかかなり軽くなった。今、自分は無防備となった。護衛の仲間もみな中破以上の損傷を受けている。この艦隊の旗艦としてヲ級は被害を最小限に食いとどめるため撤退を決意した。すぐさま残りの仲間へ撤退の指示を……

——
ツツツ!!!

咆哮だ。なにか吠えた。聞いたことのない鳴き声だ。仲間の声でないことは明らかだった。では、この声の主は……？それは、予想だにできなかった、しかしありえたものだった。だって、それは到底艦娘とは思えないものだったから。雲から月が開始めた。格納庫がないヲ級にとつては今まで以上に景色がよく見えただろう。ゆえに月光に照らされたそれをはつきりと見たはずだ。片手には動物の手をまねたようなもの。もう片方には動物同然の腕。顔を深く覆ったその衣装でうなだれているせいで表情は全く読み取れない。しかし、ありえないほどに美しい月がそのシルエットをはつきりと映し出す。

また、吠えた。今度はその主も一緒に。やはりそれが発していたものだった。飛び込んできたソレは両腕を広げ、大方人の形をしていればすることはなさそうなフォルムだった。護衛の一隻が標的だった。もはや動くことしかできなかったその仲間は避けることなどできるはずもなくソレの餌食になった。一振りすることに舞い上がる仲間の体液。装甲がまるで役目をはたしていない。その光景はヲ級を含め艦隊の全員をくぎ付けにするには十分すぎた。同族にしか聞こえないおぞましい悲鳴が止んだ時、ヲ級は再び撤退命令を出した。仲間が撤退を開始する。ソレがまた飛んだ。今度は自分であつた。今度は杖を前に出して受け流そうとする。だが、それがいけなかった。杖で防御姿勢をとつた。ゆえにヲ級は迫りくるソレをまじかではつきりと見てしまった。目

彼女は理性を保っている。故に目の前に浮かぶ物体を眺めていた。少し前聖杯ダンジョンから持ち出した獣の爪。恐らくそんじよそこらの人間が使えばたちまち理性を失ってしまうであろうこれは彼女のような狩人だからこそ扱えるものだ。この浮かぶ物体は彼女が首を飛ばす前に頭が吹き飛んだ。この物体は彼女を見たらしい。彼女を理解しようとしたそうだ。理解できるはずのないものを理解しようとした慣れの果て。この物体には啓蒙が足らなかつたらしい。今日はもう止めしよう。月も隠れた。残党も狩った。今夜はもう狩る必要もない。彼女は来た道に戻っていった。

アモンドーズはまだいた。相変わらずその視線を彼女に投げ続けている。彼女は奴を無視して部屋に戻っていった。ただもし奴が何か邪魔をするようであれば即刻狩つてしまおう。早々に狩りを切り上げたせいで窓の外は暗く今日の月は少し欠けた様子を見せている。きれいな薄い薄い青色だ。彼女は血に濡れた狩り装束から着替え、制服で椅子に腰かける。海面と水平線、その上に位置する月。なんとも綺麗なものだ。それに加えられる静寂。ここなら奴の視線も届かないのである。彼女はそのまま月が水平線に近くなるまでただひたすら月を眺めているのであった。

そうして月も沈みかけたころ彼女は灯りのことを思い出した。物置に行けば灯りが

物悲しく光っている。どれ、そろそろ一回戻ってもいいころかもしれない。

目を開ければ目の前にはあの花畑が広がっていた。後ろにはあの石碑が立っていた。門を開け家に入る。

「ああ……狩人様。」

何時も通り彼がそこにいた。彼女は彼に微笑みを見せる。

「ええ。とても楽しいの。新しい発見もあったわ。上位者狩りよりも楽しいこと。」

彼は彼女の頭を撫でる。

「うふふ。これは私の昔の服よ。狩人様と初めて出会ったときに来ていた服。……そうね。あの頃からずいぶん変わってしまった。でもそれは狩人様も。昔の狩人様はかわいいなんて絶対行ってくれなかったわ。」

彼は彼女の言葉に何も答えるそぶりが無いが、ただひたすらに彼女の頭を撫で続ける。

「……故郷というものは私を戻してしまう。少し、人間に戻ったわ。それがいいことなのかはわからない。複雑な気持ちになるの。」

彼は彼女の頭に手を置いたまま動きを止めた。

「えへへ。そうよね。狩人様の言う通り。もう行かなくっちゃ。」

彼女は彼の手を降ろし家を出ようとする。

「狩人様は私が獣になっても狩人様でいるのかしら。」

彼女は彼の反応を確認せずに行ってしまった。まるで大きな独り言のように済ませた。人形が立っていたが、人形が彼女に話しかけることはなく彼女もまた人形に何も言葉をかけずに通り過ぎた。石碑の前にたたずむ。正面に大きく書かれた自分の名前。その横に書かれている年号。その期間は1年にも満たなかった。彼女は膝真つき消えた。

第5話

しまった。ついでに本を持ち帰ってくればよかった。と、後悔しすぐにまた戻ろうとするが運悪く外からノックが聞こえてきた。少し急いで扉を開ける。いたのは叢雲だった。

「おはよう。はいこれ、朝ごはん持ってきたわ。2時間後にまた来るからそれまでに食べるとしてよね。」

「…ありがとう。」

時計を見るとちやうど6時だった。外もいつの間にか明るくなっている。朝食を食べながら読みかけていた本を読み切った。なかなか面白かった。流石当時テレビで話題になったことだけはある。本棚にはまだまだ本がたくさんあるからしばらく暇はしないだろう。早速に冊目に取り掛かった。

しばらくまともに文字を読んでいなかったので最初のほうは苦労したが一冊読み切るとすつかり元に戻って8時時を回るころには中盤まで読み切っていた。またしてもノック。案の定叢雲、そして吹雪がいた。

「回収に来たわ。あ、それと今からついでについてきてくれないかしら。」

「提督が呼んでるんだ。なんか試験するらしいよ?」

「試験?」

「うん。詳しくは聞いてないけど、とりあえず暁ちゃんを呼んできてほしいって。」

「分かったわ。」

二人に連れられ外に出る。ほかの人は大丈夫なのかと聞くと、それぞれが業務や訓練を始めるころだからこつち方面に来ることはない、だそうだ。いくら、業務があるとはいえこつちに一人も来ないというのはないと思うが、たしかにこつちには旧客室以外には本当に何も無い。途中で叢雲と別れて吹雪と二人きりになる。この吹雪がかなりおしゃべりでやれ、生活には慣れたか、とかどんな本を読んでいるのかだとかいろいろ聞かれた。ちなみに吹雪が彼女の部屋を見たことはあっても、読んでいるところを見せたことはないはずだが。

「…なんで本のことなんか聞くの?」

「あれ。暁ちゃん本読んでなかったっけ?机に開いてる本があつたと思うんだけど。」
吹雪を中に入れたのは荷物を物置に突っ込んだだけの時だ。あとは扉の前にいたに過ぎない。まさか隙間から見たのか。となれば恐ろしいほどの観察力だが…。

「いえ。何でも無いわ。そうね、あまり常識にとらわれてない物語が好きよ。」

「常識にとらわれてない?」

「ええ。」

「それってどんな？」

「どう、と言われるとそうね…私たちにとつての非日常が主人公にとつての日常みたいな…。」

「深海棲艦がないことが日常な世界ってこと？」

「そうね。そんな感じよ。もつと言えば代わりに別の脅威があるやつがいいわ。それも私たちが理解できないような。」

「へー。難しそうな呼んでるね。」

「そうね。最近は比喻じゃなくて言葉そのものの通りが欲しいわ。」

案外話し込んでしまった。彼女もまた、自分がかかり読書にはまっているのだと認識した。吹雪が案内したのは工廠だった。裏口であろうドアから入ると中で明石が座っていた。なにか書いている様子だった。

「明石さん連れてきましたよ。」

「ん、お、ありがとう吹雪ちゃん。じゃあ、暁ちゃんはこつち来てね。」

呼ばれたのは彼女であったが吹雪もちやつかりついてきた。どうやら試験が気になるらしい。明石が同伴を許可したので彼女が何か言うことはできないが…。明石は彼女を作業スペースらしきところに案内した。ラジコンサイズの艦載機がずらりと床に

並べてあつて機械が動いている音がとてつもなく大きい。

「夕張ちゃん！あれ持つてきてー！」

明石がスペースの奥に声をかけると奥から、はい！と答える声があった。このスペースは直接つながっているらしく入ってきた外の光が艦載機を半分ほど照らしている。彼女がいるところはちょうど横に荷物があつて影になっていた。返事から少し遅れて顔を出したのは夕張、とその後ろから大量にやってくる妖精だった。夕張の手には彼女が狩り道具がいっぱいいっぱいに積まれていた。そのほかの道具も後ろからついてきた妖精が運んでいるらしい。どこか…この様子をどこかで見たことがある。…望月が持っていたゲームにこんなものがあつた気が…。

「すいません。お待たせしました。いや、量が多くなって…うわ！びつくりした…すごい、本当にそっくり。」

「でしよー。これで全部？」

「確認したんでこれで全部のはずです。あ、ヤッホー吹雪ちゃん。」

「おはようございます。夕張さん。」

「どう。暁ちゃん。これで全部かな。」

聖剣に、千景、慈悲の刃に……

「…うん。全部あるわ。」

「よしよし。じゃ、さっそく行こっか。」

「いくつて?」

「あれ? 聞いてない? 試験するって言われてると思うんだけど?」

「ここじゃないの?」

「違うよ。今回やるのは戦闘試験。暁ちゃんの戦闘能力の計測をね。」

「あ、私もいいですか?」

「吹雪ちゃんも?」

「はい。今日特に何も無いんで。」

「それじゃあいいかな。どっちみち有事の時の護衛が増えるんだし。試験は〇九〇〇に始めるからちよつとゆっくりしててね。」

時計を見た感じではまだあと30分ほどある。

「これは?」

「これ? 今度の作戦で使う予定の航空機だよ。」

「:いろいろあるのね。」

「そうだねー。ここ数か月で一気に開発を進めたからね。そろそろジェットも開発のめどが立ってきそっだよ。」

「ジェット。」

「そう、ジェット。」

彼女がこの世界から消えて何年たったかのは分からないが最近の航空機はかなり発展しているようだった。あの頃は空母さえなかなか配備できなかったし航空機なんてのはほぼ陸上からしか飛ばせなかった。それも複葉機が限界だった。それがジェット機までとは。

ゆつたりとした時間が流れていた。特にやることがないやることがない彼女は無造作に置かれていたベンチに座るしかなかった。ついてきた吹雪はついでだからと明石に艤装の点検してもらっている。

「あー。また無理したねえ。うーん、まだ実用的ではなかったかー。」

「でも、いつもより故障は少なかったですよ？加速もよかったですし。」

「でも、燃費悪いでしょ。」

「あー、まあ。」

「あ、いた。」

二人のよくわからない会話に耳を傾けていた彼女だったが突如声の主が一人増えたため少し目も傾けた。いたのは叢雲だった。

「探したわよ。こんなところにいたのね。」

「ごめんごめん。ちよつと暁ちゃんの試験がどんなものか気になってね。」

「ふーん。で、当の本人はそんなところで何を？」

「…ベンチに座っているわ。」

こう、ベンチに座っていると何か思い出しそうだ。確か、ヤーナムの聖堂街にどこかベンチの置いてあった広場があったはずだ。そこから大橋が見えたのを覚えている。ここから見えるのは反対側工場の壁だ。

「ねえ。叢雲ちゃんも一緒に見に行かない？」

「試験に？でも迷惑でしょ。そんなに大人数で言ったら。」

「んや。別に構わないよ。」

「まあ…明石さんがそういうんだったら別に…。」

「どうやら同伴者がもう一人増えたみたいだ。」

「すみません。遅くなりました。」

少し慌て気味で工場に入ってきたのは赤城だ。察するに、今回の本来の護衛だろう。遅れたと言ってもまだ20分以上あるのだが。

「大丈夫ですよ。まだ20分以上ありますから。」

「え、あ、本当…。」

「時計でも壊れてたんですか？」

「そうみたいです。部屋の時計が10分ほど早かったみたいです。」

結局20分余ってしまった。予定を早めないのかと聞くと、提督も参加するらしいので提督が来ない限りは始めれないそうだ。

「提督も来るの？」

「うん。一度自分の目でも見てみたいって。」

「あんまり見せるものではないのだけど。」

「まあまあ、そんなこと言わないで。私も結構気になるんだよ。暁ちゃんからもらったやつ、あれ素材はごく一般的なもの、何なら素材の質では今の金属よりも悪かったから。いったいどう扱えば深海棲艦の装甲を容易く破れるのかとね。」

「あ、そ。」

「うーん素っ気ないなあ。なんか私の知ってる暁ちゃんと差がありすぎる…。」

「…暁、さん。今回の護衛を務めます赤城です。」

「言いくらいなら態々そんな名前で呼ばなくてもいいのよ。」

「いえ、あなたは紛れもなく駆逐艦暁なのですからそういうわけにもいきません。早くこちらが慣れればいいだけのこと。」

全くまじめなことだ。こつちから見ても無理してるのが分かる。恐らく赤城が今最も彼女に対していまだに猜疑心が強いのだろう。加賀とは違って先入観が強いようだ。別に彼女が怖いのであれば今回の護衛など引き受けなくてもよかっただろうに。…い

や、言うまあ。どうせ同じことを繰り返されるだけだ。

彼女は視線を外に向ける。まだそれほど時間は経ってないがすでに日差しが強い。彼女もすっかりこの世界に慣れてしまったといえよう。これもヤーナムでは一切経験してなかった朝というもの。目指していた夜明けよりさらに向こうのもの。あれほど苦労したものが何もしなくてもやってくるこの世界は、しかしヤーナムにも存在したはずのものである。すべては獣の病が悪い。相変わらず何も無い今この瞬間。彼女の後ろから聞こえてくる様々な音が彼女の耳に入ってくる。ほとんどは何かしらの機会の音だが、かすかに聞こえる明石と赤城の会話。吹雪と叢雲の会話。何かを叫ぶ夕張。獣の叫びでない音が彼女を埋め尽くしていた。

「や、待ったかい？」

水平線を楽しんでいると工廠の端から提督が顔をのぞかせた。彼女はちらりと時計を見る。予定時刻まであと10分。

「…いえ、全く。」

「そっか。それはよかった。どう、ここの生活で何か不満はあるかい？」

「いえ、満足に過ごさせてもらってるわ。」

「そうか、それもよかった。」

「あ、提督。来ましたか。」

「いやーすまないね。どうやら来たのは僕で最後みたいだね。なんか2人増えてるけど。」

「あ、いや。私たちもちよつと気になるなーって。」

「そういうことね。まあ、せいぜい気を付けて。それじゃ行こうか。」

「あ、はい。夕張ちゃん！あと頼んだよー！」

「はーい！」

提督を先頭にみんなが歩く。彼女もまたついていく。やはりあの時のドッグから出るらしい。狩り衣装に着替えた彼女は水面を歩きだそうとするが明石がそれを止めた。

「あ、曉ちゃん。こつち乗ってくれるかな。そつちのほうが楽だからさ。」

なるほど。確かに全員で一緒に向かったほうが変に速度を合わせずに行かなくて済む。彼女は明石の言う通り乗船した。中はそこまで広くない。そのスペースもほとんどよくわからない機械で埋められていた。明石が手際よくエンジンをかけ外に出る。

「予定海域はここから北東に30kmほど行ったところ。大体30分ぐらいで着くかな。」

なんだもう30待つのか。

「……？」

彼女はふと視線を感じた。視線と言えばアメンドーズだが確かに今も建物にくつつ

いて彼女を見ている。しかし彼女は別に視線を感じていた。しかもそれは海上からだった。あたりを見ても特に何かあるわけでもない。それにその視線もすぐに感じなくなつた。気のせいか。

予定海域までつくまでずっと船に揺られっぱなしだった。その途中で何度か先の視線を感じた。そのたびにあたりを見渡すがやはり何も無い。少し啓蒙を取りすぎただろうか。見えないものが見えるのは面白いがあまり見えすぎても面白くないし、発狂しやすくなるのもいただけない。今度いくつか取引しようか。

「着いたよー。」

着いたらしい。特にこれと言って目立つものがあるわけではないが。

「ちよつと、これ誰か持つてくれないかな。」

「あ、私持ちますよ。」

明石は何か機械を外に出している。提督も手伝っていた。

「ふいー。…よつ。」

明石が何か打ち出した。水上機らしい。明石が持つていたのはカタパルトか。

「よし、じゃあこれ持つて。暁ちゃんはこのつからもう1km進んでね。そこで始めるから。」

「分かつたわ。」

明石に言われた通りに進んだ。持たされた無線機から明石の声がした。

『あ、あー。聞こえてるかな。今から暁ちゃんには30分ほど深海棲艦と戦ってもら
うね。』

「なに。戦術テスト？」

『まあ、そういうことだね。いま頭上を観測機が飛んでると思うけどそこから試作型
の深海棲艦をおびき寄せる装置を落とすね。その効果時間が30分だから。』

なんだ。ついでにその装置の実験も入ってるのか。

『でね。問題はその装置がどれだけの効果を発揮するのか未知数なんだよね。もし、
予想以上に来るようであれば赤城さんの艦載機で対処してもらおうしそれでも無理そう
なら回収するから安心して。じゃあ、準備はいいかな。』

「ええ。何時でも。」

『オツケー。』

明石の声と同時に何か落ちてくる音がする。それは海中にぼちちゃんと落ちた。あれ
が例の装置だろう。

ああ。悪趣味なことだ。どうやっておびき寄せるのかと思ったが、声でおびき寄せる
なんて。普通人間や艦娘が深海棲艦の声を聴くことなんてのは姫級やそれ以上のもの
でないとは不可能だ。だが、彼女には聞こえる。深海棲艦のまるで憎悪に満ち溢れている

ような声が。それは言葉なんかではない。まさに鳴き声のようなもの。聞いていてあまり気分のいいものではないがそれも今更だ。

今は真昼間で月など到底出てるはずもないがまあ、べつにいい。きっと多くの獣がやってくることだろう。それでは始めようではないか。獣狩りだ。

第6話

海面の下に黒い影が一つ、彼女に近づいてくる。かなりのスピードの伴って飛び込んできた。しかしあらかじめ構えていた鉈を振り下ろされて飛び出した勢いのまま2つに割れてしまった。ノコギリ鉋はそんな切り口がきれいになるような切れ方はしない。よってその断面はボコボコするし、切る際に中の内蔵を雑に傷つける。彼女には大量の血と言えるような青い液体が降りかかる。青い液体。もしこれを血といふのであればまさにこれは青ざめた血だ。

『青ざめた血を求めよ。狩りを全うするために。』

昔見た手記を思い出した。

彼女はその大量の返り血を浴びても微動打にしない。飛び出した深海棲艦を2つに割った体制で静止していた。いや、むしろ彼女は笑っていた。

さっきのを皮切りにしてか海の影がどんどん増えていく。

不思議とこのおびき出された深海棲艦はその全てが重巡以下であり、皆砲撃をせず叫び声を上げながら呐喊する。周りを一切気にしてないような行動は戦術的とは到底思えず、もはや互いを認識しているのか、理性があるのかも怪しい。それは彼女めがけて

突撃する際よく互いの体をぶつけるものだから、おかげで確かに切り裂くはずだった彼女の刃が、空を切る、カス当たりする、別の個体を切り裂くほどであった。

彼女は思った。これでは効率が悪いと。ノコギリ鉋は複数の相手を一度に相手するには分が悪い。彼女は斧を取り出し、その柄を伸ばした。体をひねり体制を低くする。大量の深海棲艦が彼女の全周から一斉に飛び出す。瞬間、彼女はその体制を引き戻しその勢いのまま2回転した。遠心力を伴った斧は深海棲艦の装甲などものともせず容易く切り伏せた。ボトボトとただの肉塊と化したものが一時的に肉の壁を作った。

その様子を観測機を通して見ていた明石たちは、まさに絶句といったような様子だった。

「う、うわあ…。」

「おびき寄せ過ぎじゃない?」

「そうですね。実践訓練に使えたらと思っただけでこれ訓練どころじゃなくなりますね。」

「…そつちなだね。」

「彼女を敵にしたら駄目ですね。」

「うん。僕の鎮守府終わっちゃうね。…これならとりあえず心配することはないね。」

「はい。あとは担当海域がどこになるかですね。」

彼女はその後も深海棲艦を切り、叩き潰し、串刺しにした。気づけば周りは沈みきつていない残骸だけで、海の色が変わるほどの影も今は一つもない。あの機械から発せられていたおぞましい声もすでに聞こえなくなっている。終わつたのだろうか。取り敢えず明石を呼ぼうと無線機を持つが、どこを押しても反応しないし明石が呼んでくるようなこともない。壊れたのか。いろいろ傾けるとスピーカー部分の穴から深海棲艦の血がドボドボと出てきた。すでに血で染まっていたこの無線機。この様子だとカバールの隙間から血が入って壊れてしまっているだろう。伝わるかはわからないが上を飛んでいる水上機に無線機を掲げたままバツじるしを作ってみる。少しでも残っていた血がポトポトと慕っている。意思は伝わつたのか、バンクした。

10分ほどしてクルーザーが来た。

「どうしたの。話しかけても全然応じないしバツじるしも。」

「無線機が壊れたのよ。」

「どれどれ。…んひゃ？」

明石は彼女から無線機を受け取った瞬間ぬちゃつとしたその感触に思はず落としてしまった。運良くクルーザーに落ちた無線機は白いクルーザーの床に藍色を着けた。深海棲艦の血は青く、さらに彼女の服装とその無線機が黒かつたのでよくわからなかつたがどちらも血まみれだつた。

「こ、これまた派手に…。」

「私、深海棲艦の血初めて見ました…。」

「いや、普通見ないと思うわ…。」

クルーザーの椅子に座るとベチャつとした感触がある。

クルーザーが出発した。

「……。」

やはり誰かがこちらを見ているような気がする。結局見回しても何もいないのだが。

鎮守府に戻ってきた。

「着いたよー。暁ちゃんはとりあえずシャワーをつて、な、なんでそんな綺麗になつて
るの?。」

つい数十分前まで深海棲艦の血や臍物でまみれていた彼女の全身はすっかりきれい
になっていた。しかし彼女が座っていた場所は少しの青いしみ以外痕跡はなにもない。
まるで血や臍物が蒸発してしまっただかのようなだった。

「狩人なら常識よ。」

「どんな常識よ…。」

「叢雲ちゃん今日突込みばかりだね。」

「…なんででしょうね。」

今日はもう解散でいいといわれた。吹雪の付き添いのもと部屋に戻る。ついでに昼食も渡された。さつと食べて本で読もう。

少しだけ読み残していた2冊目を読み始める。まあ、1冊目と比べると突拍子もない世界観ではないが話自体は面白い。まともな世界だから人物の言動い理解しやすい。そうすれば読むスピードもおのずと速くなるものだ。3冊目はどうしようかと思えば収めながら本棚を眺める。個々の本棚にはいろいろなジャンルがある。本自体も2つある本棚にぎっちりとは仕舞われている。ヤーナムから本を持ってこようとしたが収めることが出来なさそうだ。諦めるしかないか、と思いつつ目に入った本を一冊取り出してみる。…これでいいか。

机に置いたその本は今の時代ではなかなか見ない無地の表紙で革のような質感だった。題名も何も書いてない。どれどれと一枚めくってみる。

「…。」

本に書いている文字は読めなかった。だがなぜかその内容は理解できる。内容としては、何かの召喚だったり魔法に関してだろうか。…ああ。多分これはやばい本だ。なにか、引き込まれそうだ。そして頭の中をかき回そうとしている。常人ならくるってしまふような代物だろう。狩人である彼女にはせいぜい啓蒙が増えたぐらいだが。今更

魔法だの召喚だの何回も見てきた。これぐらいで狂うなんてことはない。せつかくだ最後まで読み切つてやろう。

ある程度呼んでみたことだし、なにか試してみようか。この本によると何か媒体というか魔力がないといけないらしいが、水銀弾でいいだろう。水銀弾を手に取り本に書いている通りに呪文を唱えてみる。

「…お、できた。」

見事水銀弾は彼女の指から火を出す魔法になった。しかし、これなら医療協会の秘術のほうが効率もいいし威力も申し分ないだろう。指からちろちろと吹き出す火をぎゅつと握つて消す。召喚の方法についても書いていたが、準備がかなり面倒そうだったのでやめた。

結局この本は最後まで読まなかった。この本、ずつと魔法関連のことしか書いてないし途中で真面目に読むのをやめパラパラとめくつてみたところそのあともずつと同じ感じだった。これは本と言っても教科書みたいな奴だろう。書かれている魔法も医療協会の秘術のほうがよく、ほど便利なので使うこともないだろう。別の本にしよう。

本を返そうと背表紙を触ったときに気づいた。背表紙に凹凸がある。色がついてないので凹凸とそれによつてできる僅かな影で判断するに『ネクロノミコン』と英語で書かれているようだ。本の内容は訳の分からない言語で書かれているというのに背表紙

だけ英語とはますますおかしな本だ。

「……………」

誰かに見られている感じがした。海で感じた者とは別のものだ。こつちのほうがかう、威圧感が違う。場所は同じ海のほうから。遠いところから見られているはずなのにまるですぐ後ろから見られているような…。それほど気にすることもないだろうと振り切つて別の本を選ぶ。

夕食を食べ終わり月夜とともに読書を楽しんでいたころ。コンコンとノックが聞こえた。返事をすると思雪が入ってきた。もう、この部屋を訪ねるのは吹雪か叢雲がほとんどになつてきた。

「暁ちゃん？会議だから呼びに来たよ。」

「ああ。分かつたわ。」

読みかけの本に、付いていた某代わりの紐を挟んで吹雪についていく。そとは満月から目立って欠けが見え始めていてそれでも月が見えてなかつた昨日と比べるとまだ明るい。鎮守府内の道沿いにつけられている街灯がほんのりと明るく光っている。少し蒸し暑かった。今日も今日とてアメンドーズが張り付いて彼女を見つめている。吹雪と一緒にアメンドーズが張り付いている建物に入っていくのだが吹雪は奴に気づいて

いる様子はない。

「連れてきましたよ。」

「お、来たね。それじゃ始めようか。赤城。」

「はい。今日の正午大本営から担当海域の知らせが入りました。」

赤城が丸めた紙を広げた。黒い線が丸く見えるがところどころ赤や青が混じっている。前にも書いた線に上から新しく引いたのだとわかる。

「結果として範囲は予想通りとなりました。」

「そうか。」

「これなら作戦の変更もしなくて大丈夫ですね。」

「別の鎮守府の行動範囲も把握する限りは支障はなさそうだね。」

「装備にも変更は？」

「それも変更はない。最新の兵器を使わせてもらおう。明石。」

「あ、はい。えと今回使える新兵器はまず試作型ですけど51cm連装砲。5連装酸素魚雷……まあいろいろあります。種類多いんで省かせてもらいます。」

彼女は退屈していた。確かに大切な会議であろう。しかし彼女にはほとんど関係のない話だ。自身が本当にこの会議で必要なのかと、真つ暗な窓を見ていた。この部屋が

明るいため窓には彼女の姿が映っている。我ながら相変わらずの死んだ目である。その奥に見える狂気も。…ついでに感じる視線。朝のとは違うものだ。やはり遠くからも見られているような感じがするしすぐ後ろからとも思える。恐らくこの視線は彼女しか感じてないだろう。彼女以外の全員は謎の視線なんぞ気にせず会議に集中している。あの、ネクロノミコンとかいう本を読んだあたりからどうもおかしいらしい。

「よし、じゃあ今日の会議はここまで明日もまた確認を行うからよろしく。」

結局彼女の名が挙がることはないまま会議が終わってしまった。しかも、明日もまたあると。自分を呼ばないのであればわざわざこの会議に連れてこないでほしいと彼女は思った。吹雪にふとそう愚痴ると。

「あはは。まあ、今日はたまたまかもしれないし明日は暁ちゃんも必要かもしれないから、ね。」

だそうだ。真面目だなと彼女は思う。昔の彼女もまじめだった。それがゆえに妹を庇う形で結局その妹と一緒に死んだのだ。

建物の近くで彼女は解放された。吹雪に挨拶され適当に返事をする。ふと空を見れば今夜は妙にすこし緑が勝った月に見える。

「変わった月もあるものね。」

月に見とれながら建物に入った瞬間、悪寒が走った。彼女が今までにこのような感覚

を感じたことがあるだろうか。少なくともヤーンナムで狩人を始めてからは感じたことはなかった。どれだけ恐怖を感じようとも自身の狂気がそれをごまかしたのだから。しかし、今。彼女はその狂気ですらごまかしきれないほどの恐怖を覚えている。いる。確実に何かが。それも彼女が知らないほどの恐怖がこの建物に潜んでいる。恐る恐る建物に入る。中に充満していたのであろうか、いやな空気が彼女を全身を撫でる。これほどまでに暗い廊下というのを不気味に思ったのは初めてだ。

一歩一歩進むたびにろうかがかからきしむ音がする。今までこの廊下がきしむようなことはあつただろうか。あそこの部屋の扉はずつと開いていただろうか。今まで気にしていなかったことに自然と注意が向いてしまう。この建物全体からにじみ出ているこの不気味さの原因はどれだろうか、探し回るせいだ。結局、一階に原因となるようなものはなかった。と、すれば後は二階のみだ。彼女はノコギリ鉋を取り出し変形させる。折りたたんでいた刃を伸ばし、まさに鉋と化した。こちらのほうがフルスピードが遅くなるが、その分、力が入る。

いくら恐怖が勝るとはいえ彼女は狩人だ。その本能は恐怖でかき消されるほどやわなものではない。

二階に着いた。不気味な雰囲気さらに増した気がする。明らかに彼女の部屋からそれは出ていた。寄りにもよって自分の部屋からだとは。これで確信した、あのネクロ

ノミコンとかいう本内容的にろくなものではないと思ったがまさか得体のしれないものを引き付けるとは：あんな本はあとでヤーナムのどこかにおいてこよう。ビルゲンワースあたりでいいか。

あの本の処分先も決まったところで意を決して彼女は部屋に飛び込んだ。部屋を開けた途端あの不気味な視線を一気に感じた。その刺さるところかぶつかるほどに全身で感じる視線とともに部屋に踏み込む――

ことはできず、彼女の足はとらえるはずの床をとらえることができずさらに下へ行く。前に転ぶような形になるが支えようとした彼女の手も床につくことはなくさらに下へ沈む。これらの出来事に彼女は驚くがそれよりも早く、まるで最初からそこに地面などなかったかのように彼女の全身が床よりも深く沈みこんだ。

第7話

彼女の目の前には緑色が広がっていた。その場でもがく感じで水の中にいるのだとわかる。しかし、息苦しさを感じることはない。

緑色に黒色が混じってきた。…否。違う。黒色が混じってきたのではない。黒い空の間の中で緑色の何かが動いているのだ。気づけば彼女の周りには細長い触手のようなものを取り巻く。しかしその触手も彼女からはかなり遠く見える。それでも彼女よりも圧倒的に長く見えるそれはいかにも巨大化なのかを示す。もはや、その触手が目の前の緑色のものと繋がっているのかわからない程に。そしてよく目を凝らすと下の、底のほうに小さく建物の跡が並んでいた。まるで町のようにだった

緑色の壁から目が開いた。片目だけがそれでも彼女よりも大きい。目が開いたことでその他の配置がある程度把握できそうだった。

「……」

「…何よ。」

「……」

「放つといて。」

それがは彼女に話しかけてきた。彼女にしか聞こえない声。彼女は淡々と答えるが、しかし心の中では全く余裕がなかった。ちよつと気を抜けば意識を持って行かれそう。…発狂してしまいそうだ。一本、一本と鎮静剤を飲む。空になって捨てた瓶は彼女の下に広がる真つ黒な空間に吸い込まれていく。動くときの抵抗感と違つて声を出した時の反響や息苦しさがないのでここが本当に水中なのか分からなかったが、ゆつくり、ゆつくりと空き瓶が落ちていく様を見るとやっぱり水中なのだとわかる。

「……」

「…聞こえなかった？…無駄よ。」

「……」

「……」

物体は絶えず話しかけてくる。そろそろ答える余裕がなくなつてきた。絶え間なく鎮静剤を飲むが追いつかない。啓蒙がどんどん上がっていく。駄目だ。もう耐えられない。

「…っ。」

頭がはじけとぶ。体に自分の血が降りかかる。彼女は体勢を崩し床に倒れた。

「……っはあ、はあ。…耐えれた…。」

床に倒れた。もうさつきの緑色の何かも、あの空間も、建物全体を取り巻いていた不

気味な雰囲気も、視線すらももう何も無い。立ち上がった彼女は床に転がった大量の空き瓶にぶつかり、自分の血が付いた衣服がこすれたときのニチャつとした音を立てながら立ち上がる。外はすでに明るくなっていた。

「…うそでしょ。」

せつかく出かけてすつきりしようとしてたのにこの有様である。今度出てきたらあのタコ野郎は狩つてやろうと胸に誓った。：はて、何故タコ野郎なのかあのとき触手らしきものは見えたがタコだとはわからなかったはずだが。なぜあれだけでタコと判断したのか自分でもわからなかった。

今がもう朝であることを知らせるようにノックが鳴った。しまった。今自分は全身血だらけだ。しかも外に出る前だったので寄りにもよつて制服姿で、である。流石に制服は狩り装束のようにはいかない。普通に洗濯しないとだめだ。制服に予備はないので、とりあえず狩装束を着てドアを開ける。吹雪が朝食を持ってきていた。最近本当に吹雪ばかりが訪ねてくるようになった。そのことを吹雪に言うところ

「提督がね、仲がよさそうだからって、任されてるんだ。」
「だそうだ。別に特段仲がいいわけでもないのだが。」

「そういえば、曉ちゃん服どうしたの？いつもと違うね。」
「たまには違う服を着たい時だってあるのよ。」

服のことはそう言ってごまかした。あとでどこかで洗濯しなければ。

なんともやりきれない気持ちで朝食をとり本を読んでいると不意にノックが鳴った。回収に来るにはまだ時間が早いはずだが…。

「隣に引越してきたものです。挨拶に来ました。」

隣に引越してきた？隣というと空き室のことだろうか。いや、まて。そも、ここは鎮守府でこんなアパートのようなことが起こるはずはないのだが。しかし、彼女にはそんなことはどうでもよかった。お隣さんである。母から、毎度のようにお隣さんとの関係は大切にすべきだと言われていた。

「はーい。あ、これはどうも。」

だから、彼女の言葉遣いも丁寧になる。

「初めまして、隣に引越してきた鳴子と申します。」

「あ、私は暁です。」

そこに立っていたのは、きれいな女性だった。綺麗すぎるとも言っている。彼女が出会ってきたどの女性よりもきれいだった。

「暁さんですね。あ、これ良かったらどうぞ。」

「ご丁寧ありがとうございます。」

鳴子という女性が手渡してきた紙袋を覗くと、入っているのはもみじ饅頭の箱らし

かった。何故もみじ饅頭なのか。

「もみじ饅頭ですか。」

「はい、ちよつとここに来る前に寄つたものですから。」

鳴子とは、そのまましばらく話をして別れた。机の上で箱を開けもみじ饅頭を一つ取り出す。袋には『カスタード』と書いてある。もみじ饅頭が広島のお菓子であるのは知っていた。しかし彼女は佐世保生まれであるのでこれと言って広島に思い入れがあるわけでもないし、もみじ饅頭すら初めて食べる。が、話だけは聞いていた。話の通りこの饅頭はおいしかった。しかしまあ、こういった菓子を食るとどうものどが渇く。あいにく渡されたコップのお茶は飲み干してしまった。また吹雪が来た時にお代わりでも貰おう。

回収に來た吹雪にその旨を話すと

「それじゃ、ここに冷蔵庫でもおいてもらう？ いちいち頼むのも面倒でしょ。」

彼女はただお茶のお代わりを頼んだだけで話が飛躍した気もするがまあ、確かに饅頭はまだたくさんあるし、そのたびにお茶をもらうのも確かに面倒だし頼んどいたほうがいいだろう。

数時間後、吹雪、ではなく長門が小さめの冷蔵庫を持ってやってきた。吹雪はその後ろで大きめのペットボトルのお茶を持ってきていた。流石に吹雪では冷蔵庫は持って

これなかったようだ。

「はいこれ、必要になったら言ってみてね。」

「ありがとう。」

今日は特に自分を使うようなことはしないらしい。今日の静寂が訪れた。となれば彼女のやることは読書のみだ。読みかけの本を取り読み始めた。

夕方になったころ、またノックがなった。いたのは鳴子だった。

「すいません。越してきたばかりの者が尋ねるのもおかしいんですがちよつと探し物をしていて。」

「いいえ。困ったときにはお互い助け合うものですから。して、探し物とは？」

「ええとですねこれなんですけど。」

鳴子はポケットから携帯を取り出した。彼女が知っているものより薄いように思えたが今はそんなことはどうでもいい。見せられたのは一冊の本の写真だった。

「ちよつとこの本を探していまして。」

パツと見昔の本のようだった。本の表紙がそんな感じだし色も無愛想な茶色だった。しかしその本の題名は書いていなかった。

「ほう。……この本の名前は？」

「ネクロノミコンです。」

ネクロノミコン……あ、そういうえば昨日読んだ奴がそんな題名だったはずだ。彼女は鳴子にちよつと待つててくたさいと言つて本棚に向かつた。

「なんでまたそんな本を？」

「ちよつと、頼まれてましてね。」

あつた、あつた。が、ぎつちり嵌つているせいでなかなか取り出せない。

「その人は考古学の方かだれかで？」

「いえ、別にそうではないですけど……なぜそのように？」

「その本に書いてある言語が全く見たこともないようなものだったのでつきりかなり昔の本かと。」

やつと取れた。彼女はネクロノミコンを持つて鳴子のもとに戻る。

「……読んだんですか？」

「ええ、まあ。全く書いてあることは読めないのに内容はなぜかわかるとかいう不思議な本でしたけどね。まあ、私にはあまり面白くは感じれなかつたですが。あ、気を付けてくださいよ。この本、読んでから変なことが起こりますから。なんか変に大きなタコに気を狂わさせそうになりますからね。私もあそこまで焦つたのは久々ですよ。死にかけたから。」

彼女はこれでも一定の常識がある。むやみやたらに、ましてまだ一度しかあつてない人に本を読んでから気が狂いそうになつただの、変なタコに出会つただのは言わないだろう。たとえ警告だとしても、それが到底理解されるようなことではないと彼女当然分かつている。しかし、彼女は鳴子がこの警告を理解すると判断した。鳴子はこの警告——いや、注意と言つたほうがいいだろう。この注意の意味が分かると。

「…大丈夫ですよ。いや、しかし。驚きました。まさかアレに出会つて正気を保つてまさか記憶まではずきりとしている人間がいるなんて。」

そのなるこの言葉はまるで自分が人間ではないとでも言つていよう言草だつた。

「なんか、自分は人間じゃないつて言つてるみたいですね。」

「ええ。私は人間ではありませんから。」

鳴子は当然のようにそう言つた。彼女は、しかし当然のようにそれを受け取つた。むしろ納得し質問をした。

「なるほど。じゃあ、鳴子さんはあのタコが何なのか分かるんですか。」

「タコ…はは。いいですね気に入りました。今度から私もあいつのことタコつて呼ぼ。…あ。すみませんえつとあのタコですね。あー、言葉で説明するのはちよつと…あつたあれ。ちよつとあれがまあ、似たようなやつですよ。」

鳴子が指したのはアメンドーズだった。

「存在はあんな奴よりもっと上ですけどね。」

当然だ。彼女の正気を奪いかねないほどの存在だったのだ。そんなよそこの上位者クラスではないだろう。しかし、アメンドーズと似たような存在とは？あのタコは上位者なのだろうか。こう言つては何だが上位者という枠には収まりきらないような気がしたが。

「二応、支配者ではありませんでしたからね。いくら馬鹿にしたところでそれは事実なんです。あ、一つ言つておきます。別に擁護するとかじゃありませんけど、奴に刃向かおうなんて思わないほうがいいですよ。人間とは格が違い過ぎるんです。本来一生出会うことのないような存在なんですから。まあ、あのタコも、もうあなたには近付こうとはしないでしようけどね。」

鳴子は礼を言つて自分の部屋に戻つていった。

「…人間。私が人間かあ。私も、もはや人間とは言ひ切れませんがね…。」

そうつぶやく彼女の言葉はきつと背を向けている鳴子には聞こえなかつただろう。

彼女は部屋には戻らず鳴子が部屋に消えた後一階に降りて昨日建物の中を進んだ時に気づいた洗面台で血だらけの服を洗い何とか血を落とした後、部屋でそれを干し、本を読んでいた。一区切りついてふと窓に目をやった時、遠くから砲撃のような音がし

た。演習か…、彼女はそう思った。今日はいつもより砲撃の音が激しいような気がするし、時々怒号のような声もかすかに聞こえる。そういえば例の作戦も近い。きつとそれでいつもよりも激しい訓練をしているのだろう。時たま窓からも遠くで演習を行っている様子が見て取れた。

彼女は懐かしいと思った。あの演習の様子を見てみると昔、神通さんと行った演習を思い出す。あの人の演習は特に厳しかったから余計覚えていいる。人に厳しい分あの人は優しい時は優しかったしとても強かった。それ相応の人だった。きつとあの人ならあの日を生き延びたことだろう。今もどこかで元気にしているかもしれない。ああ、あの人が言っていた通り厳しかったこともなんでも時間がたてば全部いい思い出になるもんだ。特にそれしかこれといった思いでしかない彼女は特に。

今の彼女があゝの艦隊と戦つてもきつと彼女が勝つだろう。それほど彼女は自負していたし、実際彼女は強い。ずつと人ならざる者、それを狩る者ですら彼女は狩つてきた。今の彼女に勝てるのはあのタコか、鳴子ぐらいだろう。彼女は鳴子がまどつていたどこか異様な雰囲気、鳴子が自分は人間じゃないといったことで納得した。どれほどの存在なのか知らないがあゝのタコを心から嘲られるのであれば相当なはずだ。彼女は正直あゝのタコには勝てないと思つているし、そもそも二度と会いたくない。あゝのタコはいくら啓蒙を減らしても嫌でも認知してしまう。鳴子の言う通り奴には下手に反抗しない

ほうがいいのかもしれない。まあ、また鳴子の言う通り二度とあのタコに会わないのだからうけど。

「世の中って不思議なのねえ。」

どこかで知ったか、事実は小説よりも奇なり、という言葉。まさにこのようなことを言うのだろうと彼女は思った。この世界もこの世界でヤーナムと似ているのかもしれない。あの狂った世界に。

月日は淡々経って行った。もはや代わり映えのしなくなつた毎日。彼女が日中に呼び出されることもなければ、意味もなく出席させられる会議でなにか尋ねられることもない。楽しみで言えば読書と、窓から眺める演習の風景、あとはなることも会話ぐらいだろうか。気づけば作戦日前日となつていた。

第8話

「出撃が今夜？」

「うん。前日の夜には出てほしいって。」

吹雪は朝食を差し出しながらそう言った。

「そんなこと聞いてないのだけど？」

「ごめんね。提督が伝えるの忘れてたって。」

情報の管理ができてないな。しかも当人に一切の相談もなしに決めている。この提督は無能か？それとも彼女を信用しきっていないということか。いや、隠ぺい作戦の概要の稚拙さを考えると無能である可能性が高いだろう。今回彼女は先の兵器実験時並みに暴れる予定だ。彼女の常識から考えてまずもって一艦隊が出せるような戦果ではないだろう。隠ぺい作戦に参加する艦娘の数はまあ：艦隊一つぐらいだろう。あれを見て一切変更しないようならいいよ本当の無能だ。しかし、提督が無能だろうが有能だろうがどっちみち彼女には関係のないことだ。呆れながらも彼女はその時を待つことにした。

時計の針が10を超えたころ、鳴子が部屋を訪ねてきた。

「おはようございます。」

彼女はここ最近毎日この時間帯、この場所で鳴子と世間話をするようになっていた。しかし、今日は別の場所で話そうというのである。

「外のベンチですか？」

「はい。すぐ横にあるんです。」

はて、ベンチなどあつただらうか。毎日無駄に外に連れ出されているが、ベンチがあつた記憶はない。とりあえず鳴子についていくと確かにあつた。しかし、そこはいつも歩く場所とは反対側だった。なるほど、道理で見たことがないわけだ。そこにあつたベンチは、周りに何も無いせいかどこか哀愁を漂わせていた。

彼女は鳴子の隣に腰かけた。昨日まで騒がしく聞こえていた演習の音も、今日は鳴りを潜めている。明日のために体力を温存する算段だらうか。

「今夜出発ですか？」

「おっと、聞こえていましたか。」

「ええ、そんな感じがしたので。」

彼女はこの人のことをつくづく不思議な人だと思つていた。そういえばこの人は人間ではなかつたな。では、この場合どういふべきか。鳴子さんはあのタコと同じ類のものらしいが。

「どうかしましたか？」

「あ、いえ。鳴子さんは人間じゃないんですよね。じゃあ何者なんだろうなあつて。」

「ああ…。人間どもは私のことを皆神様だとかニヤル様だとか言つてましたね。」

に、にやる？いや、それよりもまさか神様だったとは。神様ということとはつまり上位者？…だめだ。鳴子さんは大事なお隣さんだ。

「だからつて、そんなに委縮しないでくださいね。暁さんとはお隣なんですから。同等ですよ。」

「はい。もちろん。」

彼女は気をそらすため海を眺める。静かな波の音がただただ聞こえる。今日は曇りであるが、晴れているときであれば絶景とまではいかずとも、きつといい風景だろう。

「暁さんは、ここをどう思いますか？」

「ここ、ですか？…思うというと、どう？」

「ここはいつまで持つと思いますか。」

「もつ…。そうですね、あまり長い間は持つとは思いませんね。」

「そうですね。私もそう思います。この人間はどうもよくない。」

「詳しくご存じで？」

「彼があなたみたいな人間と話しているのを聞いてましたが、彼は理想しか話さな

い。」

「私みたいな…鳴子さん。それは艦娘というものですよ。」

「艦娘。ああ、あれが例の。あ、で、話を戻しますけど、彼にはあまり現実を理解してないような気がします。」

「私も全く話したことはありませんが同感ですね。行動を見ればわかります。彼がこうして活動で来ているのは周りの艦娘たちのおかげでしょう。」

「確かに。その艦娘という人間たちは実際よく動いています。リーダー格のような人がいるようですね。」

リーダー格というと、きつと長門のことだろう。

「でも、その人は提督のことをどうやら信じているようであつと不安です。」

「そうなのですか？」

「ええ、本人と話しているときにそう聞きました。きつとほかの艦娘もそうなのでしよう。自我を持っているように見えますが、あれでは自我を持っているとは言えない。どっちかというとなんかAIでしょうね。」

「AIですか？」

「はい。物事を自分の基準で考えて行動できる。でも人間の操作が入れば簡単にその基準がかわる。まさにAIと言ってよくはないですか？」

「確かに。言いて妙ですね。暁さんは例えがうまい。」

「いえいえ。そんなに褒めないでください。あまり天狗にはなりたくないですから。」

「そんな。天狗だなんて。」

「昔、似たようなことで調子に乗って後悔したことがあるので。」

「あらあら、それは…。」

二人で笑った。この時間が彼女にとって読書と同じぐらい幸福な時間なのだ。鳴子は気の置けない相手であるから冗談も言いやすいしちよつと無理やりな例え話をして鳴子は分かってくれる。しばらく、そうやって世間話をしていると時報が聞こえた。

「おや、12時のようですね。そろそろ戻らないと。部屋にいなかつたら何を言われるか分かりませんかね。」

「そうですね。暁さんも大変ですね。」

「ええ。提督の変なこだわりのおかげでまるで囚人のような扱いですよ。」

「でも、どつちかという箱入り娘の方では。」

「確かに。囚人と比べるとまだ自由がかなりある。」

「おや。確かにそうだ。鳴子さんも上手ですね。」

「うふふ。では、また明日：はいないですかね?」

「どうでしょう。いつまで出撃なのか。今回の作戦がいつまでであるのか、私に一時帰

投が許されるのかさえ分かりませんからね。でも、いつかはまた絶対に話せますから。」
「そうですね。あなたはそう簡単に死ぬような人ではないですから。今夜からでしたよね、頑張ってくださいね。」

「はい。ありがとうございます。」

彼女はベンチにただ一人座る鳴子を残して先に部屋に戻った。

我に返った。彼女は椅子に座って窓を眺めていた。沈みかけた太陽はそれほどまぶしくなく茜色が照っている。

鳴子と別れたあたりからどうも記憶が怪しい。手には本を持っていたが、開いているページに心当たりがない。30ページほど先を開いているようだがずっと上の空で読んでいたのか。

背伸びをすると固まった筋肉が伸びたような感覚がして気持ちがいい。夕焼けだけでは部屋全体の照らすことはできず、窓の近く以外は薄暗い。背伸びをした勢いで立った彼女は電気をつけてその流れで冷蔵庫を開けた。中にはペットボトルのお茶と、もう一つ、ガラス瓶に入った黄色い液体が粘性を感じさせながら揺れている。

数日前に鳴子からもらった。何かと聞くと、蜂蜜酒と答えた。『黄金の蜂蜜酒』という

銘柄だそうだ。確かに綺麗すぎるほどのこの色は黄金と言ひ表すのには十分だ。どうやら、作り過ぎたのでおすそ分けにといいことらしい。

鳴子には一種の強壯剤みたいなものだあの時言われた。一度に少量で飲んだほうがいいということらしいので、コップに少量注ぎ、飲み干す。彼女は酒を飲んだことがないのでこれが酒として美味しいのかはわからないが、とりあえず十分飲める味はしている。少なくとも匂いは、彼女であつたもこれはいいものだとわかる。ヤーナムにある酒は血の匂いしかしいのでとてもじゃないが飲もうとは思えない。いくら狩人は血が好きだとは言え、だ。だから狩人は酒なんてものは獣をおびき出すためにそこらに投げつけるぐらいにしか使わない。

飲み干してすぐ、頭がさえわたるような感覚を覚えた。そのせいか部屋の中の雰囲気を変えようように思われる。そして波の音が聞こえた。普段は聞こえないが、この酒を飲むと五感が研ぎ澄まされるのだろうか。先日もこれを飲んだが、おかげで狩りがはかどった。

しばらく軟禁されていたせいですっかり気が緩んでしまった。今日を機に一度締めなおしたほうがいいだろう。この蜂蜜酒の効能も明日まで持つはずだ。

一つ、溜息を吐く。彼女はその場に立ち尽くし窓を眺め沈み切る太陽を眺めていた。太陽が沈めば、にわかになそこら月が見えだした。今日の月は満月だ。まるで今日の門

出を祝うかのようなのである。彼女はその月に交信を行う。ああ、なんとも綺麗な美しい月だ。見惚れてしまう。月も彼女の交信に応えるかの如く発光している。周りに星が集まりだし、ゆつくりと月の周りをまわりだす。いずれ、月から黒く靄が開始める。その靄は月を覆わんとするか。否、その靄は月の形にこの部屋の中に現れたのだ。

ノック

彼女は交信をやめた。部屋の中の靄も、月の周りをまわっていた星も光り輝いていた月も消えた。吹雪だった。

「あ、暁ちゃん。」

「はいはい。時間でしょ。」

「あ、うん。準備できてる?」

「特にこれと言って特別準備するものもないわ。」

「分かった、じゃあこっち。」

吹雪に連れられてきたのはあの時のドッグだ。外に出るとき二階の窓から鳴子が手を振ったのが見えたので振替しておいた。吹雪に少し怪しがられたが適当に返しておいた。

見送りに来たのは叢雲だけのようだ。

「見送りはあなたと吹雪だけ?寂しいものね。」

「しようがないでしょ？提督は忙しいんだから。」

「じゃ、お願いね。」

彼女は一人海を歩きだす。着替えた狩り装束が月によく映える。

汝、月は見えているか。ああ、よく見えている。とてもきれいな月が、彼女を見守っているさ。彼女は記憶を頼りに定められた海域に向かう。結局地図は渡されず、期間もよく知らされないまま駆り出されたわけだが、彼女はあの男を裏切ろうとはしない。彼女は楽しむためにここに来た。ここにいれば楽しめると思ったからここにいます。なぜ、まだ楽しめてもいないのにここを離れることが出来ようか。彼女はいずれ来る獣狩りの夜を夢見に歩く。

この海はしじまを生み出している。水面に映し出された月は静かに波に揺られていく。何も音がしない。感覚が研ぎ澄まされてなお静寂なこの場には彼女ただ一人が存在する。その時がいつ来るのかはわからない。彼女は待つ。ただ待つ。いずれまた太陽が昇ってこようが彼女に問いかける声があれば彼女もまたそれにこたえることもないのだから。

問いかける声が聞こえずともほかの音は聞こえるものだ。どこか遠くで戦う音がする。飛行機、砲弾、怒号、悲鳴、歓喜、妬み、感謝。感情が彼女には聞こえてくる。そ

れでも彼女にかける声は少しもない。まだ、存在がない。

時間というものは個人によつて違うものだ。誰かが見ている時間と誰かが聞く時間が違うように、誰かが生かす時間と誰かが死にゆく時間は違うのだ。だがそれは、対象が違うのであつて一緒にあれば時間も一緒だ。彼女の時間には誰一人として当てはめることはできない。たとえまねしたとしても彼女の時間に合わせることは不可能だ。彼女は誰にも合わせたがらないのだから。誰かが近づいてこようと彼女はそれと引き離す。それゆえ誰も彼女に近づくことができない。彼女も近づかないからぶつかることもできない。ぶつかることができないのであればそれすなわち、気づくことができない。ほかのものと時間を離れた彼女は、誰からも認知されることもないし、彼女がほかのものを認知することもできない。深淵をのぞくとき深淵もまたこちらを覗いているように、彼女がのぞいてなければ、彼女がのぞかれることもない。

彼女はただ待つ。彼女が唯一、時間をぶつける相手を。彼女だけが見ている、彼女だけを見返す深淵を。とつくにまた日は沈み先に飲んだ酒など意味もなかりうが彼女の感覚は研ぎ澄まされる。

ふと、感じる時間の流れ。誰かが時間に乗つてやつてくる。海面から飛び出し彼女に切られる。違う。これではないはずだ。彼女が待つのは唯一。これは、相手が自分の流れに多くのものを載せて引き連れてきた。彼女を取り囲む。ゆつくりとその数は増え

てきた。すべてが立ち尽している。相手も彼女と同じように時間がぶつかかるのを待っているのだ。

待ちきれなかった者が彼女を襲わんとする。静かに切れ臥しその体を丁寧に密着させる。かとおもえばすぐに違う、と投げ捨てる。とびかき切り捨てることにそれを行う彼女の体は夜となったこの場において月の光で鈍く光っている。

もはや自分が切り捨てられることなど受け入れてしまっているうやつらの行動はひどく冷淡で理性的だ。もはや全てをあきらめこれを最後の行動とせんと。彼女に抱擁を願う。彼女もそれにこたえる。元来狩人というのはそういうものだから。

だんだんと時間の流れが太くなつたころ、ついにその源が海の底から上がってきた。ひどくその目は冷たく映る。彼女は一種の美を見出した。確信した。彼女が待っていたのはこれだ。これなのだ。これこそ彼女が待ち望んだ相手だ。月が赤い。この日のための赤い月。祝え。今この瞬間を。狩人は動き出す。

第9話

その深海棲艦にどこか見覚えがあつたが思い出せない。だが、その深海棲艦と目があつたときの既視感は分かつた。あのととき、新兵器の試行に行つたときに何度も彼女に向けられたものだった。

「あーあー、せつかく集めた艦隊が壊滅しているじゃないか。」

流暢な話し方だった。こんなにも流暢な話し方をする深海棲艦は昔に何回かあつたきりだ。そしてそのような深海棲艦は総じて相当な力を持つていた。

「お前。前から見ていたがやっぱり艦娘じゃないな。」

思い出せない。彼女は最後の記憶をたどる。あの日に見た何か。妹をかばつた。妹を庇うときに何を見た…？

あの日、横須賀が急襲を受けた。彼女たちはその日、合同演習で横須賀にいた。演習が終わつたあとのちよつとした休憩中のときだった。突如として空襲警報がなり、直後に爆発。壁に穴が空いた。突然のことで誰も動くことができなかつた。爆発で空いた穴から海上にたくさんさんの深海棲艦がこちらに進軍しているのが見えた。はつとした。

脳が警鐘を鳴らす。逃げろ、逃げろと。だが体がそれをきかない。誰かが逃げると叫んだ。その声でやっと体が脳の命令を受け取った。彼女は妹を引いて逃げようとした。だが、それはその部屋にいた全員も同じで数力所の出口に一挙に押しかけた。彼女は3人いる妹のうち隣にいた1人を咄嗟に引くことはできなかったが彼女向かいにいた2人は反応が遅れた。すぐにその2人と彼女たちの間には逃げんとする大勢の人達が割り込んだ。彼女は別れた2人を連れ戻そうとした。しかし、その瞬間彼女の目の前が爆発した。爆風が彼女を焼いて吹き飛ばした。逃げようとした人たちが一瞬動きを止めた。しかしまたすぐにより一層悲鳴を上げて逃げた。加えて、あたりには先程の爆風でけがした人たちの呻きや助けを求める声がひしめいた。彼女も爆風を咄嗟に腕で受け止めたが、その右腕とかばいきれなかった部分に火傷を追った。右目が見えなくなった。妹は彼女が盾になったおかげが無傷だった。妹は2人の名前を叫びたが彼女は妹の手を引いてその部屋から逃げた。2人の妹は彼女よりも近くで爆発した。何なら直撃したようにも見えた。恐らく即死だ。

彼女は妹を連れ2人で逃げていた。戦うことはできなかった。艦装は今いるところよりも遠いし、そもそも彼女はもはや戦えるような状況ではなかった。鎮守府ないの建物はどこも荒れ、さつきまでひしめき合ってた悲鳴もいつの間にかかなり静かになっている。2人は鎮守府から脱出しようとしていた。出口に近道するためにある建物に

入った。そこで、出会った。そう、深海棲艦。あの深海棲艦に。

彼女の目の前にいるのはまさにその深海棲艦であった。あの時と違って下半身は深海棲艦特有の謎の獣のようなものにはまっているが、顔はその当時と変わらなかった。

「ねえ。あなた、横須賀を襲ったことがないかしら。」

「あ？何だ突然。…ヨコスカ？ヨコスカ…横須賀…ああ、そうだな。確か10年くらい前に。」

10年。もうあれから10年経っているというのか。

彼女は質問を続ける。

「そこにいた…紫髪と銀髪の女の子を覚えてるかしら。」

「ほう。深海棲艦と対話を望むか。面白い。いいだろう、答えてやる。ああ、覚えているさ。覚えているとも。何せあの2人は私の初戦果だ。それにあの時が最初に最後の大規模攻勢だったから特にな。」

「そう。じゃあ、この顔に見覚えは。」

彼女は帽子とマスクを下げる。

「む。流石に顔となると自信が…何だ。お前はあいつの親戚か？私に復讐にでも来たか。」

「いいえ。私は復讐に来たわけでも親戚でもないわ。私は、その女の子よ。」
彼女は何か服をめくり腹を見せる。そこには丸い跡がはつきりとなっていた。

彼女はやつと出会った瞬間にその道を引き返そうとした。だが、やつが身構えたのを見て咄嗟にかばおうと、体を無理やり制動して妹に抱きつくようにしてかばった。背中に強い衝撃があった。直後に声が出ないほどの激痛が走る。ひとまず妹は無事なはずだと思った。

彼女は、妹を少しかがませるようにしてかばった。妹の後ろから赤い棘と滴る赤色の液体が見えた。恐る恐る下を見ると彼女と妹の体の僅かな隙間を赤い棒が通っている。彼女の腹から出て妹の胸に。引き抜かれたときに、妹を背にして二人とも倒れた。

「うっ、げほっげほ、う、お、おげ、お、お、お、あ、あ、あ……。」

痛みにせき込むが、さっきの胃が破れてそこから内容物と血が混ざって逆流していた。顔に吐瀉物が浸ることになるがもはや動くことができない。腹からいろんなものが流れ出ている感覚がある。妹のほうを見ると目を向いて上を見ていた。

「ひ……び、い。」

まともに出せない声で妹の名前を呼ぶが一向に反応がない。全くピクリとも動かない。奴の高笑いがくぐもって聞こえる。彼女が死ぬことは確実だ。だが、妹と違って急

所を外されたためゆつくりと死んでいく。彼女は妹の名前を呼びながらゆつくり、ゆつくり、死んでいった。

そして今。彼女は生きています。どういうわけかはわからない。気づけば彼女はヤムナムにいたのだ。あんどき負った火傷などはすべて治っていた。ただ、腹には奴に貫通されたときのであろう跡がくつきりと残っていたのだ。

「な、お前生きていたのか。あれで生きているとは思えないんだが……」

だから、深海棲艦にそう聞かれても答えあぐねる。この跡は、狩人になった後も切られ、潰され、焼かれなどしたが結局この跡が消えることはなかったのだから。

「……で。復讐に来たんじやないならなんだ。そのために私を探してたんじやないのか。」

「いいえ。あなたを見つけたのは偶然。事実、私は誰かに見られていたのは分かっていたけどそれがあなただということとは分かっていた。私はただ狩りのためにここにいるだけ。狩人は時に自ら獲物を探し時に獲物が来るまで待つものだから。そして、待った結果あなたがここに来た。だから私は今からあなたを狩るわ。」

「そうか、そうか。悪いがいるのは私だけではないぞ?」

奴のそばから5、6体の深海棲艦が浮上する。どれも姫級や鬼級だ。

「艦隊は壊滅したが全滅してはないからな。どうだ、これでもまたやるか？ 見たところいるのはお前1人だな。とてもじゃないが1人で艦隊に挑もうなんてのは私でも思わないぞ?。」

「問題ないわ。むしろ獲物が増えて喜ばしいことよ。」

「その減らず口を吹き飛ばしてやろう。」

奴が後ろに跳ねた。あんな重そうな謎の獣のような下半身でよく飛ぶ。奴が指示を出し側近の深海棲艦が砲撃を開始する。姫級や鬼級の砲撃ということもあつてあつという間に彼女の姿は水柱の中に消えた。

肩透かしだ。あれだけの質量の砲撃であれば必ず命中しているはずだ。あんなに強情張っていたが結局何もしないまま沈んでいった。さて、移動しよう。思ったり弱かったがそれでも艦隊が壊滅状態に陥ったのは変わりない。あとは、この姫鬼級しかないのだから急いで目的を達成しなければ。

「……?。」

おかしい。奴の気配が消えない。まさか、まだ生きているというのか。あれを食らつて生きていたというのだからこつちのほうはまだ確実性がなく生きていると言われてもまだ信じることができるが……。いや、違う。奴の気配が変わっていく。どんどん知ら

ないものに変わっていく。戦艦棲姫の砲撃を加わっているため未だ水柱が高い。あの水柱の中にいるのは奴ではない……!

「っ!?!」

戦慄した。水柱の中から現れたのはやはり奴ではなかった。代わりに出てきたのは深海棲艦の私であつても十分異質と言えるものだった。

頭から何か生えている。なんというか……カリフラワー? 両手からは触手が生えている。今まであんな生き物を見たことはない。いや、そもそもアレは生き物なのか? 奴が一步踏み出した途端景色が変わった。

空が赤黒くなり奴の後ろに船が一隻縦に突き刺さっている。その船はボロボロでところどころ穴が見えるし時折ゴン、ゴン、ゴンと軋む。綺麗な満月は不気味な赤い満月をしている。奴は一步一步歩いてくる。しかし、奴が進んでいるようには見えない。その場で足踏みをしているように見える。かと思いきや一気に近づいてくる。

「く、う、動けん!?!」

そして何より、動けないのだ。奴の姿を見てしまつてから一步も。つまりはこの景色を見ているというのは完全に奴の術中に入ったということ。その影響で動けないという事。それはほかの者も一緒である。しかし、ある一隻は動けずに苦しんでいる様子はない。だが、様子がおかしい。奴を見て目を見開き見つめながら泣いている。か細い

かは触手が当たったところが消し飛んだちうのが正しいかもしれない。

奴はそのまま仲間を蹂躪し、たまたま私のすぐそばにいた仲間のところまでやってきた。今度は不自然なほど密着する。そして身をよじった。さつきまでとは何か別のことをする。嫌な予感がした私は気合で拘束から逃れようとする。

「ああああああああ!!!」

間一髪何とかこけはしたが後ろに飛ぶことができた。身をよじった奴は直後からだから変なオーラのようなものを放出させた。心なしか宇宙のように見えたそのオーラは仲間を弾けとばせ、その体は散り散りになった肉片となりその場には足だけが残っていた。

化け物め。しかし、相手が使うのはすべて近接。こつちも持つてる武器は近接だ。さつきの気合のおかげかもう体が自由に動く。奴は触手を

ちぎった。一本一本ちぎり捨て、しまいには頭に生えていたカリフラワーのようなものも抜き捨てた。その抜き捨てたやつ目は赤く鈍く揺らめいていた。

はつとして、また周りの風景が違っていることに気づいた。今度はもはや海ですらない。謎の建物群がある。少なくとも昔襲撃で行った内地の風景ではないし、似ているといった雰囲気でもない。

「見える?」

やつは一言そう聞いてきた。私は恐る恐る頷いた。

「…彼女は私。ここに来たばかりの私。」

奴の遠く後ろから、奴に似た少女が一人、やってくる。さつきまでいかなかったはずの群衆に得物を振り回しながら突つ込んでいった。

「このころは、あなたに復讐をしたいという気持ちでいっぱいだった。あなたさえ殺れればそれでいいと。その結果はあれ。」

群衆の一人が隙を突き彼女を切りつけた。そのせいで一瞬彼女の動きが止まる。そこに群衆が立て続けに攻撃し結局何もできぬまま彼女はめつた刺しにされて死んだ。

「こうやって動けるようになったのはちようどあなたへの復讐心が薄れてきたころ。」
群衆は次にさつきまで見向きもなかった奴へ目掛け走ってくる。奴は群衆の攻撃を一つ一つかわし隙があればどんどん倒していく。さつきの少女とはまるで別人のようだった。

「…ちよつとだけ昔話に付き合っただけ。もう復讐しようなんて思っただけ。いつて証明するには回りくどすぎたわね。さあ、話はおしまい。」

奴が本気を出したとわかる。風景は相変わらずそのまま。ただその空には赤い月が昇ろうとしていた。私は爪をだし構える。

最初は奴の飛びつきからだった。奴が振りかぶった得物を左手の爪で受け止める。

「くっ!？」

その刃は容易く私の爪に食い込んだが巨大な爪ということもあってか何とか半分程度でとどまった。奴のほうは少し目を見開いた。受け止められたのは意外だったらしい。食い込んだおかげで刃が簡単に外れることはない。左で受け止めながら右の爪3本で奴の腹を狙う。しかし、奴に体重をかけられ少し前のめりになってしまったせいで私の爪は奴の腹ではなく自分の爪を刺してしまった。爪がわれ奴に距離を取られてしまう。砕けた爪はまたすぐに戻った。

「ふふ。面白いわ。受け止められたのは初めてかも。」

「それは光栄だな。深海棲艦の中では一番の硬度を持つと自負しているからなっ！」
次は私から。次々と奴に刺突を繰り返す。この爪の巨大さとは裏腹にスピードがあるこの攻撃に対応出来る艦娘はいなかったはずだが、奴は軽くよける。最後に力を入れてより素早く刺突した際に、奴はむしろ接近するようにして私の背後に回った。顔を後ろに向けると力をためるような動作が見えた。足払いでそれを阻止する。

そんな押し問答がしばらく続いた後奴の動きが止まった。私に近づいて攻撃を誘うような挑発的な行動から一転、その場に立ち尽くし観察でもしているかのようにつん

だ。私は怪しいとは思いながらも渾身の一撃をだした。奴は回避のそぶりを見せない。当たる。そう思った瞬間奴の左手が動いた。とつさに銃を構え撃った。通常深海棲艦に機銃弾以下の口径の銃弾は効かない。しかし、奴の放ったその銃弾は人体に撃ったかのようにやすやすと私の体内を食い破る。そして、私はなぜか訳も分からず膝をついた。動けない。

奴がステップで一氣に近づきその手を私の腹に突き刺した。

「アガッ!？」

そのまま、奴は私の臓物を引きずり出してしまった。

以外にもこいつは強かった。まさか上位者をも簡単に切断するこのノコギリ鉋を受け止めるとは。加え、後ろに回り強攻撃を加えようとしても足払いで阻止されるため仕方なく銃。パライイに切り替えた。

結果として成功し奴の臓物を引きずり出してやった。獣でない限り、臓物を引きずり出してしまえば通常生き物は死ぬ。

「ハア、ハア、ゲフツガフツ…。」

奴は臓物のほとんどを失い出血多量で瀕死となっている。勝負は決まった。彼女は止めを刺そうとした。

「最後に、いいか。」

奴のその言葉を聞いて彼女は腕を止めた。

「……いいわ。」

「あまり長くは……言わん。私は、時代遅れの兵器だ。…ゲホツ！つ今時近接以外何もできん兵器に……役目はない。仲間内でも、私はそんな扱いをされた。正直にいうと……今回の、これはいわば特攻だ。どつちみち……私は死んでた。お前もそうだろう……お前も私と同じだ。今はまだ……その強さは役に立つがきつといつか、誰かに追い……ぬかれる。」

「なに、心配してくれるの？」

「……そう、かもな。あの日以来……あの時代の艦娘と相まみえたのが、お前だけ……だったからかもしれない。……もういい。ありがとう。私の話を聞いてくれて。やはり……誰にも覚えられずに死ぬのはさみしいからな。」

彼女はその言葉を聞き、武器をノコギリ鉋から葬送の刃へと変える。この武器はその昔、最初の狩人が用いた武器で弔いの意が込められているらしい。奴の話を聞いて少し同情してしまったのかもしれない。彼女がそうなることはあまり考えられないが、当時の艦娘として、10年という時間の間にどれだけ艦娘も進化し、彼女の知る艦娘が今の時代においてどういう位置づけなのかを考えさせられる。

「さあ、一思いに…頼む。」

それを奴の最後の言葉とし、鎌に変形させたそれで彼女は奴の首を飛ばした。

彼女はしばらく佇んでいた。奴の『時代遅れ』という言葉が引つかかる。先も言つたというり彼女がそうなる可能性は低いものの、当時を知る艦娘として深く引つかかる言葉だ。ところでさつきからあそこで何か浮いているのだがアレはなんだ。

近づいた結果、それはイクであった。なぜここで浮いているんだ。それにどこか様子がおかしい。放心状態だ。…さてはさつきまでの彼女の行動をすべて見ていたな。あれは奴がかなりの実力者であったから耐えられたのであって普通あれを見て発狂しないいでられるほうがおかしい。運よく頭がはじけ飛ぶまではいかなかったようなので鎮静剤を飲まして少し待つ。

「ん、あ、あれ…なんかおぞましいものを見た気がするのね。」

「気のせいよ。」

「あ、えーつと。どうなのね?」

「どうって…一通り終わったけど。」

彼女はイクに後ろの惨状を見せる。ほとんどバラバラになり多くの肉片が海面を漂い。時折大きめの肉塊も浮いていた。

「あ、あーうん。十分なね。ていうか十分すぎるのね。」

「とりあえず仕事はやるだけやったけど私はどうすればいいのかしら。」

「えっと…。これだけやれば後はもう十分だからもう帰って大丈夫なのね。」

「もう帰っていいの?」

「一日中待った結果がこれなら、たぶんいいのね。」

「…あ。ああ…。」

そういえば奴が来るまでこの場でじっとしていたが、そういえば日をまたいでいた。おそらくイクはずっとここで待っていたのだろう。悪いことをした。

「あとはイクたちに任せるのね。」

「頼むわ。」

後をイクにまかせ、彼女は帰路に着いた。

唐突だが、すこし艦載機の話をする。艦載機の尾翼にはそれぞれの鎮守府で特有の識別用のマークが施されている。当然、彼女が今いる鎮守府の艦載機にもそれがあつたのを見た。さつきからずっと上空をまわっているあの飛行機。持っていた遠眼鏡で見えたところどうやらあの飛行機はうちのではないらしい。…あーあ。あれはきつとバシたな。これからまた面白くなりそうだ。

彼女はこれから起こるであろうことに微笑を浮かべながら鎮守府へと帰っていった。

第10話

あれから数か月たった。意外にも彼女の生活は何も変わらなかった。だが周りは賑やかになったし窓から見える艦娘の量も増えた。あの時にここではない飛行機が一枚ずつと彼女を付け回したことは誰にも言わなかった。そのせいでこの立場が危うくなったりしているような様子はない。

あの日を過ぎてから彼女に接触してることが極端に少なくなった。まずもってあれから提督が一度も彼女の前に姿を見せないし、もつと言えれば見せるのは吹雪だけであとは叢雲がたまに来るぐらいだ。唯一の楽しみは鳴子との世間話だけになってしまった。

「……。」

うるさい。にぎやかになったのは恐らく最近になってこの建物近くまで艦娘が来るようになったからだ。これまたかなり騒がしい。なんだ、広場か公園にでもなったのか。おかげで本もまともに読めない。

「曉さん。ここにちは。」

「あ、はい。」

鳴子だ。鳴子と会話すれば多少はこのイライラもおさまるかもしれない。今日は部屋に招いて話をすることにした。

「こんにちは。最近は賑やかになってなかなか静かに過ごせないですね。」

「ええ、なんでも近くに新しい宿舎を建ててらしくて。」

「え、初耳なんですが……。」

現状、彼女はこうして鳴子から話を聞いたり新聞を読ませてもらうなどしないと外の状況が全くつかめない。

それにしても、新しい宿舎。通りで最近艦娘の声以上に何やら大きな音がすると思っ

た。

「まあ、最近決まったようですしね。その割には着工がかなり早い気もしますが。」

「……どこどうなるんでしょうね。」

「あー、残念ながらそこは私にもまだわからなくて。」

提督は彼女をどうするつもりなのか。彼女の存在を一部の艦娘を覗いて秘密にするというのはまだ守っているが、近いうちに破られそうなのと彼は言っていた。秘密にするのもいいのだから見つかったのなら見つかったでその場で存在をばらすとか暴れるとかすればいい。

夜になってやっと静かになった。流石に工事を一晩中やるなんて言う蛮行には走らなかつたようだ。今夜も狩りに行こうと窓に手をかけたが：気が変わった。たまには普通に玄関から出よう。階段を降り玄関をくぐる。ドアがガラス張りのため中からでも外の様子が分かる。数か月前まで見えていたドアの向こうの景色は幕のようなものに覆われた建築物ですっかり見えなくなっている。どうやら道も新しくなっているようだ。アスファルトが黒い。このまま裏手に回って降りる。

「……？」

裏手に行こうとすると声が聞こえた。何を言っているのかはわからないが複数人いるようだ。ひとまず深海棲艦ではなさそうなので警戒はせず、ただゆっくり行く。壁に沿いながら建物の側面に回る。いる。艦娘が4人。

「……にい……？」

「きいた……に……にいる……。」

ひそひそと話している。あたりは暗いし4人とも向かい合って話しているので誰なのかはわからないが背は低い。駆逐艦だ。ふと、顔をあげた一人が目が合った。

「あつ……。」

「どうしたのいかづ……あ。」

全員が同じ反応をした。彼女は4人を見て凍り付いた。まず目についたのが明るいシヨート髪の艦娘。昔目の前で死んだ妹の一人だった。それから順々に目を移し、電響：そして自分。彼女と同じ暁がいるとは前から知っていた。しかし、いざ会うと少し混乱した。そのうえ、死んだ妹たちまでこうして生きて出会うとさらに混乱した。取り乱しそうになるのをこらえて黙るが、それは彼女たちも一緒なのかお互いだんまりになつて気まずい時間が流れる。

「…ね、ね? やっぱりいたでしょ?」

気まずい空気を破つたのは自分：暁だった。

「…珍しいね。暁の話が嘘じゃないってのは。」

「ちよつと!? どういう意味よ、それ!」

「ねえ、あなたは誰なの? どうしてここにいるの? ここで何をしているの? その服は何なの?」

「はわわわわ。い、雷ちゃん。一度に質問しすぎなのですよ。」

一斉に話し出した。暁たちの会話を聞いていると昔の自分を思い出す。それで十分混乱も解けた。

「あー…。」

彼女が何か話そうと口を開けると暁たちは急に黙って彼女を見つめる。どうしよう

か、自分は暁だと搬送か……いいか。別に困ることはない。

「私は……暁よ。あなたと同じ。」

「え!?! 私と同じ?」

「Ничего себе。これは驚いた暁とはあまり似てないようだけど?」

「こうすればわかるかしら。」

帽子とマスクの布を降ろす。

「本当だ。暁にそっくり!」

「そっくりなのです!」

「こっちの暁よりもずっと落ち着いてる感じだね。」

「なによそれ! 私がいつも落ち着いてないみたいじゃない?」

「なんだか昔を思い出す。暁なんかは本当に当時の彼女そっくりであるし、響たちもそ

うだ。艦娘量産計画はどうやら成功したようだ。

「ねえ。あなたたちは何でこんなところにいるのかしら?」

「うえ!?! そ、それはあ、そのお。」

「噂だよ。そんなにしどろもどろになるようなことでもないだろう。」

「噂?」

「そう! ここにお化けが出るっていう噂よ。あなたは見てない?」

「お化け……いや、見てないわね。どんなお化けなの？」

「えっと、角が生えてて、顔がなくて、海の上を艀装なしで走る化け物なのです。」

ふむ。角が生えてて、顔がなくて、艀装なしで……。もしかして彼女のことか。ちよつと帽子を手を取つてみる。確かに羽の部分があつて角のように見えなくもない。顔がない。マスクか？ 帽子をかぶり布をあげれば顔は見えなくなる。艀装なしで走るというのは言うまでもなく、彼女はそのまま海上を歩くことが可能だ。

「ほ、ほかに何か噂とかは……？」

「潜水艦の人たちがたまに月向かつて変なポーズをしてる人がいるつて言うのを聞いたことがあるわ。」

自分だ。それは明らかに彼女だ。彼女自身だ。月に向かつて交信するのは狩人のみ。そしてこの場にいる狩人は彼女のみ。そう、それつまりそのお化けというのは彼女であつた。しまった完全な不注意だ。潜水艦のことはすっかり抜けていた。そうか、今の時代は潜水艦もいるのか。

「あー、たぶんそれ私ね。」

「え、あなたがお化け？」

「まあ、その噂通りならね。」

「なんだ。やっぱりお化けなんていなかったじゃない！ 心配して損したわ！」

「怖くて毎晩トイレに私を起こしていたのに何を言う。」

「ちよ、それは言わない約束でしょ!？」

「はて?」

「とぼけないでー!」

「と、ともかくこれで安心なのです。鎮守府七不思議のうちの一つが解決したので
す。」

「七不思議? 私のこと以外にも何かあるの?」

その七不思議とやら聞いてみると案外普通なものが多かったがうち一つが気になっ
た。

「たくさんの腕がある巨大な化け物?」

「そうよ。と言つても私たち4人しか見たことないから非公式だけどね。」

「そもそも七不思議自体、公式とかそういうものがあるとは思わないけどね。」

「ちよつと!なんで響はいつも一言余計なの!？」

「まあまあ、落ち着いて…その化け物はあなたたちにしか見えないって言ったけど本
当?」

「はいなのです。今日も一瞬だけ見えたのです。みんな信じてくれないのです……。」

「その…化け物って顔が網目みたいになってない?」

「言われてみれば…そうかも？ 暁はどう？」

「え？ うーん？ そうだったかしら？ そうだったような気もするし、そうじゃなかった気も…。」

「それっぽい輪郭が見えるだけだから、はつきりとは見えないんだ。」

「そう…。じゃあ、どこで見たとかは？」

「あそこなのです。何時もあそこで。」

電が指したのは今はもう見えないが、いつもアメンドーズが張り付いている場所だ。まさかこの四人にはアメンドーズが見えるというのか。驚いた。狩人の素質がある。

「…ありがとう。さ、今日はもう帰ったほうがいいわ。もうかなり遅いわよ。」

「それもそうね。明日もまた会えるかしら？」

「構わないわよ。どうせ私はずっとここに居るから。あ、私のことは誰にも話しちゃだめよ。」

「なんで？」

「私の存在は一応、秘匿になってるから。私のことを知っているのは提督と…あとは艦娘が数人よ。吹雪とか、叢雲とか…。」

「うわ、駆逐艦のトップじゃない！」

「これは…触れてはいけない危険なおいがするね。」

「分かってもらえたかしら？」

「はいなのです！お口チャックなのです。」

「よろしい。じゃあ、また明日。私はこの二階のこつち側にいるから何なら扉叩いてもらえば出るわよ。」

「分かったわ！じゃあ、また明日ね、もう一人の暁！」

結局今日はどこにも行けなかったが、その代わり面白い出会いをした。もう一人の、自分に出会った。そして、彼女たちには上位者が見えている。面白い！

今日、とうとう誰もその扉をたたくことがなかった。見放されたか。もういらぬのか。

「…餓死でもさせる気かしらねえ。」

飯は来ないが、部屋を出るなど言われているからそのままにも来ず…という感じだろうか。生憎彼女に飢えというものはないので全くダメージはないし、むしろ自由になったともいえよう。

「暇ねえ…。」

久々にヤーナムでも行こうか。本も大方呼んでしまったし何か面白そうな本を探しに行こう。ヤーナムってどこに本あるんだろうか？…ビルゲンワース…？

「行つてから考えればいいわね。」

そうだ。今日も鳴子が訪ねてくるだろうし張り紙の一つでもしといたほうがよからう。あの人にヤーナムと言つても通じるだろうか。…いや、あの人のことだ察してくれるだろう。

物置に入り灯りから狩人の夢へ、そこからビルゲンワースへ向かう。久々に来たが一氣に辛氣臭くなつた。それにじめじめしている。ハエを張つ倒しながら中に入る。昔は誰かいたが今は無人だ。本が散らばっているので一つ試しにとつてみる。

「上位者…地下の墓に……。」

これは上位者についてつらつらと書いてあるらしい。とりあえず数ページめくつていい感じのやつだけ持つて帰ろう。せっかくだし一冊ぐらひはここで読んでいこうか。

ビルゲンワースの二階。外につながる扉。くぐると正面に月が見え今はもう誰も座っていない椅子がある。彼女はその椅子に座り一つの懐中時計を出す。これはこちらとは違う世界。鎮守府がある世界の時間を示したものだ。恐らく暁たちがまた訪ねてくるだろうから少し早めに、夕方には戻つたほうがいいだろう。

本を一冊開いて読んでみる。やはり上位者のことについてより詳しく書いてある本のような。地下の墓にその亡骸が眠っているのだの、宇宙からきているのだの。…おや。これはアメンドーズのことだろうか。……秘匿者。監視者。アメンドーズがいるところ

には何かしらの秘密があるようだ。奴らはそれをほかの存在から隠し、また荒らされないように監視していると。たしか、鎮守府にもアメンドーズがいたな。あそこに何かあるんだらうか？

案外こういう本も面白いものだ。今後、上位者狩りをするのに役立つかもしれないし。こんどヤーナム観光でもしようか。もしかしたら面白い発見があるかもしれない。協会とか。

さて、もう一冊。これは…上位者の作り方…：だらうか？上位者って作れるものなのだろうか。そういえば確かいたな。上位者かなんかを作ろうとしていたところ。なんといったか…：そうだ。メンシス学派だ。あそこはなんか変な生き物をたくさん作ってたし、ヤハグルにいたあの獣…：獣？はたぶん上位者だらう。啓蒙手に入れたし、獣かどうかはあやししいし、近くにミコラーシユのミイラがあつたし。

というか、なんでビルゲンワースにメンシス学派の本があるのだらうか。つながつていたのか…？わからん。まあ、いつか。別に本が面白ければそれでいい。

そろそろいい時間かもしれない。にしても、この椅子の座り心地は大したものだ。なんとなくこの椅子の先、湖の真ん前までいく。今はもう何の輝きも持っていない。…：そいういや、あの蜘蛛の頭とアメンドーズの頭は似てたな。ヤーナムで『湖の蜘蛛が真実を

隠してる』とかかれたメモを見た記憶がある。だからどうしたちうわけではないのだが、アmendローズが守護者であり秘匿者であり監視者であるというという記述と鎮守府にいたアmendローズが少し気になる。晝たちあたりに何か聞いてみたらわかるだろうか。今日試しに聞いてみよう。

第11話

部屋に戻った彼女は考えていた。ここにアmendローズがいる理由。ここに人工の上位者が？

「…まさかね。」

さつき読んだ本のせいでそんな考え方をしてしまったが、一番ありえないことだ。確かに提督あたりが怪しい気がするがいくら何でも上位者を作れるはずなどない。あの男はただの提督で、人間だ。上位者のことはもちろんヤーナムのことすら知らないはず。しかし、どう考えてもアmendローズがここにいるのかが分からない。やはり、あの男がメンシス学派であるのか。もしくは、彼女と同じようにメンシス学派がこちらにやってきたのか。あのあともう少し調べてみたが上位者を作ろうとしていたのはメンシス学派だけであった。理由は強靱な肉体を持つため。詳しくは分からないが、獣の力を使つて自らを進化、上位者かそれ以上の存在にでもなろうとしていたのだろうか。そんなことを当時の彼女が知るはずもなく、荒らしまわつてすべて水泡に帰さしてしまったのだが。

だめだ。考えれば考えるほどよくわからなくなる。第一彼女以外にこっちへ来るこ

とができるやつが居るのだろうか。万が一いたとして彼女は人形と狩人以外に他の存在を見なかったが、夢を通さずにこの世界に行く方法があるのだろうか。

結局、考えても何も案は出てこず彼女はコンコン、とノックされた音で思案を止めた。

「誰……つてあなた達。」

「来たわ!」

「早いわねまだ……18時にもなっていないのに。」

「ふふん!それほど私たちが優秀つていうことなのよ!」

「私たちは練度が低いからね、やることが少ないんだ。」

「自由時間がながいのです!」

一つのことを話すのに話すのにわざわざ4人で分担しているところが姉妹っぽいな。廊下で話をするのも何なので中に招いた。生憎この部屋の内装は来客を想定していない。複数人用の机椅子もなければ出せる茶も茶菓子もない。とりあえず、4人は一度も使ったことがないベッドに座らせることにする。

「で、今日は何の用かしら?」

「昨日応えてくれなかった質問に答えてもらうためよ!」

「質問?」

確か昨日何かマシンガントークを仕掛けられた。3つぐらい同時に吹っ掛けられた

か。

「あー。えっと、私がここにいる理由と何をしてるかだつたかしら？」

「そうよ！あとその服も。」

「この服はただの狩装束よ。ここにいるのは…そうねえ、なんて言つたらいいか…！
いて言うなら軟禁されてるのよね。特にこれと言つてしていることはないわ。何もさ
せてくれないから、自由気ままよ。」

「え！軟禁されてるの!?!」

「ひどいのです！誰にやられたのです！」

「あなたたちの提督さんよ。軟禁と言つてもただここに置かれて何にも声かけられな
いだけなんだけどね。」

「司令官か。そういうえば最近司令官が素っ気ないな。」

「あ、確かに。最近の司令官つたら全く晝たたちのこと構つてくれないのよ。」

「それは、司令官さんが忙しくなったからなのです。」

「でも、いくら何でもここで軟禁しておくのはひどいと思うわ。」

「司令官さんはそんなことするはずないと思うのです…。」

「ふーん…ねえ、最近提督に変わった様子とかない？こう…怪しい実験みたいなのを
しているとか。」

丁度いい。なんだか、話題が提督のほうへ向いたのでついでに怪しいことがないか聞いてみよう。暁たちなら彼女よりも提督と接する機会が多そうなのでなにか情報があるかもしれない。

「司令官に？なにか変なところあったかしら？」

「さあ？私たちもあんまり司令官と会えなくなっちゃったからよく分からないのよね。」

「分からなかったらとりあえず別にいいわ。次からちよつと気を付けておいてくれる？」

「もう一人の暁はどうしてそんなに司令官に執着するんだい。」

「…あなたたちにしか見えない化け物と関係があるかもしれないの。」

「本当!？」

「なるほど。それなら別にいいか。」

「…ねえ。もう一人の私。その服…なんて言ったかしら…。」

「狩装束のこと？」

「そうそれ。それってなにか狩りをするってことよね。もう一人の私は獵師さんなの…なんか、もう一人の私って言いにくいわ。」

「無理にそう呼ばなくてもいいわよ。」

「じゃあ、新しい名前つけてあげましょ！」

「何にするのです？」

「暁でしょ？だから……うーん？」

「何か出ないのかい。自分と同じ名前だろう。」

「うーん……何も出てこない……。」

「暁……暁……あ！暁って夜明けって意味よね？じゃあ『ヨアケ』でいいんじゃない!?」

『ヨアケ』夜明けか。まあ、いいんじゃないだろうか。

「私はそれで構わないわよ。」

「じゃあ、きょうからあなたはヨアケね！」

「で、話を戻すけど、ヨアケは獵師さんなの？」

「ん……獵師とはちよつと違うかな。私は狩人よ。」

「カリウド……？」

「狩人だよ、暁。」

「狩人って何するのです？」

「……狩人に興味があるのかしら？」

「すっごいあるわ！」

「そう。じゃあ、今日の夜……そうねえ、22時くらいにまたここに來たら連れて行って

あげるわ。」

「本当!?!じゃあ、その時間にまた来るわ!そろそろ夕食の時間だから早くいかなくっちゃー!」

「あ、まって。ヨアケは何も食べてないんでしよう/何か持ってきたほうがいいかしら。」

「大丈夫よ。私のことなら心配しないで。」

「でも……。」

「暁。本人がいいと言っているんだ。それを否定するのは失礼だよ。」

「…分かったわ。じゃあ、またあとでねヨアケ。」

「ええ、また。」

そうか。彼女たちは狩りに興味があるのか。嬉しいことだ。笑みがこぼれてしまう。つかの間の喧騒は過ぎ去り再び静寂が訪れる。時刻は1800。夕暮れは低く、日が沈み切るまでそう時間はかからないだろう。彼女:ヨアケは、今度から来客用にいろいろ準備してたほうがいいかしら、と実に平和な悩みをかかえていた。

日が沈み切り暗闇が世界を照らし数刻。彼女は一人、電気をつけずに月光で本を読む……ことはさすがにできないので素直に電気をつけてビルゲンワースから持ってきた

本を読んでいた。あれから、アmendローズについてもっと何か書かれていることは二だろうかと呼んでいたが、分かったのは昔は、アmendローズはたくさんいたらしい、ということだけ。確かに、アmendローズは上位者ながら個体数は多い。ここにいるアmendローズもあちらにいた個体とは違う個体だろう。

コンコン、とノック。時計の時刻は22時である。彼女たちだ。

「いらつしやい、時間びつたりね。」

「レディーだもの！時間はしっかり守るわ！」

「暁が全然起きないから遅れかけたんだけど。」

「だ、だってしようがないじゃない！22時っていつもは寝てるんだもの！」

「それじゃ、行きましようか。」

「私たち何も用意してないけど大丈夫？」

「大丈夫よ。今回は見るだけでしょ？」

「はいなのです。」

「じゃあ、ついてきて。」

彼女は、暁たちを引き連れ建物の裏まで行った。すぐ下は海だ。彼女はいつも通り海へ降り立った。しかし、暁たちは降りてこようとしない。

「どうしたの。」

「え、か、狩りつて海に出るの？ 森じゃなくて？」

「そうよ。だから、見たいなら降りてきなさい。」

「で、でも私たちは艀装がないと海の上には立てれないわ。艀装はもう工廠が閉まつてるからつけれないし。」

「ん…：そうね…：じゃあ、ちよつとこれ使つてみて。」

彼女が取り出したのは頭蓋骨。『狂人の智慧』だ。狩人は得た啓もうによつてさまざまなことを『知る』。それが例え理に反するものだとしても、その方法を知ることができる。

「うえ!? な、なによそれ！」

「何つて、智慧だけど？」

「い、いやいやいや。それ完全に頭蓋骨じゃない! どう、しろつてのよ！」

彼女はその頭蓋骨を握り潰す。手ごころなうめきとともに、頭にはその狂った思念が一つ入り込む。彼女には何の問題もない。何時も見た光景よりも幾何か平和な惨事が入ってくるだけだ。

「…え、ええ…。」

暁は明らかに躊躇った。引いてまでいる。雷や電まで苦笑いだ。しかし、彼女がもう

一つ取り出した狂人の知恵に響がそれを受けた。

「え、ひ、響、本気!？」

「本気も何もこうしないと何も始まらないだろう。ここまできて退くわけにもいかな
いし……お、思つたよりも簡単に……い!？」

「ひ、響!？」

狂人の智慧を割つた瞬間いままですつと涼しい顔つきをしていた響の顔がゆがんだ。
両目をおかつと見開いてその場にうづくまる。この狂人の知恵は狩人に対してこそ、ただ
啓蒙を得るだけでどうつてことないがそうでないものがその智慧を引き入れることは
まさに危険なことである。『狂人の智慧』だ。普通の人がどうてい耐えられないものだ
ろう。狂人の智慧は狂人が知るからこそ意味がある。そう、もし響に狩人である可能性
がないなら彼女はその場で発狂して死ぬ。ヨアケは、彼女たちにはその資格があると判
断し使わせようとして、実際に響が使つた。

響はすぐに元に戻つた。額に汗がにじんだり、まだすこし呼吸が荒くあれど発狂する
ことはなかつた。

「だ、大丈夫? 響。」

「あ、ああ。大丈夫、落ち着いた。」

「さあ、おいで。私は狩人であると強く思つて。狩りに行くんだつて。狩りのためな

らどんなことも辞さない。海の上ぐらい造作もない。」

ヨアケは響の手を取り優しくエスコートする。響もそれに応え彼女の手を取りゆつくりと海面に降り立つ。

「…本当だ。立ってた…!」

「すごい!ねえ、今度私私!」

「はいはい。落ち着いて。ほら。」

雷にも智慧を渡す。割った時の反応をひどくしかめっ面をしただけ。その次に試した電も同じであつた。

「うへえ。なんか嫌な感じ。」

「頭の中にいろいろ入ってきたのです。」

二人も響と同じようにヨアケのサポートに海面に降り立つ。

「さあ、最後はあなたよ。暁。」

「う、うん…。」

「なんだい。怖いのかい暁。」

「大丈夫よ。ちよつと嫌な感じはするけどすぐに収まるわ。」

「暁ちゃんも早く来るのです。」

「わ、分かつた!分かつたわよ。」

「はい、どうぞ。」

暁にも狂人の智慧を渡す。しかし、彼女は気づいてしまった。暁にわたった瞬間。渡したものが狂人の智慧ではないことに。それは『上位者の叡智』だ。神に近い存在である上位者。その断片が収まったこの智慧はもちろん狂人が持つ智慧以上の狂気が入っている。人ならざるものに出会った人の智慧とそもそも人ならざる者の智慧。簡単に人が触ればたちまちその理解を通り越してしまう。訳が違う。流石にいくら彼女たちが狩人になりうる者たちであっても狩人でなければ絶対に死ぬ。

彼女はなぜそんなミスを犯してしまったのか。否、彼女はミスなど起こしていない。最初から知っていた。自分が暁に上位者の叡智を渡そうとしてしていることに。それは通り一遍の、すこし頭の出した存在では簡単にその命を砕かれてしまうものであることを。だから彼女はそれをわたした。

暁は上位者の叡智を割る。人ならざる者の叡智がいま、暁の頭に怒濤の如くなだれ込む。…数秒経つ。暁に変化は見られない。何も起こらない。

彼女は笑いをこらえていた。必死にこらえていた。久方ぶりの興奮。今すぐその場で自分の予想の的確さについて自画自賛を盛大にしたい気持ちを抑え微笑で済ます。

「……おしまい？」

「そうね。どう？なんともなかった？」

「…なんか変なのが見えたわ。」

「なんかつて?」

「うーん。見たことない動物だったわ。頭がすごいいもじやもじやしててすごく細かったわ。そいつ私を捕まえようとしたけど、つかもうしたらなんかどつか行っちゃった。」

「そう…さあ、おいで。あなたもきつと立てるようになってるわ。」

「う、うん…わあ、立ってる!」

「遅いよ、暁。」

「響が早すぎるのよ! あんなに普通怖くて触れないわ。」

「さあ、行こうか。個々の夜はいつまでも続かない。私の狩りは夜の間だけだから。彼女は暁たちを促す。その顔はひどく優しかった。しかし、彼女の内面はまたひどく笑顔であった。耐えた。耐えたぞ。あの上位者に彼女は耐えた。しかも平然としてだ。しまいには上位者すら恐れた。ああ…素晴らしい。それが自分の分身であるというのだからなおさら素晴らしい。きつと、彼女たちはいい狩人になれる。いや、して見せる。して見せよう。私がそうさせてあげたい。そうだ、帰ったら彼女たちを夢に連れて帰ろう。そして狩人様に頼んでまた獣狩りの夜を繰り返してもらうんだ。ああ…楽しみだ。ひどいくらいに…ああ、だめだだめだだめだ。耐えろ、耐えるんだ。興奮したらまた全

身から血を吹き出してしまふぞ。あまり怖がらしてはいけないよ。楽しみは逃げていかない。ゆつくりゆつくり楽しまなくちや。

彼女は暁たちの前に立ち歩く。その顔は誰にも見られていない。ゆえに、その笑顔はひどくゆがみ、一番の楽しみを後に置き、今夜の獣狩りを始めんとしていた。

第12話

「ここにきて見てね。」

「ここで？ 何もいらないと思うけど？」

「いいえ。来る…ほら。」

海からイ級が飛び出す。今ここでなます切りにしてもいいがそれでは曉たちの服が汚れてしまうだろう。ここはひとつ、受け流すようにして投げ飛ばす。ね？と4人のほうを見ると、唾然として吹っ飛ばされたイ級を見ていた。

「この程度で唾然とされては困るわ。さ、私の近くにいると服が汚れちゃうからもう少し距離を取って見てて？」

4人が十分に距離を取ると、彼女の手には武器が握られる。さつきと同じように飛び込んできたイ級の腹を袈裟斬りにする。腹を裂かれたイ級は彼女に大量の体液をぶちまけ海中に没していった。

心配。またイ級が飛び出してきた。いや、少し違う。イ級ではなく口級だった。しかし、狩る対象であることに違いはない。仕掛けを発動させ鉈に変える。腹を見せた口級に刃を滑らせ綺麗に裂いていき、装甲で引っかかる。彼女の持つ仕掛け武器は、例え上

使者であろうと簡単に断つ。深海棲艦の装甲など話にならない。しかし、それは武器の性能もさながら、彼女の技量に基づくところが多い。ゆえに、少しでも角度が甘ければその刃を通すことができない。彼女はコレを逆手に取り刃を装甲で引つ掛けて、振り下ろして口級を海面にたたきつけた。当然この程度で深海棲艦は沈まない。彼女は手早く聖剣に持ち替え頭のあたりに突き刺す。口級は痙攣し、それもすぐに収まり静かに沈んでいった。

後ろから眺たちに感嘆の声が聞こえる。しかし、彼女はその声になんという反応をすることなく思案にふけていた。というのも、ここ最近さつきみたいを考えもなしに、まるで理性をなくしたように突撃する駆逐艦や軽巡をよく見る。なんなら、数日前からはそれしか見なくなっていた。なぜだろうと考えたときに、数か月前に試験した兵器が思い浮かんだ。さつきのイ級や口級の挙動はあの時とそっくりだった。しかし、今回彼女はあの時間こえた悪趣味な悲鳴のような梅井期越えのようなものは一切聞こえない。ならば違うのか。：あれから数か月たっている。もしかしたら改良され地区過程でその声がより深海棲艦だけに伝わるようになったのかもしれない。メンシス学派の本を読んだせいでいろいろな偏見が思い付くが、たどり着いた結果としてやはり人口の上位者を、それも深海棲艦を素材にして作っている可能性がある。

「すっごいわ！あなたあんなのできるのね！あれ？ヨアケ？」

「ん、あ、え、ええ。そうよ。でも。あなた達もきつとできるようになるわ。」

「え、ほんと!? やった! そうしたらきつと司令官も喜んでくれるわ。」

「でも、服が大変なことになりそうだけどね。」

響が彼女のことを怪訝な目で見てくる。それもそうだ。彼女の体は深海棲艦の体液でまみれている。色こそあまり目立ってないが、その分鈍い光沢は見えるし何よりも深海棲艦独特のにおいがより一層際立っている。つまり臭い。彼女は特に気にするようなことでもないのだが、この4人はそうではないらしい。

「魚臭いのです。」

「む、そんなに匂うかしら。」

自分でも嗅いで見るが、そこまで悪いにおいではないと思う。

「さ、どうかしら。あなた達も狩人になる気はない?」

「うーん。面白そうではあるけどちよつとおいとか…。」

「それに、電はあんなに機敏には動けないのです…。」

「大丈夫よ。匂いはいずれ気にならなくなるし、狩人だつてみんながみんな最初から機敏に動けるわけではないわ。」

その時、突如海から影が飛び出す。その影はヨアケ目掛けてその手に持っているものを振りかざそうとする。その突然の出来事に4人は表情を変えることすらできない。

しかし、彼女も4人に向けた優しい笑顔のままその飛んできた影目掛けエヴェリンを撃った。その、衝撃で影はみつともなくひっくり返った。

「あなた達だつてこんなことできるようになるわ。……ねえ。今わたし、大事なお話してただけで分らなかったかしら。」

丁度いい見せ場を作ってくれたとは言え、話を邪魔された。これすなわち万死に値する。どうやらこの深海棲艦は軽巡らしい。先ほど同様な性質はないように思うが、心なしか恐怖でおののいているように見える。しかし、彼女にはそんなことは関係ない。無慈悲になぶり殺す。これは狩りとしてではなくただの八つ当たりだ。殴り続けているうちに相手の皮膚は破れ、殴っていた音もいずれミンチに手を突っ込んだような音に変わる。殴るたびに派手にしづきが上がる。

「……ふう。さて、どうかしら?やる気になってくれた?」

「あ、いや。ちよつとそのー私には……。」

「電もちよつと……。」

「あの光景を見ると正直引くね。」

「ちよつと響!?!」

「なんで言っちゃうのです!?!」

「?思ったことは正直に言うべきだろう?」

「だとしても正直すぎなのです！」

「そうよ！少しはオブラートに包んであげなきゃ。」

引かれてしまったし、ちよつとその言葉はかえつて逆効果のような気がする。

「私やりたい！」

その声は意外な人物から発せられた。

「ほ、本当かい。暁。」

「ええ！あれこそレディーよ！」

「……ええええ。」

「それはないと思うのです。」

それは自分も思う。が、暁が乗つかるのは予想できた。自分をもとにして作られたコピー品だ。趣味嗜好が同じなのは当然だ。…成長した今だから言えるが、当時の自分もわけもわからずレディー、レディーと連呼していたものだ。こうして暁を見ると当時自分がどう思われていたのかよくわかる。…クツソ恥ずかしい。

「しようがない。暁がやるなら私もなろう。保護者が必要だろうか？」

「ちよ、ほ、保護者ってどういうことよ！」

「えー、二人がやるなら私もなろうかしら。」

「み、みんながやるなら私も…。」

ふむふむ。ネームシップの提案には基本的に賛同するというプログラムもちやんと機能しているらしい。艦娘量産化計画は成功していたみたいだ。これがもつと早く実行されていたら自分たちが死ぬこともなかっただろうに。…いや？死ななかつたらヤーナムにはたどり着いていなかった。やつぱり死ななきやだめだ。いやそれでも響が死んでしまったのは…でもやつぱり…やめよう。うん。過去は過去、今は今だ。

「じゃあ、早速戻ってヤーナムに行きましようか。」

「やーなむ？」

「そうよ。狩人になるにはそこで狩りをしなきゃ。あそこで狩りを完了させるのが狩人よ。」

「…あ、明日私達遠征じゃないっけ。」

「え。」

「…そうだね。明日は遠征に行かないと。」

「数日コースなのです。」

「えー、じゃあそのやーなむに行くのは…。」

「遠征が終わるまでお預けだね。」

「えー…はあ、ごめんねヨアケ。私達明日遠征なの。」

「…あーうん。しょうがないものね。遠征は、うん。」

すっかりやる気が削がれてしまった。今日は狩りにも気が入らない。それに4人を返さない。仕方なく血まみれな彼女は4人を引き連れて鎮守府に帰っていった。

鎮守府に帰っていくその背中は明らかに落ち込んでいた。

翌朝、彼女は一人で部屋の中にいた。本来なら今頃ヤーナムで暁たちとキャツキャウフフな狩人ライフを送っていたはずだが、あいにく彼女たちは今日から数日間遠征に出かけておりいないのだ。丁度、この窓から彼女たちが出発していく様子も見えた。

「……。」

何もすることがない。本でも読めばいいし何ならヤーナムでもめぐって暇つぶしすればいいのだが不思議とやる気が起きない。結局今日も朝にだれも来ることはなかったし。

「……………」

「暇そうですね?」

「うお!」

珍しくベッドの上で天井を眺めていると、突然目の前に顔が現れた。

「な、鳴子さん?」

「はい、鳴子です。」

「あ、あれ。どうして。」

「扉をたたいたんですけど反応がなかったもので、鍵も開いていたので失礼ながらお邪魔させてもらいました。」

「あ、す、すみません。」

彼女に限って誰かの気配に気づかないで接近されるというのはありえないことなのだ、この上なく暇だったので注意力が散漫になっていたのかもしれない。相手が鳴子であったというのものもあるかもしれないが。

「どうしましたか？ 暁さんらしくないですよ？」

「いやあ、ちよつと予定がつぶれてしまったので暇してたんなんです。」

「あー、なるほど。あ、それじゃあ今時間ありますよね？」

「え、あ、まあ。3日後までは。」

暁たちからはあの後遠征が3日かかると聞いた。

「十分です。ちよつと用事に付き合ってくださいませんか？」

「え、まあ。いいですけど。」

「よかった。丁度人手が欲しかったんですよ。私の部屋まで来てくれますか？」

「わ、分かりました。」

鳴子に連れられて彼女の部屋にむかう。何気に鳴子の部屋に入るのは初めてだ。

「あ、そうだ。一つ暁さんに言っておかないと……大丈夫かな？」

「え、なんですか？」

「あー、いや。ちなみに文明の利器的な者って持ってますか？」

「文明の…いや、現代ものは特に…しいて言うならこれとか…？」

彼女は、エヴェリンを鳴子に見せた。

「うーん…これぐらいなら問題はないかな。最悪私が何とかすればいいか。すいません、じゃあ行きましようか。」

「あ、はい。」

鳴子が扉を開けるとそこには部屋が…というわけではなく先が全く見えない階段だった。明らかに空間がおかしいがもはや彼女はその程度では驚かない。

「足元暗いので気を付けてくださいね。」

「はい。」

かなり暗い。太陽の光は窓から十分入っているはずだが扉から先はまるで別空間のように光が急に届いてない。携帯ランタンぐらいはつけておくか。

階段が続く。

「これ、どれくらい続くんですか。」

「すぐですよ。ほら。」

鳴子の言う通り、下のほうにぼんやりと光が見えてきた。なんとなく後ろを見ると上

に見えるはずの外の風景は全くなく闇が広がっていた。階段を下りた先には洞窟が広がっていた。謎の人が二人いる。彼女の姿を見て、鳴子の姿を見ると姿勢を正した。うち一人が服を持ってきて鳴子に渡した。

「あい、お疲れ。あ、彼女のはいいかな。あの服装なら別に大丈夫だよ。」

鳴子はその場で着替え深いローブをまとった。顔の上半分が見えなくなつたがそれだけで一気に不気味感が増した感じがする。

鳴子が着替えるともう一人が案内をするように洞窟の中を先行し始めた。鳴子の後ろに彼女がついていき、さらにその後ろをもう一人がついていく。

階段の前まで来たとき先行していた一人が横にそれた。

「うむ。案内ご苦労。お前さんも頑張れよ。さ、暁さんここからも暗いですし今度は階段も長いですから気を付けて。」

「はう。」

鳴子の言う通り、さつきと同じように階段は暗く、彼女が携帯ランタンで照らしているところ以外は全く何も見えない。互いに無言のまま時間の流れすら全く感じないうちにくと鳴子がまっすぐに進みだした。そのあたりに彼女が至ると階段が終わつておりまっすぐな道となる。なぜか周りにはこんなにも暗いのに鳴子の姿だけははっきりと見えるのだが、さすがに暗すぎたので松明をつける。すぐに大きな扉が現れた。鳴子は

その扉を何のためらいもなくおす。床をこすつてうごく扉の荘嚴な音がなり、その先の風景が見える。

森だ。その入り口の四方を森が取り囲んでいる。扉をまたいで後ろを見ると、扉はあるがその扉は岩についておりその岩も上には伸びず鎌倉のような形をしていた。あの階段は独立した人るの空間なのだろう。

「さあ、着きました。本当はここから北のほうに行かないといけないんですがこの時間はあつちとは違つてあつちよりも進みが早いです。大体：場合にもよりますけどあつちの一日でこちらの一週間、長いと数十年になります。

「そんなに…。」

「早い話。こつちでは時間があつちよりもたつぷりありますから少しぐらい遊んでもいいですよ。私の用事もそこまで急ぐようなものでもありませんし。この先に町があるんです。この世界、ドリームランド 幻夢境で一番大きな町らしいです。

「なるほどそれは面白そうですね。」

鳴子がウキウキで森の中を進む。ここはここであつちの世界や、ヤーナムとは違つてかなり気持ちのいいところだ。あつちみたいに森が全くないような場所ではなく、ヤーナムみたいに獣がはびこる森でもない。

「ふん、ふんふん。」

「…鳴子さんが一番楽しそうですね。」

「え、あ…あはは。私もここに来るのは久しぶりですからね。私みたいな存在でも、町は楽しいですから。」

「ほー。あなたを楽しませるような街ですか。それはそれは、期待が膨らみますね。」
森を歩いてしばらく、突如として道が現れた。アスファルトや、小石の道ではなく轍が目立つ獣道的なもの。そこだけ木や植物が生えておらず光が堂々と照らしていた。

「えーつと、たしかウルタールがこつちだから、こつちか。」

鳴子が道を右に進んだ。彼女もそれに続く。太陽がまぶしく光っていた。

第13話

歩くことおそらく数時間。日が真上から少し傾いた頃、大きな城壁が見えた。あれが……なんと言ったか「ダイラスⅡリーンです。」そう、ダイラスⅡリーン……今この人ナチュラルに思考を読んできたな。いやもう今更だ。この人神様だし。

城門の中はまさに都市といった感じだ。中世のヨーロッパといえばこんな感じだったのだろう。案外建物はヤーナムと変わらない。せいぜいガス灯みたいなちよつと近代を感じさせるものがない。しかし、その盛況は辺境の地であるヤーナムとは全く違う。思わず圧倒されてしまうほどだ。

「……おお。」

「ね、すごいでしょう。この街私も好きなんですよ。人間の活気もよく感じられる。あつちの世界もこことは違う盛況があつていいですがこつちはこつちでまた別の良さがあります。そうですね……一週間は滞在しても大丈夫ですよ。」

「い、一週間？ いいのですか。ここでそんなに……流石に鳴子さんの用事とか……。」

「大丈夫ですつて。あ、あつちの世界のことを心配してるんですか？ 何、どっちみち一週間未満だとあつちでは半日過ぎないくらいですよ。もし3日以上進んじやったら

私がなんとかします。」

流石に神様が言うのと信憑性が違う。その言葉に甘え1週間後この城門前で集合ということで別行動を取るようになった。去り際に鳴子からお手製だという地図をもらった。かなり現代的なデザインの地図だ。この世界の文化がどれほどかわからないが、おそらく中世あたりで、中世にこんな地図はないだろう。まあ、彼女にとつてはこつちのほうを読みやすくいいのだが。

別れて早速彼女は地図を読み込む。探しているのは服屋だ。というのも、この街は中世ぐらいとはいえヤーナムよりも更に前だ。狩装束はただでさえ変わった作りなのにあつちの世界では古めかしい格好になるがこつちだと奇抜な衣装に見えるだろう。現に今も彼女は道の真ん中で注目を集めている。そばを通っていく人が皆一度は彼女に目を向ける。やつとそれらしい場所を発見し、さあ向かおうと思つたところで気づいた。

「…あ、お金ないわ…。」

そう、彼女は通貨の類いを持っていない。いや、厳密に言えば持つてないわけではないがおそらくこの世界では使えないだろう。彼女はこの世界の通貨を持っていない一文無しだった。

しかし後悔先に立たず、後の祭り。鳴子に言えばなんとかしてもらえただろうが、

すつかり忘れていた。仕方がないので、服屋を探すときに見つけた図書館に向かう。

「…おお。」

大きい。ただ一言、それだけだ。その荘厳さに周りの奇つ怪な目も忘れていた。まるで、教会とも言える形をした建物はそれはもう大量の本があると体が表していた。ワクワクしながら帽子を取り中に入る。

中はやはりとても広い。吹き抜けになつていようだ。それでいて何階か上に通路があるのが見える。当たり前だが中は静かだ。しかし、ヤーナムのように当然の静寂ではない。人々が図書館をそうである場所して認識した上の静寂だ。だから完璧な静寂ではなくページをめくる音。歩く音。本を手にする音。そういう静寂だ。

この世のすべての本を集めたんじゃないだろうかと思えるほどの蔵書量。きつと面白い本がたくさんあるだろうと奥へ突き進む。

人である以上、必ず人と同じ行動をとる。この世界でも奇つ怪な姿をしている彼女を図書館内の人はやはり気にする。本から少し目を外しちらつと見てはまた本に視線を戻す。

彼女はあある一つの棚で曲がり、本を物色する。ここの街は中世の見た目をしているので、てつきり英語圏だと思つていた。だから、その街にある図書館の蔵書は英語だと思つていたがロシア語や、おそらくドイツ語、フランス語、どこの文字であるのか分か

らない本まである。勿論日本語も。ただ、古い。今で言う文庫本やライトノベルの類は一切なく、昔の枕草子とか源氏物語とかそういうものだ。

狩人となったその時から彼女は英語を理解した。今までさっぱりだったのにまるで母国語のように解し、話すことができる。当然読むことも。昔の日本語はさっぱりだが、英語ならまだわかりそうだ。適当に物色し手に取る。本当はロシア語の本なんても読んでみたかったが、昔ロシア人とのハーフであった妹から簡単な単語とキリル文字の読み方だけ教えてもらったので、読めはするが理解はできないので諦めた。

そこら辺の椅子に座りページを一つめくる。更にもう一つ、またもう一つ。その繰り返し。この本は何かの物語、攫われた姫を助ける騎士の物語。すべてが大げさで、騎士は自分の正義を振りかざし魔物を殺し姫を奪還しようとする……卑屈になりすぎた。この騎士は人間の英雄だ。それでもまだ限りなく人に近い存在なのでまだ人間に同情心がある。

最後には見事魔物を討ち取り姫を取り戻した。これでこの本はおしまい。本棚に本を戻し次の本を探す。

次の本は、と手に取り中身を見ると、これは神への讚美歌か。普段はこういうものは全く見ないがせっかくだし見てみようか。

あれからかなりの本を読んだ。悪魔による所業や、とある王様の逸話。確かにここに

はたくさんの本がある。ジャンルが一緒でもその中身はそれぞれが違うものになっている。これほどのものを一日で読み切れるはずがない。一週間で読み切れるかも怪しい。できることならばずっとここで本を読みつくしていたい。しかし、そうはいかないように、どこからか鐘の音が鳴ったかと思うとそろそろと人が出てきて外に出て行った。窓を見れば日もだいぶ傾いている。通りで少し読みずらいと思つたわけだ。閉館の時間だろうか。仕方がないので彼女も外に出る。

外に出た彼女はこの図書館の名前が書かれた看板を見る。『ドリームランド図書館』すばらしい図書館だ。ぜひ、明日も来よう。

困った。宿がない。そうだ。彼女はこの世界の通貨を何一つ持つていない。宿を取ろうにも金がないのだ。彼女に睡眠は不要だ。しかし、野宿で夜を明かしたいとは思つていない。日もかなり暮れてきた。この世界には夜に灯りが照らされることはなくもうすでに周りは真つ暗となつていた。いよいよ、鳴子に金のことを相談しなかつたことが悔やまれる。と、どこからか声が…？

「…て……………」

「いい…か。な？」

「おじさ…………ぜ？」

女の声が一つと、男の声が二つ。発生源に近づいたびにその声がどんどんはつきりと聞こえ出す。

「な？この先に俺の家があるから、今日は泊めてやんよ。だからな…？」

「ですから、家には父と母がいるので…。」

「はは。小娘一人でこんなところまで大変だねえ？おじさんたちが送ってあげよう。

でもその前に腹が減ってるだろう？ご馳走してあげよう。」

「結構です！」

「んだと、このガキ。俺たちがせっかく親切にしてやろつてのに。」

「恩を仇で返すような奴にはお仕置きしねえとなあ？」

「ひつ、い、いや。やめてください…。」

おつとこれは、少し危なそうな様子。恐らくこの曲がり角の先。あまり目立たないところだ。すつと角から覗いてみる。おつさん二人に女性…いやあれは子供か、が腕を引つ張られているようだ。気づかれないように近くまで行く。ここは全くと言っていいほど灯りがないので足音や気配を完全に殺した彼女のことを気づける人など誰一人いない。その中でおつさん二人と女の子一人の攻防を互いの顔が見えるぐらいつき顔をじつと見る。表情や言動を見る限り…彼女は女の子の味方に付くのがよさそうだ。

「あら、こんな夜中に何してるのかしら？ナンパ？」

「急に聞こえた声に三人は驚きそして自分の横を見てさらに驚き男の一人がつかんでいた腕を離れた。」

「な、なんだてめえ。何時からそこに居やがった。」

「ついさつき。声があるから来てみれば：気持ち悪いことしてるのね。」

「んだと、てめえ。喧嘩売ってんのか？」

「上等だこら！」

男が一人勝手に彼女をなぐりつけた。帽子が飛び、彼女はうまくマスクも降ろした。

「：なんだ。てめえも女じゃんかよ。いいぜ、お前も俺の家で相手してやらあ。」

「お、そんなときや俺も混ぜろよ。」

男が彼女の顔を見た瞬間、その顔は吐き気がするほどのにやけ顔になった。相方も同じく。こういったは何だが、彼女の姿はそれなりのものだ。大人の美しさには及ばないだろうが、少女としてはそこそこな者だろう。ゆえに、獲物が増えた男らは気が緩む。しかし、それは彼女も同じ。大したことがないかと気が緩む。彼女は男にゆつくりと近づく。上着を脱ぎ棄てながら。

そういうことだと勘違いした男らはにやにやとしながら彼女を手で迎える。抱き合っている、お互いを見つめあうように立つ。

「へへ、なんだ。さっきの文句はどうした。その気になったか？」

「うふふ。そうね。よく見たらあなたはとつてもいい男だわ。さ、あなたも私のことをよく見て。」

彼女の言葉道理男は彼女の目を『しっかりと』と見つめた。しかし、徐々に男の顔色が蒼く、そして白くなっていく。表情にも余裕がなくなり、ガタガタと震えだした。抱きしめていた手を離し彼女から逃げようとする。しかし彼女はそれを許さんと、余計にしつかりと抱く。やがて男はあ、あ、と短く呻き倒れた。突然のことに二人組の相方はパニックになっていた。

「んな、て、てめ、何しやがった！」

「んふふ。私の愛に耐え切れなかったみたいね。どう？あなたは私の愛に耐え切れるかしら？」

「ひつ、う、うわあああああ！」

相方はもう一人を置いて逃げてしまった。薄情なものだ。さて女の子はというと。
「……………」

完全におびえていた。まあ、それもそうか。急に男が顔面蒼白で震えながら倒れたら恐怖だろう。まして女の子ならさらに。できるだけ怖がらせないように目線を合わせ、優しく話しかける。

「……大丈夫?」

「……。」

まだ、震えているが頷いてくれた。やはり、ちよつと服装があれだろうか。しかし、これ以外に持つてきているのは……。仕方がない、人間見えない部分と暗いところが苦手だ。ぱつと制服に着替える。女の子は彼女の葉や着替えに驚くがさつきよりも顔がよく見えるのと、服が白くわずかな月光でも反射し明るく見えるのもう少し緊張を和らげた。

「立てる?」

「……はい。」

おや。今気づいたが、この子は図書館で司書をやっている子ではないか。ちらつとしか見てないが確か入り口にいた子だ。背丈は彼女と同じくらいか。

「どうしたのこんな時間にこんなところで。」

「あ、えつと。仕事が長引いてしまつて……。」

なんとこの見た目で仕事とは。恐らく年も当時の彼女ぐらいだろうに。

「あ、あのあなたは どうして?」

「え……あ、あー……お金がなくて……ね?」

彼女は、ある宿にいた。なぜか？町で助けてもらった子に宿に泊めてもらったからだ。その子はウルタールという町から出稼ぎやってきたらしく、約一か月の間ここに滞在するそうだ。その間はその子の親の友人の宿主がこの子を好意で泊めてやっているらしい。一週間ここにいるという話をするとなんとその間ここに泊まっていいたいと言ってくれた。何かお礼をしなければ…。

「お礼にあなたの仕事を手伝うわ。」

「え、いいですよ。そんな。」

「いいえ。流石にこれは私も何かお礼をしないと落ち着かないわ。だから、ね。お願い。」

「ま、まあ、そういうことなら。あ、ご飯食えますか？お金ないから買えないんですよね？私今から買ってきますよ」

「え、あー。大丈夫よ。私はご飯食わなくても大丈夫な体してるから。ほら今日はもう結構遅いし、さつきみたいなのもあつたから私が買いにいつてあげるわ。」

出稼ぎに来ているという時点でこの子の経済状況は想像に難くない。なぜ、出稼ぎ先が司書なのか、あまり司書が出稼ぎに向いているとは思えないが、ともかく流石にお金

を使わせるのは更に気が引ける。それに、もうこんなに暗いのだから食料を扱う店が開いているとは思えない。一人で行かせるのもそうだ。

「む、私も人を助けたいんです。気を使ってくれるのはありがたいですが、何も食べれない人を前に私だけご飯を食べるのも落ち着きません。それに、近くにずっと開いているお店があるんです。あそこならご飯とか、日用品とか色々売ってるんですよ。」

なんか、正論を言われた気分だ。というか自分の言ったことをそのまま言い返された。同じことをまた言われた以上はその好意に甘えなければならぬ。ただやっぱりまだ心配だったので買い物には付き添った。

しかし、ずっと開いているお店か。そんなコンビニみたいな店があるのだろうか。

彼女は道中近づいてきた何故かいた人攫いを女の子に見つからないように狩ったり、変な獣が来たときは殺意マシマシで睨みつけて追い返しながらその女の子が言う店に行った。その店の名前は『コンビニエンスストア』なんでこの女の子は無事なんだかと思っていた彼女の頭の中は一瞬でこの言葉に置き換わった。……特定の名前ではないが……。世界観壊れる。

その看板を見た彼女は微妙な笑顔で固まってしまった。

第14話

名前こそあれだが、見た目はおかしくはない。中も、THEコンビニ二というわけではなくゲームで見えるようなお店だ。商品は様々。弁当と書かれていたり、水、薬、雑貨も売っていてここはコンビニ二つぼかった。

「ここ、ちよつと高いんですけどずっと開いているしそのまま食べられるので便利なんですよ。」

それはまあ、コンビニ二エンスストアだから。入ってきたときに店員さんが「いらつしやいませー」と気の抜けた挨拶をする。ああ、深夜のコンビニ二ってこんな感じなんだろうなあとくだらないことを考えながら女の子についていく。

「どれにしますか？好きなを選んでください。」

この世界の物価がどれほどか分からないが隣から、これはちよつと…おいしそうだけでもう少し安かったら…と聞こえてくるのでやはりちよつと高いのだろう。ここは一番安いのを選んであげたほうがいいだろうが、それだとまた怒らせてしまいそうなので真ん中からちよつと数字が低いものを選んでおいた。

会計を済まし、また宿まで戻る。また色々と女の子に近づこうとしていたので殺気を

出しながら。

部屋で弁当の蓋を開ける。入っていたのは白米に野菜炒めのようなもの。それと肉が2枚。うーん、中世に白米は似合わないなあ。

「うふふ。これ、コンビニでしか売ってないんですよ。なにも、とつても遠くから渡ってきたものだとか。」

だろうな。おそらくあつちの世界のものが何かしらの理由でこつちまで迷い込んできたのだろう。図書館で地理の本を覗いたが、異世界からやってきた国王のことが乗っていた。その国はコンビニであふれかえつてたりするんだろうか。

遅めの夕食を済まし床につく女の子。当然狩人である彼女は眠らず一人夜空を眺めていた。そういえば女の子の名前を聞くのを忘れていた。明日の朝聞いておこう。こども、あつちと変わらない月が浮かんでいる。ぴよん、と何かが窓から飛び込んだ。猫だ黒ぶちの猫が窓から入ってきた。月の光が淡く毛を照らしている。猫は机の上で座り尻尾を時折ゆらして彼女を凝視する。彼女もまた猫を見る。互いがしばらく見つめ彼女はゆっくりと手を差し出した。猫は近づき何度か彼女の手をスンスンと嗅ぎスリつと頭を手にくすつた。両手を伸ばして猫を撫でる。彼女は一晚中猫をなでて過ごした。

夜が明け、空が白んで来た頃、それまでずっと撫でられ続けていた猫が急に彼女の手

から離れ入ってきた窓から出ていってしまった。それと同時に寢室の扉が開き、女の子が起きてきた。

「ふわ〜。おはようございませす。」

「おはよう。」

女の子は少し寝ぼけながらもテキパキと準備し30分立たない頃には2人分の食事が並んでいた。

「悪いわね。色々と。」

「いえ、いいんですよ。私も一人で寂しかったですし。」

「…そういうえば、私あなたの名前を聞くのを忘れていたの。あなた、名前はなんていうの?」

「私はフレデリカといいます。」

「フレデリカ、ね。私は、暁よ。」

ヨアケと言う名はあくまであつちの暁と区別するため。本名は暁だ。

「アカツキさんですか。あまり聞かない名前ですね。どこから来たんですか?」

「暁でいいわよ。…異世界って言っても通じるかしら。」

「異世界?…あーそうなんですね。へー、初めてだなあ、こんなに近くで見たの。」

「結構いるの?そういう人。」

「ええ、そこまでつて言うほどではありませんが時折見かけることはあったので。」

「そうなの。」

「はい。話しかけられたことも数回ありましたね。」

思つたよりいるもんだな。自分みたいに誰かに連れられてくるんだろうか。…あ、そうだった。話すことがもう一つあつた。

「ねえ、私あなたの仕事を手伝おうかと思うの。」

「え、ええ？」

「一週間も泊まらせてもらうのに何もしないのは流石にあれだわ。」

「で、でも…。」

「あと正直なことを言うと私今お金がないの。知り合いの人に貰うのを忘れちゃつたの。欲を言えばお金もほしいなあって。」

「ああ、そういう。日雇いですか…私が言うのも何ですけど司書つてあまりお金にならないですよ。」

「あなたがそれを言つたらおしまいじゃない。」

「私は元々司書を目指していたので…時間を掛ければまともな金額はもらえますし。でも暇ですよ、私みたいな本の虫じゃないと。」

「大丈夫よ。私も虫だから。」

「…館長に頼んでみます。人手不足なので断られまじないと思います。」
「助かるわ。」

結論から言えば彼女は司書として働けることになった。給料もその日ごとに出る。人手が足りないというのが案外深刻なようで已む無く給料を引き上げているがそれでも集まらないらしい。

仕事はフレデリカが教えてくれた。昨日見た限りでは一日中座って過ごしていたように思ったが、意外にもかなり動き回る。図書館は別の町の図書館と繋がっていて、ほぼ毎日本の移動が行われている。こっちから別のところへ貸し出すものや、逆に向こうからこっちへ貸し出された本が地下の倉庫へ山積みになっている。それを対応する棚へおいていくというものだ。確かにこれは誰もやりたがらないのも頷ける。彼女は初日なのでかなりもたついたがフレデリカは流石先輩というか、テキパキとこなす。

昼も過ぎた頃やつと一連の流れが終わった。

「…う。やつと終わったわ。フレデリカは凄いわね、あんなに早く。」

「いえいえ、アカツキも凄いですよ。最後の方は結構慣れてたじゃないですか。私、慣れるのに結構時間かかったのに。」

「ふふ、それはフレデリカの教え方がうまかったからよ。」

「そんなー、お世辞でも嬉しいですよ。」

「本音よ本音。」

あとの時間は閉館まで入り口近くにある席に座り、貸出なんかを希望する人の対応をすればいいという。昨日彼女が見たのは、この光景だったのだ。彼女たちの他に数人ここから離れたところに司書として座っている。ここは図書館としてはトップクラスに大きいらしい。やはりそうなのだろう。彼女もここまで大きい図書館は見たことがなかった。だから人手不足もその分顕著なのだろう。

あとの時間は彼女にとつて幸福そのものだった。好きな本を好きなだけ読める。今日散々歩き回ったおかげである程度ジャンルの場所を覚えたので見つけるのも簡単になった。フレデリカもそういう。

閉館まで時は過ぎた。今日は本の貸出を願うものはいなかった。図書館に来る人はそこそこいるのだが、借りる人がいないのは不思議だ。

「そうですね。本を借りる人は滅多にいません。借りても結局夜になればこのこと同じで暗くて読めませんし、明かりをつけても読みにくいですから。このほうが窓も大きいですし明るいんですよ。何より本がたくさんありますから。本は高価なんですよ。」

フレデリカはそういう。そうか。確かに昨日フレデリカと出会ったときはあたりに明かりはほとんど見えなかった。因みに本の値段がいくらぐらいか聞いたところ、昨日

のコンビニの弁当の10倍以上はするそう。：それは図書館で読んだほうが絶対にいいな。

閉館したあとに行うのは軽い見回り。まだ人がいないか、忘れ物がないかを確認する。終わったたら館長に報告、それで帰れる。彼女は約束通りその日の給料をもらった。相変わらず基準が分からないがだいたい本が2冊買えるぐらいだ。案外もらえるものだ。

「さ、早く帰りましょう。あまり外にしていると危険ですから。」

「どうしたのよ。昨日はそんなに慌ててなかったじゃない。」

「本当は人間があまり出歩くもんじゃないですよ、夜に。人間じゃない人もここにはよく来るので昼は人気が多いのでおとなしいですが、夜だと襲うことがありますから早く帰ったほうがいいんです。私達司書は仕事が夜遅いですから尚更。」

その割には昨日結構ルンロンとコンビニに行ってた気はするが、まあ昨日実際にフレデリカを攫おうとしてたやつは見たし本当なのだろう。余計なことはせずにさっさと帰ろう。

今日は幸運にも幸運にも何にも会わずに帰ることができた。帰るとフレデリカは早速夕食の準備をしだした。

「あら、いつの間買い物に行ってたの？」

「昼休みのときです。いつもそのときに行ってるんですけど昨日は昼休みがなくなっちゃうぐらい忙しかったんで。やっぱり、食材を買って作ったほうが安上がりでいいですよ。」

「そうね。」

夕食を食べたらフレデリカはさつきと寝てしまった。夜遅くまで仕事をしてそこから夕食の準備をするとなるとかなり疲れるだろう。彼女自身負担になっているのでは、と少し思うがフレデリカは自分のためだけに作るよりかは誰かに作るほうが全然いいと言ってくれる。

夜も更け、今日も月が浮かぶ。この世界では何故か狩りをしたいという欲求が浮かんでこない。それほど自分が満足しているのだろうか。今頃鳴子はどこで何をしているのだろうか。ヒョイツとまた窓から猫がやってきた。昨日と同じ柄の猫。今日は最初から彼女の膝に乗り喉を鳴らしている。彼女はまた一晩中猫を撫で続けた。

翌日、図書館へ行くと館長と先に来ていた司書が話し込んでいた。

「おはようございます。あれ、どうかしましたか?」

「おはよう、いや実は少し困ったことになってね。」

話を聞くに、今日ここから別の町の図書館に本を送る予定だったと。最近その道中に

猛獣に襲われることが増えたため護衛を雇っていたそうだ。しかし、今朝今日護衛にくく予定だった人が体調不良でついていくことができなくなったそうだ。今から新しく護衛をしてくれる人が見つかるかわからないし、かと言って護衛もなしに出すわけにもいかない、ということだそうだ。

「誰か、代わりの人が見つかるといいんだが……因みに君たちは……。」

「まさか、無理です。」

「私もです。」

「私も。」

「私はいけますよ。」

「いや、いいんだちなみに聞いてみ……え？」

手を挙げたのはもちろん彼女だ。本業などころまである。猛獣から守る、要は獣狩りということだ。

「いいのアカツキ!？」

「まあ、私はそれが本業だから……。」

「ほ、本業?」

「いや、この際何でもいい。助かったよアカツキ。幸い護衛する道は途中で別もひとと交代するからその日には帰れるはずだから。」

「では、私は今日はそっちに行きますね。どこへ向かえば?」

「正門に行けば業者がいるはずだ。これを持っていきなさい。」

渡されたのはこの図書館のマークがついた首飾り。

「気をつけていってきてくださいね。」

フレデリカに見送られて図書館を出る。制服から狩装束に着替えた彼女は言われたとおり正門に向かう。業者の外見を聞き忘れたが多分見ればわかるだろう。

そうこうしていると、正門が見えてきた。業者は：ああ、多分あれだ。荷台に大量に積まれた本が見える。

「あの…。」

「あ?…ああ、君が?」

「はい。よろしくお願いします。」

業者の人は彼女の姿を訝しんだが首飾りを見て納得したようだ。待機していた牛を歩かせ正門を出る。

「今から20kmほど歩く。そこで交代だからそこまでよろしく。」

「わかりました。」

森の近くに大きな街があるので門をでればすぐに森に入る。轍にそいながら荷物を牛に引かせる。荷物である本が大量な上に引っ張っているのが牛ということでかなり

スピードが遅い。

「お前、男か？女か？」

「はい？」

「いや、その見た目だからよ。性別がどつちか分かんねえんだよ。声は女っぽいが。」

「私は女ですが。」

「まじか…大丈夫なのか？」

「ええ、心配はご無用。本業ですから。」

「そうか、そこまで自身があるなら…ともかく頼むぜ。俺はせいぜい逃げんのが限界だからよ。」

「はい。」

森はすぐに深くなり。辺り一面が木となった。もはや目印は通ってきた道だけでそれでもすぐに前後がわからなくなりそうだ。

…聞こえた。狼の鳴き声だ。少し遠いが、気づかれたか。

「…おい。」

「はい、聞こえました。まだ遠いようですが。」

「このまま気づかれずに行ければいいが…少しスピードをあげようか。」

「そうですね。あまり早すぎると揺れる音で気づかれるので程々に。」

「あいあい。」

歩くスピードを少し上げた。……音がした。遠くから茂みの音が。だんだん大きくなってくる。こつちに近づいてきているのか。まさかバレたか。武器を取り出し、聞こえてきた方向へ体を向ける。来る、来るぞ。段々、段々と大きくなっている。速い。走ってるな。人間のスピードじゃない。獣だ。

「おい。どうした。」

気づいていない業者が牛を止めた。まずい。彼女は海へあまり人を守りながら戦ったことがない。これだと後ろを気にしてなかなか戦えない。

「危ないですから私から距離をとって。」

「は？何を……」

「いいからー！」

バツと茂みから飛び出てきた。狼だ。狼ではあるが体躯が異常に大きい人間以上ある。いや、それどころかこいつは……ヤーナムにいるような狼じゃないか。

第15話

どういふことだ。町中で人攫いを見たときから違和感はあるがこいつまでいのはいくら何でもおかしい。なぜかは分からない。考えられるのは何らかの理由でヤナムから迷い込んできたか、それとも獣の病がこつちまで媒介されたか。後者はないと思いたいが、一先ず荷物を守らないと。幸いにも獣が狙っているのは自分だ。

「今のうちにできるだけ遠くへ！」

いや、駄目だ。こいつが一匹とは限らない。この場からできるだけ離れてはほしいが目の届かないところまで行かれると守りきれない。やっぱ戻つて…と言おうとしたとき、その思案どおりもう一匹が飛び出した。しかも狙いは業者のようだ。

彼女は酒瓶をとりだす。血の匂いをするこの酒を業者に向かう獣めがけ投げる。見事瓶はあたり、割れ、中身がぶちまけられる。人間はきつ過ぎる、しかし血に酔う彼女には心地いい匂いではあるのだが。中身をまともに浴びた獣はその場でのたうち回すが、そこに彼女を狙っていた獣が噛み付いた。噛みつかれた獣は、血の匂いで混乱したと同じ獣に食い尽くされるだけであった。一匹になった獣を彼女はすぐさま処理し業者に向かう。業者は荷台によりかかり息を切らしていた。

「はあ、はあ。な、なんだあいつ。あんなの見たことないぞ。」

「見たことないの?」

「狼はあるさ。でも、あんなデタラメな大ききしたやつは見たことねえぞ。あんなのに襲われたら命がいくつあつても足りねえぞ。」

あいつがここの固有種という樂觀的な考えは打ち砕かれたわけだ。ということはず原因がある。今すぐ調べたいが今は課せられた仕事を全うしなければ。

日も傾き始めた頃、道の向こうで仰々しい格好をしたやつが自分たちを見つけて近づいてきた。そいつは持っていた紋章を見せながら話しかけてきた

「やあ、やあ。私が護衛を引き継ぐものです。あなたが前任? 若いねえ。女の子じゃないか。」

鎧をガシヤガシヤと鳴らしながらやって来たそいつは、見た目の割に声が若かった。お前も若いだろうが。

「あまり見くびらないほうがいいぜ。この子には十分助けられたんだ。それじゃ、ここまでありがたいな。またあいつに会わないように祈っとくよ。」

「…あなたも無事でいられますように。」

ここまで何度か普通の獣には出会ったが結局あの狼に出会ったのはあの時だけだった。森は暗くなるのが早い。日が傾き始めたばかりだというのにもう薄暗くなつてい

る。例の場所は依然として死体が転がっているがハエやなんかは一切ちかよっていない。出てきたのはこの茂みの奥。すでにかなり暗くなっているがそんなことを気にせずに進む。進んでいくうちに血の匂いがしてきた。そこらの動物ではない。人間でもない。獣の病に侵された者の独特の血の匂いだ。進むたびにどんどん濃くなっていく。酔いしれそうになるのを我慢しながらその中心地にへと進む。

ふと、開けた部分が見えてきた。おそらくあそこが中心地。そこは半径5m程度の真円上でその真ん中に何かある。

「何で灯りが……。」

あの灯りだ。だが少しデザインが違う気がする。ここは灯りしかないように思えるが明らかに血の匂いの強さが異常だ。まるでヤーンナム中の獣の血を集めたみたいな匂いの濃さ。彼女も理性を保つのに苦労するほどだ。

途端に感じる気配。人ではない。エヴェリンを向けると森に逃げるロープ姿が見えた。

「待ちなさいー！」

エヴェリンを相手の足めがけて発砲する。が、当たったロープ姿は霧散してしまつた。

「な、クソ！」

どこぞの森のババアを思い出す。鐘の音はしないが、啓蒙の多さが裏目に出ている。段々分身が増えていってる。しかしその全てが森に逃げている。完全に逃げる気だ。彼女を襲おうというのではない。是が非でも逃げる気だ。おそらく奴が獣を呼び出した張本人なのだが捉えようにも360度どこを見ても同じ格好をしたやつが森に逃げていつてる残念ながら追いかけるのは無理だ。そのまま見送って見えなくなった頃不思議と血の匂いも段々と薄れていって更にはあの変わったデザインの灯りも消えてしまった。

かすかに残る血の匂いを辿つてもとの道まで戻ってきた。相変わらず死体があるまま転がっている。多分この獣はあのロープに呼び出されたんだろう。だが、このままにしなくても病を振りまくかもしれない。燃やしておこう。あの業者は獣の血を浴びてないから大丈夫なはずだ。ここで燃やしては森に引火してしまうかもしれない。森と城壁の間は平地があるのでそこで焼いてしまおう。

平地の岩場まで死体を引きずり日をつけた後街へと向かう。日は沈み、すっかり暗くなっていった。図書館はすでに閉館時間になっていたようで、入るやいなやフレデリカに飛びつかれた。

「遅かったじゃないですか!」

「ごめんなさいね。思ったより時間がかかってしまったわ。」

「いやいや、無事でよかったよ。はい、これ今日のぶんね。今日はホントおつかれ。多めに入れといたよ。」

「すいません、ありがとうございます。さ、帰りましょう?。」

「はい。」

深夜、今日も猫を撫でながら彼女は月を眺めていた。眺めながら彼女はあのロープ姿を思い出していた。

ロープ姿の顔は見えなかったが、走り方は男の走り方に見えた。ただ、彼女も狩人をやつていく上で走り方は変わつてきたので、ロープ姿が男なのかは分からない。身長的には高すぎず低すぎず。体軀はロープのせいでよく分からなかった。そしてあの変わったデザインの灯り。彼女が知っているものよりも色が少し暗く、模様はあまり変わつてないが、彼女が使うものが釣り下がっているいわゆるカンテラ状のものである。どっちかというど街灯に近かった。ポールに直接くつついている。あのタイプの灯りは見たことがない。それ以外に特徴はなかったが一番不思議なのはあのロープがなくなつて、血の匂いも、あの灯りすらも消えてしまったことだが、どれも彼女には初めてのことであつて全く見当がつかなかった。

残りの日数、幸いにも何も起こらず、彼女にとっては読書に耽ることができるといふ

幸せな日々を過ごした。しかしそれも今日でおしまい。明日には鳴子との待ち合わせの日だ。

「二週間だけだったけどありがとうね。」

「二週間がまるで一ヶ月のようでしたよ。私もこんなに楽しい日々を送れたのは久しぶりです。やっぱり誰かと一緒に過ごすのが一番ですね。」

「そうね、一人は寂しいものね。」

昔の妹たちが思い浮かぶ。今はもういない3人。墓参りぐらいしたいが遺体はどこに行ったのかわからないし、どうせどこかに収容されているかすでに別で埋葬されたのだろうか。

フレデリカはその日遅くまで起きていた。明日も仕事じゃないのかと聞くと休暇を取ったらしい。

「はあ、寂しいなあ。」

「大丈夫よ。貴方には私以外にも色々な人がいるじゃない。」

「でもー、家に帰ったら一人なんですよ。」

「じゃあ、誰か一緒にいてくれる人でも見つけたら？」

「う…それは、また…別にどこかで…。」

「うふふ。そうしていると色々と逃すわよ。」

「まるで、知っている風ですね。私と同じぐらいでしょうに。」

「さあ？見た目で判断してはいけないわよ。」

「…ふあ。」

「大丈夫？眠いなら寝てしまってもいいのよ。」

「いえ、今寝たら絶対にアカツキの見送りができませんのでこうなったら徹夜します。」

「今まで徹夜しなかった人が急にできないわよ。」

案の定そこから30分もしないうちにフレデリカは寝息を立て始めた。それを見計らったかのように猫が窓から入ってきた。

「あなたとも今日で最後ね…：そうだ、私が出ていったあと、この子と一緒にいてくれないかしら。この子すつごく寂しがり屋だから。」

猫は理解したのかしてないのか分からないような返事をして、喉を鳴らす。彼女も微笑を浮かべ猫を撫でる。

空が白んできた。いつもならこの頃に猫は彼女の膝からおり、出ていってしまうのだが今日は未だに彼女の膝の上までいた。やがて日が昇り始め、活動が早い人間たちが何かしらの準備をする音が聞こえてきた。

「…そろそろ行くかしらね。…頼んだわよ。」

猫に念押しをし、そこらにあつた紙に『私にはもう必要ないから全部あなたが使つてちょうだい』と書いて今までの給料が入つた封筒を置き、最後に自分の帽子を置いておく。なに、もう一式分の予備がある。一つぐらいどつかにおいていつたつて問題はな

い。
「世話になつたわ。」

フレデリカを起こさないように静かに扉を閉め一階に降りる。準備で起きていた宿主に別れを言つて外に出る。彼女は制服から装束に着替えて鳴子との待ち合わせ場所に向かつた。

待ち合わせ場所である正門前、そこにはすでに鳴子がいた。

「あれ、もういたんですか？ 早いですね。」

「いえいえ、暁さんも十分早いと思いますよ。まだこんなに朝早いのに。」

「時間がわからなかつたので取り敢えず早めについてこうと思つて。」

「なるほど、時間厳守ですね。」

「そう、ですかね。」

時間を決めてないのに時間厳守つてあるのだろうか。いやそんなどうでもいいことはどうでもいいんだ。

「それで、鳴子さんの用事つてなんなんですか？」

「あ、そうですね。じゃあ、取り敢えず行きますか。」

「行くつてどこへ…?」

「北です。」

「北。」

「北です。」

「はあ。」

北と抽象的に言われてもよくわからないが、鳴子に言われるままダイラス＝リーンの街を出る。北に向かいながら森に入りしばらくしたところで鳴子が止まった。

「じゃあ、飛びますね。」

「…はい?」

「飛びます。」

「なんでです。」

「目的地まで歩くと死ぬほど時間かかるからです。」

そう言うのと、鳴子の体からメキメキと骨が折れていつているかのような音がしだした。

「え、ちよ、大丈夫ですか?!」

「心配しないでください、ちよつと体を作り変えてるだけですから。」

「か、体を？」

やがて鳴子はうずくまり、四つん這いになった。再び彼女が声をかけようとする、背中から来ていたローブを貫いて何かの骨組みのようなものが出てきた。鳴子が痙攣し始めた。すると今度は骨組みのようなものからどんどん羽が生えてくる。痙攣し終わり、立ち上がった鳴子には見事な翼が生える結果となった。

「さ、これで飛べますよ。ほら、手を繋いで。」

「え、は、はい……うわっ!？」

突然のことで理解の追いつかない彼女は言われるままに両手をつなぐと、途端に鳴子はそのまま飛び上がった。

「う、うわあ、飛んでる。」

「うふふふふ。こっちのほうが楽でしょう？このまま行きますよ。」

ビュンと速度をあげ北に向かって飛ぶ鳴子。しかし速度をあげたせいで彼女の手にかなりの負担が生じ、結果早々に握力が限界を迎えようとしていた。

「ちよ、な、鳴子さん！あ、握力が！握力がもう！」

いくら狩人をしていて人間離れしている彼女でもまだ人間をしているので流石にキツイのだが、高速で飛んでいるせいか鳴子は全く気づかない。

「ちよ、も、もう無理……あつ。」

手が、抜けた。

「え、暁さん？ 暁さん!？」

重力と慣性に従い斜めに落ちていく彼女。下にはまだ森が広がっており、うまく行けば葉が衝撃を吸収してくれるだろうが、最悪杖が刺さる。あの木に落ちるなど思っていた頃に何かに服を捕まれ、そのせいで服が腹に勢い良く食い込んだ。

「おゴオ!？」

「だ、大丈夫ですか?」

「ちよつと大丈夫じゃないです……。」

「と、取り敢えず一度下ろしますね。」

地面におろしてもらおうと圧迫された腹が戻りまた痛みが走り出す。その痛みを耐えること数分、やつと落ち着いてきた。

「大丈夫ですか。なんで突然落ちたりなんか……。」

「すみません……握力がなくなってしまうって……。」

「握力?」

「すごい速さで飛ぶもんですから、とても引つ張られるんですよ。」

「……ん、えつとお……あ、あーあー、なるほどそういうことですか。すみません。そこまで考えてなかったです。」

「いえ、そんな。」

「それじゃ、もうちよつと乗りやすいものにしますね。」

またメキメキと音が鳴り出すが今度はなるこの体全体が変わっていく。ロープが破れ、骨格が人間じゃないものへと変わっていき、同時に体全体から毛が生えていく。心なしか体軀も大きくなっていき、最終的には大きな人面鳥へとなっていた。

「さ、背中に乗ってください。これなら疲れないでしょう。」

「あ、はい。」

なんだろう、既視感がある。どこかで見たような気が…映画で…あ、あれだ。ハ○ルだ、ハウ○で見たことあるやつだ。

背中に乗り、かなりマシにはなったが今度は風圧により背中から落ちないようにするのにかなり苦労したのであった。

第16話

風圧に押されてしばらく、気づけば地面に降りていた。

「あ、こ、ここは？」

「お疲れ様です。さ、目的につきましたよ。」

「は、はあ。それでここはど、こ…。」

彼女の眼には鳴子の後ろに立つ巨大な動物が見えた。像よりも大きなその体には鱗が生えており長い首には馬のような顔がついている。翼には蝙蝠のように被膜が張っており、一言では言えばその見た目はドラゴンであった。

「私のペットです。シャンタク鳥のシーちゃんです。」

「シャンタク鳥、と、鳥？えと、そのそのシャンタク鳥…シーちゃん？に何かするんですか、餌付けとか？」

「いいえ、この子知能は人間並みにあるんでご飯ぐらい自分で何とかしますよ。建物とかも立てたりしますし。ただこの子自分の首が届かないところを繕いすることができますよ。だから私がたまにこうやって代わりにしてあげるんです。人間の構造はこういう時に楽ですよ。」

「え、あ…あれこの子が建てた…」

シーちゃんの横には遺跡で見るような建造物があった。人が建てたものと遜色ない形はこんな生物が建てた者とは到底考えられない。

鳴子は一生懸命シーちゃんの首をよじ登っている。手に持ったクロスでシーちゃんの首を拭くつもりだろうか。

「すみません、暁さんは背骨に沿って拭いてもらえますか？」

「あ…はい…大変なら巨大化するぐらい大丈夫ですよ？でかい人外死ぬほど見てきましたし。」

「あ、そういえば暁さん大丈夫でしたね。じゃあそうさせてもらいます。」

鳴子は一度降りてから巨大化して拭き始めた。彼女も首の付け根から体を拭き始めた。近くで見ると結構光沢があつて綺麗な鱗だ。拭けば拭くほどその光沢は増していく。

「綺麗でしょ。シーちゃんの鱗。」

「はい。つなぎ目もきれいで色もとてもきれいです。」

「たぶんそこらに生え変わりで抜け落ちた鱗があるので持って行ってもいいですよ。生えているものほどではありませんけど抜け落ちた鱗でも十分綺麗ですよ。」

「じゃあ、後でもらいますね。」

始めはそんなに時間はかからないと思っていたが終わったころには日も暮れようとしていた。

「こんなもので大丈夫ですよ。」

「や、やっと終わった。」

「すみません、こんなに時間まで付き合わせてしまつて。」

「い、いえ、私もなんか無駄に時間撮らせちゃつてすみません。」

多分いつもはこんなに時間はかからないのだろうが彼女が少し手間取つてしまつたせいで時間がかかつてしまった。しかし、こんなに手間がかかることをシーちゃんは一人で自分たちがしたところ以上のところをやっているのだと思うとすごいなあと思う。

「はい、これをどうぞ。」

「これは？」

「いったじやないですか、シーちゃんの鱗をあげるつて。はい、今日のお礼です。」

「ありがとうございます。…5枚もですか？1枚で十分ですよ。」

「あの子達のお土産にでもしてやつてください。」

「あー、ありがとうございます…あれ、鳴子さんに話したことありましたっけ。」

「人数は教えてもらってないですわー、でもそれぐらいはわかりますよ。」

「はは、まあそうですね。そろそろ驚かなくなりました。」

「今日はもう遅いでしょうし、ここに泊まっていくといいですよ。」

「そんな、大丈夫ですよ。」

「いやー、でもここ結構危ないんですよ夜になると。暁さんなら大丈夫かもしれないけど……大事をとって、ね？」

「……鳴子さんがそう言うなら、まあ。」

「良かったあ。じゃあ、あそこの建物にどうぞ。」

「あれって、シーちゃんが作った建物にですか？」

「人間でも十分使えますよ。」

何故かあるドアをくぐると確かに部屋の広さも天井も人間用っぽい。石造りではあるがやけに落ち着く空間だ。

「暁さんはあそこの部屋をどうぞ。」

「あ、どうも。」

もうすっかり暗くなっている部屋に月光が差し込んでいます。月は満月であるのに星はそれに負けじとかがやいている。今まで見た星空の中でも一番きれいだろう。今頃ヤーナムはどうなっているだろうか、いつも通り獣がはびこっているのだろうか。そ

れともまた別の上位者が住み着いているだろうか。

「暁たちはどうしているだろう。遠征はどこまで進んだだろう。あの様子だと昔の遠征とはわけが違うのだろう。昔は遠征に行くのにも命がけだった。そもそも海に出ること自体自殺行為に等しかった。」

「数か月前のやつ言葉思い出す。すでに自分は過去の存在だ、本来ならあの場で終わっていたはずだった。どういうわけだか目覚めた先はヤナムであったが。最後の記憶、自分に近づいたのは恐らく狩人であったのだろう。なぜあの場に狩人がいたのか……まあ、どうでもいいか。今こうやって自分が存在しているのであれば。あ、帰ったら暁たちに契約書を書かせなければ。でも契約書ってどこでもらえるんだろうか。自分の時は変な爺さんに書かされたが……狩人さんが持つてるかもしれない。」

「どうしましたか、眠れませんか？」

「……え？」

「いえ、もう夜も更けてしまったのなかなか眠りにつきなさないのです。」

「え、いやだって、まだそんな……。」

「窓を見るとついさつきまで地平線近くにあった月は真上まで上がっていた。こんなに時間がたつまで自分は思考に浸っていたのか。いや、そんなはずはない、内容的にたかが数分程度だ。」

「それとも、知らないうちに時間が進んでいましたか？」

「つ、ま、まあそんなところですかね…。」

「ふふ。そんな何か鎌をかけたわけじゃないんですよ。この世界は限りなくあちらの世界に似ています。なので、住民や迷い込んだ人たちも難なく馴染むんですが…やはり、暁さんは少し違うみたいですね。」

「でもこんなことは初めてですよ。」

「きつとそれは私のように指摘する人がいなかったからです。あなたはずっとどこかこの世界に抵抗してたんですよ。自分はこの世界の住民ではないって。多分一人でいたらどんどん自分の知らないうちに時間進んでたと思いますよ。」

「そうですね…。私、抵抗してる気は全くないんですよけど。」

「私も暁さんみたいな人は初めてですけどね。世界に抵抗する人類なんて初めて見ました。」

「私はそんな気はないんですが…。それに私はもともと夜は寝ません。そういう存在なので。」

「無意識ですか。もつと珍しそうですね。そういうことなら私とおしゃべりしませんか？そこに椅子もありますし。」

「…これもシーちゃんが？」

「はい。器用でしょ？シーちゃんは私とよく一緒にいるので人間のことをよく知ってるんですよ。」

「はあ、でもまあ、なんて言うか…あの体躯でこのサイズ作れるんですかね。」

「さあ、私もシーちゃんが何か作っているところは見たことがないので、ただシーちゃんが作ったことは確実です。ここ、人間が来れるようなところではないので。」

シーちゃんが作ったという椅子はやはり石製だった。別にこの辺に木が全くないことはないが、石のほうが加工しやすいんだろう。

「…あら、朝ですね。」

「あ、本当ですね。では、私はそろそろ。」

「待つてください。もう、言ったじゃないですか、一人だと時間がどんどん進むって。私が入り口の近くまで送ります。暁さんはワープしても大丈夫ですよね。」

「大丈夫ですよ、似たようなことよくしてますし。あ、でも握りつぶす方法は痛いし発狂してしまうので勘弁ですけど。」

「じゃあ大丈夫ですね。握りつぶさないのので、ワープしたらすぐに扉に入ってくださいね。」

「分かりました。」

鳴子がつぶやくと次第に彼女の視界はゆがんでいった。再びはつきりした時は目の前にいつシカの扉があった。入ろうとしたときふと自分の影を二度見してみたが一回目と二回目では少しではあるが影の長さが変わっていた。それを見て彼女はささつと扉に入った。

何時しか見た真つ暗な階段。あの時はその階段を下って行つたが今度はひたすらに上がっていく。最初はごつごつとした岩場が見えていた壁もいつの間にか何も見えず、感触がただ感じられた。初めに見た門番は同じ場所を出迎え、また同じように見送ってくれた。また真つ暗な階段を上がっていく。そろそろ時間が分からなくなつたころ扉が見えてきた。その扉をくぐると彼女が出たのは廊下、ではなく自分の部屋。鳴子の部屋から入つたというのに自分の部屋に出るとはどういうことか。急いで振り返るが先ほどの不思議な空間はなく廊下が見えていた。何度もこういう不思議なことを体験したが未だになれない。不思議がつて少し進んだところで彼女に声がかかった。

「ヨアケさーん！」

「…あら暁。帰つてたの。」

「ええ、つい昨日帰つたわ。」

「昨日夜に帰つてからすぐにあなたの部屋に向かったが居なくてね。狩りに言つてた

のかい。」

「…ええまあそんなところね。」

「えーずるーい。私も早くしてみたいのに。」

「分かった分かった、ちよつと待つて思い出したことあったから。今からちよつと契約書がないか探してくるわ。」

「契約書ですか？」

「そんな難しいことじゃないわ。ただ自分の名前書くだけよ。ちよつとないか探してくるからそこで待つてくれるかしら？」

彼女は夢に戻つてすぐに狩人さんに訪ねた。幸いにも狩人さんには心当たりがあったようで引き出しから紙を一枚引つ張り出した。

「そうそう、それよ。それをあともう3枚くれないかしら。」

彼は一瞬躊躇するような素振りを見せた。

「ふふ、そりゃ驚くわよね。急に4人も狩人になりたいなんてね。安心してすぐに来させるわ。」

4人分の契約書を収めようとしたがどうも素直に収まつてくれない。何か引つかつてゐるなど思い確認するとそこにあつたのは薄紫色の物体。これはシーちゃんの鱗だ。暁たちに渡すように余分に貰つたやつだ。

「…あれ夢じゃなかったのね。…私が夢とかなんとか言うのも可笑しいわね。」

彼女は夢から戻り部屋に入った。暁たちはそれぞれ部屋を物色していたようだ。

「あら、いいものでも見つかったかしら。」

「いいえ、何も見つからなかったわ!」

「あら正直。はいこれ、それぞれ自分の名前書いてね。」

「……これでいいのですか?」

「で、これをどうするんだい?」

おっと、そういえばそんなことを考えていなかった。自分のときはあの爺さんが勝手に持っていたが。

「きやあ!? な、何よこれ!」

暁の足に何かしがついていて。なんだただの使者じゃないか。ああ、使者に契約書を渡せばいいのか。

「き、気持ち悪いー!」

「気持ち悪いとは何よ気持ち悪いとは、可愛いでしょ。書いた契約書はその使者に渡しなさい。多分それでオツケーよ。」

「分からないのかい?。」

「私がやったときとはちよつと違うのよ。さ、行くわよ。狩人様に挨拶しないと。」

彼女は4人を灯りがある部屋に入れた。4人ともこの灯りをしっかりと認識しているようだ。この灯りは狩人だけが使う特別なもの。狩人にしか認識できない。それがしっかりと認識できているようならあれで正解だったのだろう。

「いい？何も考えずにこの灯りに手をかざすの目も瞑ってね。」

「えっと、こうかしら？」

「うおつ、消えたぞ。」

「さすが私のコピー。すぐに慣れたわね。」

「コピー？」

「なのです？」

「…それは今は関係ないわ。さ、あなた達も。」

順々に夢へと移って行き最後に彼女が行った。夢に戻ると何故かあたふたした彼がいた。小屋には書きかけの『ようこそ』。彼の手には何やらいろんなものがあつた。

「えっと、あの人は？」

「あの人が狩人様よ。どうしたのそんなにあたふたして……え、歓迎会？大丈夫よ、そんなに大げさにしなくても。」

「え、さっきのでわかるの？」

「何か言ってたっけ。」

「いえ、何も言つてないのです。」

「狩人つて凄いわ!」

「多分関係ないと思うよ、それ。」

「皆様、はじめまして。私は人形、狩人様たちのお力添えをしております。」

「に、人形が喋つた…。」

「早く慣れなさい。いずれこの人形と使者だけが癒やしよ。狩人様、この娘たちが例の子よ。向こうから暁、響、雷、電よ。」

「……」

「そうよ、同姓同名。だからこの娘たちにはヨアケと名乗っているわ。」

「何で分かるのですか。」

「分からないわ!」

「堂々というものではないね。」

そしてなんやかんや始まった歓迎会。場所はいつもいる場所から離れた花園。普段全く用がないので立ち入らない場所なのだがとても広い。そこに大きな机と人数分の椅子が置かれた。机の上には紅茶と茶菓子。聞けばすべて人形の手作りだという。

「こんなことできたのね。」

「はい。以前から狩人様に入れることがございましたので。」

「ふーん。」

この花園。昔狩人様が原初の狩人とある上位者を狩った場所らしい。彼女はその話を全く聞いていない。今度詳しく聞いてみてもいいかもしれない。そう思いながら彼女は紅茶が入ったカップに口をつけた。

第17話

小さな歓迎会が終わった後、彼女は4人に狩人の道具を紹介していた。

「これが仕掛け武器。狩人はこいつを使って狩りをするの。仕掛けつて言ってもこいつはただ伸びるだけだけど。これなんかはちよつと面白いかもね。」

彼女は一本の杖を出した。彼女がその杖を一振りすると刃が伸びて杖にまとられた。

「ちよつとかっこいいのです。」

「見てくれはいいけどね、威力が弱いからあんまり使えないのよねこれ。見てくれはいいのに。」

彼女が杖で床を一突きする。すると刃は杖の中にしまわれていった。

「派手なのはないの!?!」

「派手? 派手つて言うなら、例えばこいつかしらね。これは私の昔のお気に入りよ。」
彼女が出したのは突起が付いた棒と刃が円盤状に一对並んだもの。その真ん中には穴がある。彼女はその穴に持っていた棒を挿した。ひどくこすれる音と火花を散らしながら刃が高速回転する。

「回転ノコギリつていうの。昔は重宝したわね。今は別のものつかつてるけど。とり

あえず、仕掛け武器って言うのはいろいろあるわ。とりあえずこの、ノコギリ鉋か、仕込み杖、獣狩りの斧をお勧めするわ。」

「えー、私さっきの回転ノコギリが欲しいわ。」

「無理よ、あれは最初から扱えるものじゃないのよ。いづれ使えるようになるから最初はその3つから選びなさい。」

「…じゃあ、私これにする!」

「い、電も雷ちやんと同じものにするのです!」

「ふむ…じゃあ私はこれにしようかな。」

「私はこれにするわ!」

選んだのは、雷と電が獣狩りの斧、響がノコギリ鉋、暁は仕込み杖だった。

「暁、本当にそれでいいの? 本当に弱いわよ、私も使ったときあつたけどすぐにやめたわ。」

「これが一番レディっぱいわ!」

「…そう。あー、あと銃も使うわ。こっちは違いは単純よ。射程を取るか当たる面積を取るか。ぶつちやけて言えば距離を取ることがそれほどないから最初は散弾銃で十分だと思うわ。」

「じゃあ、そうするわ。」

「そうだね。」

「私もそうするわ！」

「み、皆と同じにするのです…。」

「じゃあ、最後に狩り装束だけ…これはあそこの使者と相談してきなさい。費用は私が持つから。」

「お金かかるの？」

「似たようなものがかかるの。今は気にしなくていいわ。」

彼女が指したのは水盆の上にいる使者たち。それぞれが何かを持っている。4人がそこへ向かうと彼女は彼に4枚の紙を差し出した。契約書だ。

「はいこれ。狩人様に渡せばいいかしら？」

彼は彼女の頭を撫でながらその紙を受け取った。

「うふふ。後は頼んだわ。」

彼女は慰霊碑の前にいた。向こうへと行くための彼女の名が彫つてある慰霊碑。何の前触れもなくこの花畑に現れた。彼ですら心当たりがなかった。そもそもここに書かれていることは彼女にしか読めなかつたし、その内容も彼女の名と没した年月が書かれているだけだ。しかし、その大きさは彼をも超える。金息の森にあった謎の石碑のよ

うだ。

「ヨアケさーん！着てきたわよー！」

「ん、どう、気に入ったのはあった？」

雷電姉妹はヤハグル一式を選んだようだ。この二人はいつも同じものを選ぶな。響は灰装備か、で、暁は…

「…何それ。」

「ふふん。優美でしょ？」

「……。」

「すまない、暁がこれがいいと聞かなくて。」

「…いや、まあ、これは私も少し申し訳ないというか…どうせ後で思い知るだろうからいいわ。じゃあ、今から武器の使い方教えるから。」

ヤーナム。獣の病がはびこるこの町は血の医療が盛んだったが皮肉にも崩壊の原因にもなった。そのある建物の上。

「うわ、おどろおどろしいわね。」

「あれ、ここ開かないわ？」

「そこは逆側しか開かないわ。こつちよ。」

4人は彼女の背を追う。彼女は少し行っただころで止まった。

「この先から獣は始めるわ。基本的に私は後ろにいるから。死んでも大丈夫よ、さっきの場所から出てくるから。」

「え、今とんでもないことを聞いたような…」

「それぐらいの覚悟はしてもらわないと。安心しなさい、最初は誰でも死にまくるものよ。」

「そうと決まったら出発よ！」

「ちよ、ちよつと暁落ち着いて。危ないから。」

暁は建物の屋上を走る。木箱が積まれているのを見て壊そうとしたがそれよりも早く獣が券を振り回しながら現れた。暁は突然のことに動けなかった。ドレスは言わずとも戦闘に向いたものじゃない。刃先はドレスをやすやすと破りその下の肉を切り裂いた。暁は呻き、倒れた。おびえた顔をして浅く呼吸をしている。赤いドレスはさらに赤黒く染め上がっていた。

「あ、あ？い、痛い…痛い…。」

あの獣はもとは人間だ。自分たちで獣狩りをしようとして逆に獣になってしまった。獣になってしまった彼らはもはや人間と獣を区別できない、むしろ自分たちと同じ獣を人間だと思っている。獣を狩るという意志だけが残っている彼らは獣を殺すまでその

武器をふるう。

獣は虫の息になっている暁に容赦なく剣を突き立てる。目の前の獣が死ぬまで何度も、何度も、何度も何度も。暁は刺されるたびにほんの少し体が浮き上がった。止めに頭に突き刺され、やっと獣は動きを止めた。ただの死体になった暁はだんだんとその形を崩し入り上になって消えた。獣は目の前の者が消えるとゆったりと元居た場所に戻っていた。

「…ああいう風になるから気を付けるのよ。」

「あ、暁…」

「そう心配しなさんなすぐ戻るから、ほら。」

後ろの明かりから霧が現れ徐々に形を成す。最終的にそれは暁に変わった。暁は戻ってすぐに吐いた。さつき歓迎会で飲み食いしたものをすべてその場にぶちまけた。彼女は暁のそばにより背中を撫でた。

「すぐに突っ走るからよ。次からは気をつけなさい。」

「う…おえ…」

「あ、暁…？だ、大丈夫？」

「あーあー、ほらほら、全部吐いちゃいなさい。」

数分後、呼吸は荒いが暁は落ち着いてきた。吐くことはなかったが、今度は涙が止

まっていなかった。

「うえ…ひつく、ひつく…。」

「さて、どうしたものかしらね…とりあえず行きましようか。あなた達は先行つてなさい。気を付けるのよ。あと自分が進んだ道を覚えておくように、死んだらまたここに戻ってくるんだから。」

「う、うん。」

「暁ちゃん…？」

「私がついておくから、落ち着いたら私たちもいくわ。」

「…分かった。」

3人は響を先頭にして先へ進んでいった。ほどなくして声が聞こえてきてやがてしなくなつた。ここには誰も来なかつたから先に進んだのだろう。

「はいはい、大丈夫、大丈夫よ。」

暁は依然泣きじやくっている。自分が思うのもなんだが、こんなに泣き虫な性格していただろうか。いくら待つても泣き止まないのでもいいそのこと担いでいこうかと思つたところで灯りから誰か出てきた。3人だつた。

「…あらあら。」

3人は気づくと暁と同じように吐き出した。が、吐くだけ吐くと落ち着いたようだつ

た。

「早かったわね。」

「う、そりやあんなに大群が居たら対応しきれないだろう。」

「まだ痛い気がするわ……」

「胸に穴が開いている気がするのです。」

電はそういつて胸のあたりをさすつていた。と、暁が自分の体をまさぐりだした。

「あ？ちよ、ちよつと何やつてるの。」

暁は手早くそれを取り出し出した。上位者の知恵。暁はそれを割った。すると暁はすぐに落ち着きを取り戻し立ち上がった。

「……大丈夫？」

「うん。大丈夫。」

はて、不可解な、と思つたが落ち着きを取り戻したのでまあいいか。暁はすたすた歩きだして何事もなかったかのようだ。3人もほどなくして立ち上がった。

暁の様子がいかりおかし。技量は素人だ。ドレスなんぞでまともな防具になるわけもない。ただ、2回目以降は死に対してなんの恐怖もないように見える。何か取りつかれたかな。彼女もさすがに何回は死に対する恐怖はあつた。最初に上位者の知恵を授けたのがいけなかつたかな？……恐れないつていうならそれでいいか。確実に響たち

よりかは早く人の道を離れるだろうが、そもそも自分はとつくに人の道を離れているわけ。

何回も死にはしたが、大橋の前まで来た。4人も素人から毛が生えた程度だがまあ、大丈夫だろう。なんならこれからもっと死んでもらって経験を積んだほうがいい。

「この先に、大きな獣が現れるわ。とても強いだろうけど4人いるなら大丈夫よ。じゃあ、後は好きに回りなさい。」

「え、一緒にいないの？」

「基本的なこと教えたからもういいでしょ？あとは好きにヤーナムでも回りなさい。もしヤーナムに飽きたらほかの場所もあるから。狩人は気ままに獣を狩るのよ。もうここに夜明けは来ないわ。」

彼女は4人に何も言わず道を引き返した。しばらくたつて甲高い鳴き声が聞こえてきた。聖職者の獣、聖職者はより大きな恐ろしい獣になるそうだ。そうなのだろう、狩人も吞まれれば獣となる。血に酔った狩人ほどより恐ろしくなる。今もし彼女が獣になればどれほど恐ろしい獣になるだろうか。きつとどの獣よりも恐ろしい獣になるだろう。

夢に戻った。彼はどこか散歩しているらしい。人形も寝ていた。本当はもつと付き合う予定だったが飽きた。先回りしてビルゲンワースで待ってしよう。前に読んだ本

で少しメンシス学派に興味がわいた。それはもちろんこの集団が上位者に執着していたから。

ビルゲンワースは静かなところだ、何かの実験体らしきものが彷徨ってはいるが。このビルゲンワースで見つかったメンシス学派の誰かの手記。さつき見つけた。前には見つからなかったものだ。中にはなにかの実験の経過か何かか語られている。：上位者を：作つたらしい。これはヤハグルで出会つたものではないみたいだ。上位者を隠し守るために上位者を作つたと：メルゴアの乳母と名付けたようだ。乳母：乳母：：そういえば悪夢の中にそれっぽい奴がいたかな。：隠し守る。何から隠すっていうんだい。上位者のために上位者を作り上げる、じゃあ上位者相手か？でもあの場にその上位者はいたが守っているっていうその上位者はいなかったが：赤ん坊の泣き声は聞こえたが、あれが上位者か？にわかには信じられないが、乳母という名前を付ける限りではやはりあの鳴き声の正体は上位者か。

「……」

思案につかれた彼女はふと湖を見る。この下今はもういない：いやいるのか。ここにいた爺さんには退いてもらつた。今頃は中にいた学徒と何かしているだろう。彼が狩人として勤めを果たしきらない限りこの夜は明けない。彼女は狩りを全うしない限り夜は何度も繰り返す。この世界の秘密は暴かれて、また隠される。こここの蜘蛛を狩つ

た時、遠くに女性が見えた。赤ん坊の泣き声と押しつぶされそうな巨大な赤い月。月ねえ。まさかとは思うが…

ここにはメンシス学派のほかには医療協会の本もある。本当に何でもあるなここは。きつと大学的な立場だったんだろう。中にプラスチックとか落ちていたし。中身を読んでみたが、いわゆる学術書のようなものだ。訳も分からない専門用語が連なっている。分かる単語は上位者と瞳という言葉くらいか。医療協会も上位者に興味があつたらしい。だが専門用語やらがつつらつらと書かれているだけでまったく内容が分からなかつたので早々に投げ出した。そして取り出した小説を椅子を揺らしながら読み始めた。

主人公は一般人。今までの人生も一般的で友人もどこにでもいるような奴だった。彼に普通じゃないようなことはただ一つ。彼はデジャブを感じるが多々あつた。学校での先生の話の持つて生き方。車がやってくる順番。テレビで見る大きなニュース。小さなことから大きなことまでよく感じていた。最初は周りによくそのことを話していたが、そのうち聞かされる友人がうんざりした様子を見せだしたので話すのはやめてしまった。だが、デジャブは収まらない。むしろ前よりも増えている気がする。彼は就職した。彼の仕事柄危ないことはよくあつた。建築関係で働く彼はよく高所にいる。作業しているときによくデジャブを感じる。昔のものよりも確固たるものを感じるせいでたびたび手が止まり一緒に働いている友人から心配されていた。ある日のこ

とだった。彼はいつも通り高所で作業をしていた。そこでの作業が終わり移動していた途中、角を曲がった瞬間死角にあったバケツを踏んでしまった。そのせいでバランスを崩した彼は足場から落ちてしまった。ビルの何十回からも落ちる彼は、自分は死ぬんだと感じた。なぜかこの瞬間でさえをデジャブを感じた。視界いっぱい地面が広がった瞬間「次は…次こそは…」という声が聞こえ目を覚ます。

なにか悪い夢を見ていたようだった彼はその夢が何なのか分からず、悶々としたまま高校に行く準備を始めた。

この小説は『タイムトラベラー』という題名だそうだ。タイムトラベル、今いる時間から過去に戻ったり未来に進んだりする。この世界も離れてしばらくすると時間が巻き戻って夜が始まる。これはタイムトラベルだろうか。自分はタイムトラベラーなのだろうか。

第18話

「来ないわね。」

結構待った気がする。が、まだ来ない。どこでそんなに時間を喰ってるんだか。月はまだ白い。ああそうだ、鎮守府に行こうか。提督の様子がおかしいとか言っていたし、何よりほったらかしにされたのが気に入らない。だが、様子がおかしいとは聞いたがどうおかしいとは聞かなかつたな。せいぜい付き合いが悪くなつたぐらいか。

彼女は本を閉じ腰を上げた。

しばらくぶりに戻った鎮守府は前にしていた工事も終わったようで建物も増えていようだし、人も増えている。その分、ずいぶん騒がしくなっていた。人がいるとそこそ調べるわけにもいかないので取り合えば夜まで待つ。結局夜まで待ったが誰一人として訪ねることはなかった。夜になれば昼とは打って変わってシンと静まり返っていた。彼女は早速行動を開始する。提督を調べるのだからまずは提督がどこにいるのか探す。まず正面から普通に入ろうと思ったのだが、相も変わらず奴がそこにいるのはいいとして、前とは違って誰かが入り口の前に立っている。多分艦娘だ。見張りを付

けたのか、何故、人が増えたからか？あつたことない奴だ。別の場所から行こう。

確かドッグのほうに牢に入る入り口があつたはずだ。あそこなら誰か立つてゐることはないだろう。

やはりドッグには誰もいなかった。明かりだけが静かにあつた。確か扉がこの辺りに：あつた。中に入ると雰囲気が一気に不気味なものになる。その程度で彼女にはななてこともないので、ずんずん進む。牢には誰もいなかった。入り口に聞き耳を立てて誰もいないのを確認すると、音をたてないようにゆっくり開けた。やはり誰もいない。右側はすぐに壁だ。牢つてこともあるのでここは建物の端っこなんだろう。

足音を立てないよう静かに歩く。このフロアは一切人の気配がしない。扉は等間隔にあるが、その全てが倉庫か空き室か。脳内で地図を広げた感じ、ここの辺は建物内の右端っこだ。前は案内されて最短距離で行つたからそこまで大きくはないように感じたが、今こうやって自分で歩いてみるとこの建物は意外に大きい。廊下の突き当りを右に曲がる。さつきよりも長い直線が見える。歩いてみてもずっと人の気配がしない。なぜ人の気配がしないのにこれだけ部屋があるのか：そういえば人は増えていたな。寮を別に建てたからか。

廊下の真ん中に立つたところでここがロビーだと知つた。左側に玄関が見える。あ？なんか不自然だ……直立不動だ。まるで人形だな。顔も動かさずか？後ろ姿しか見え

ないが、ま、動かないでいてくれるならそのままでもいい。

「ここからなら提督室までの道は覚えてる。提督がまだそこにいるのかはわからないがとりあえず行ってみよう。彼がどう怪しいのかなぜ怪しいのかはわからないが行ってみよう。果たしてそこに理由があるか分からないけど行ってみよう。

階段を上る、登り切った先の真ん中が目的地だ。

「……だ……こ……いの作戦はそこまで大掛かりにはなさそうだね。」

「そうね。」

「今回の作戦が終わったら休暇を取ろうと思います。加賀さんも一緒にどうですか？」

「そうですね。たまには一緒に過ごしましょう。」

「……通り過ぎたか。階段を下りる音がした。隠れた部屋から出て目的地の目の前に立つ。きつとこの先に彼がいる。彼はまだここにいる。じゃあ、だめじゃないか。この部屋を探るのは彼がいなくなつてからじゃないと、それまで隠れて居よう。」

彼女は隣の部屋に入り待つ。じつとして、息を殺して、どんな音も聞き逃さないように。やがて扉があく、鍵をかける音、足音が小さくなつた。外に出て部屋のノブを回す。しかし開かない。ああ、鍵をかけられたんだっけ。どうしよう。これでは入れない。困った。

「困ったわ。本当に困った…まあいいかしら」

あまり騒ぎになるようなことはしたくないが仕方がない。ノブの部分を破壊して無理やり入る。中は前からあまり変わっていない。怪しいと言えるようなところは見当たらない。ゲームなんかでは引き出しなんか手に手記やらパソコンに謎の文章があったりするが実際にはそんなことはしない。ここにはなにか怪しいものがあることはなかった。となれば彼を尾行するのが正解か。

残念ながら彼が出ていってから時間が経ってしまったので今から彼を探すこととはできないだろう。諦めて今夜は帰る。廊下に出ると電気が切れていた。玄関まで降りてくるとあの二人の艦娘はいなかった。というか扉もしまっている。仕方がなく来たときと同じように牢に向かい、そこからドッグを経由して出る。

残念ながらドッグを出たところで提督の後ろ姿が、なんてことはなかった。

誰とも合わず安全に夢まで戻ってくると、四人がいた。暁の服装が変わっている。

「あら、服変えたの？」

「あ、ヨアケさん。」

「そうなのよ、やっと変えてくれたのよ？ 暁したら何回死んでもあの服装がいいって、レディだからって。」

「最近ついに心が折れたのです。」

「弱いー、って半泣きになりながら杖を振り回してたもんね。」

「も、もう！そんなこと言わないでよ！で、でも私が最初に死に慣れたわ！」

「あれだけ死んでたらそりやそうなのですよ。」

「：最近ちよつと電が毒氣ついた気がしてるんだけど気のせいかしら。」

「どう、狩りは順調？」

「ええ！なんか広い場所まで行つたわ！」

広い場所？・ヤーナムは広い場所だからよくわからない。でも順調そうならいい。

「ヨアケさんは何してたの？」

「私？私はあなた達の提督を嗅ぎ回ってるわ。」

「怪しいって言ったから？」

「そう。私を放置した仕返しにね。まあ、あなた達が怪しいって言ったただだから本当にやましいことがあるのかはわからないけど。今日は何も成果は無かつたわ。あなた達他になにか知らないの？」

「うーん、怪しいつたって最近無視されることが多かつたつてぐらいだし：」

「でも今まで司令官さんが無視することはなかつたのでやっぱり変なのです。」

「誰か付けたこととかないの？」

「さあ、私はつけたことはないな。」

「私もないわ。」

「そう。じゃあ、地道に探すしかないわね。私はまたしばらくあつちにいることにするわ。あなたたちも頑張りなさい。」

「はい！」

戻って来たところでまだ深夜だ。調査するにはもう遅い。また明日の夜を待つしかない。

彼の部屋を覗いた限りではおかしいところは見受けられなかったが、やはり数ヶ月放置させるのはおかしい。今度はつけて行ってみよう。

その日の朝は騒がしかった。放送で招集命令が下ったやいなや寮という寮から艦むすが一つの建物に走っていった。

昨日彼女が提督室の部屋のドアを破壊したのでそのことだろう。

「……」

彼女は部屋を出た。すると丁度部屋を出る鳴子と鉢合わせた。

「あ、おはよう御座います。」

「おはよう御座います。」

「どうしましたかこんな朝早くに。」

「いえね、なにか面白そうなお話があるので。」

「…ああ、さっきの。」

「はい。では、少し急ぎますので。」

建物を出る。艦娘達が向かったのは庁舎の中だ。入り口には誰もいなかった。しかし、あれだけの大人数が入っていった割には静かだ。講堂かなにかあるはずだ。右には何も無かったので左側だ。階段のそばを通り過ぎると、角を曲がった先に扉がある。くぐった先は外廊下だった。そしてその行き着く先はまるで体育館のような大きな建物。おそらくあそこが講堂だろう。入り口には誰もいない。静かに近づき扉に聞き耳を立てる。…何も聞こえない。

「みんな集まったか。」

長門の声だ。よく通る。が、その声に反応する様子は全くない。

「今回集まってもらったのはほかでもない。提督室のドアが何者かによって破壊されていた。」

どよめきはない。本当にこの中に入ったのか？あそこに窓があるから覗いてみよう。…いる。かなりの大人数がこの講堂の中で所狭しと並んで立っている。自分が思うのもなんだが少し気味が悪い。まるで生きているようには見えない。人形みたいだ。

対照的に壇上で話をしている長門たちには変わった様子はない。淡々と人形たちに話しかけている。おや、提督がいらないようだ。こういう時は提督も一緒にいるもんだと思っただが、別の場所にいるのか？

結局話しても今後警備をより強化するという月並みな対策をするだけに終わった。これならさっさと提督のほうに行っていればよかったかもしれない。昼は大きく動くことができない、かといつて夜になるまで隠れて待つのも暇だ。というわけで昼もこそこそと探検してみよう。

例のごとくドツグから牢を経て庁舎に侵入する。経路があまり人目につかないところにあるのでここまでは楽。だが、問題はここからでばつと思いつくような場所は何もなかったのどこを探るか決まっていけない。何か謎の地下空間とかあれば面白いが、そんなところがあるようには思えない。ひとまず牢にこもってどこを探検するか考えよう。

脳内マップを開く。講堂を見たときにその周辺に空き地が広がっていた。それもまあまあ広がった。だが、ああいうところに地下空間かなにか隠し通路の入り口があるのは少し考えづらい。あの下に空間が広がっているのはあるかもしれないが：どつちみち提督をつける必要がありそうだ。

今の時点では提督に怪しいところはなさそうだが、あの艦娘の様子は明らかにおかし

い。ちよつと前は生き生きしていたし、何かあるのはあるはずだ。

出ようと立ったとき小さな鉄格子の窓から入った光が何かを照らした。

「…本棚？」

なぜか本棚がある。中にはそこそこ本が、どれも題名がついていない。昨日は夜に忍び込んだので気づかなかつた。そもそも前はこんなものなかつた。一冊手に取り松明を灯りに中を読んでみる。

「へー…これは、これは…」

中には簡潔に言つて上位者の作り方が書かれていた。まさかの文字に一瞬理解できなかつた。ということはまさかメンシス学派のやつが居るのか？…いや待て、いくら何でもぶつ飛びすぎてるだろう。なんでこの世界にメンシス学派がいるんだ。あーでも、アメンドーズがいたということはそういうことか？メンシス学派はアメンドーズに隠させていたらしいし…。

本の内容に戻ろう。ここに書かれている方法では上位者の材料に人間を使っている。ということはあの艦娘たちは上位者の材料なのか。確かにあれだけの量居れば上位者を作るのに十分だ。となればもしかして秘密の空間への入り口もまさかここに…？

「あ、あつた。」

あった。牢の一番端つこに穴が開いている。中は真つ暗で全く分らないが地下へ梯子が伸びている。今行つてもいいがひとまず、戦利品として本を何冊か持つていこう。

夢にあの4人はいなかった。彼に尋ねるとついさつきまた出かけて行つたそう。仕方がないので彼と一緒にまとう。彼はいつも夢の中を散歩したり、時には自分でお茶を入れたりする。今回も彼に付き合つて花園で2人でお茶を飲んでのんびりと待つていた。

お茶を飲み終わり小説を読んでいると、聞きなれた声が向こうから聞こえてきた。4人は少し疲れている様子だった。それに装備もそれぞれ変えていた。

「あ、ヨアケさん。」

「順調かしら？」

「それがね、あの3人がなかなか倒せないの。」

「何回やつても死んでしまうのです…」

「3人？ ああ、ビルゲンワースの前の、でも4人で行けば楽じゃないの？」

「4人でいるときは楽なんだけど一人でもやられるとね。」

「…じゃあ、一人一人が強くなるしかないわね、後はそこにある障害物も利用しなさい」

い。あ、そうだ。今日は面白いもの見つけてきたのよ。」

「どんなの?」

「ほらこれ。庁舎の中から見つけてきたわ。」

「何これ?」

「読んでみて。」

「上位者…材料に人間!」

「え、何それ不気味—!」

「上位者って誰なのですか?」

「さあ?」

「え、上位者知らない?」

「じょういしやつていう人に会ったことはないわ。」

「…ほら、あれよ。庁舎にしがみついていた奴がいたでしょう。あれ上位者よ。アメ

ンドーズって言うの。」

「ああ、あれ上位者なの? え、じゃああれって人間からできてるの…?」

「いや、あれは違うわ。あれは外から来たのよ……ってこの本から書いてた。」

「それも鎮守府から見つけたやつかい?」

「いや、これはビルゲンワースで見つけた物よ。」

「ビルゲンワース？」

「それは今はいいわ。これで鎮守府内にこっちの世界の人が紛れ込んでいる可能性が出たわ。面白いことになりそうよ。私はもう少し探ってみるからあなた達も頑張りなさい。最後はあなた達も呼ぶから。」

「はーい！」

第19話

彼女は考えていた。牢で見つけたメンシス学派の本もそうだが、艦娘たちの様子が見らなにかにおかしい。先日まであの4人と一緒に過ごしていたはずだ。それに前日の昼間も人形っぽさはまるでなかった。訓練されているというならそれでしまいだ、となれば昨晚のあの見張りが不自然だ。あの4人の様子を見れば少人数のグループであれば私語があるはずだがあの二人にはそれがなかった。しかし考えたところで行きつく先はただ不自然だということ。大体、結論を出す目的がなかった。

持ってきた数冊の本はどれも上位者の作り方について書かれていて、うち一冊は手記であったが中身が英語だったのであつちで書かれたものではない。中身も特筆するよいうなことではなかった。この本の中身で何か進展したことはなかった。むしろ「あつた」ということが進展だ。

暁を見て久々に思い出したレディというものを意識しながら彼女は紅茶を一口飲む。彼が本を欲してきたので一冊渡した。が、数ページめくるとすぐに返してしまった。彼は聡明ではあるがこうした考え事は得意ではない。上位者なんてのはただ狩る対象でしかないのだ。彼女も小説は好きであるがレシピを見たって何の面白みもない。それ

でも嫌も押し込んで読んでみたがそうやって読んだものが頭に入るはずがない。というか内容は前に読んだものと一緒だ。彼女はペツ、と本を机の上に投げ出した。ぐぐつ、と背を伸ばして右を向いた。花園を囲う柵その先。霧ががった下界から天に向かつて幾本も突き出す黒い柱。一度もあれを気にしたことはないがいざ意識して思うとアレは何だろうと思う。しかしアレは何か、と彼に問うても首を横に振るだけ。周りには知らないことばかりだ。

百聞は一見に如かずという言葉がある。簡単に言つて見たほうが早いという意、こうやって分かりもしないレシピやどこぞの誰が書いたか知らない日記を読んであれこれ考えるよりあの梯子の下を見るほうが早いだろう。思い立ったが吉日、さつそく例の場所に向かう。

相変わらず陰気な場所だ。牢だからそれは当たり前だが、そういえば牢を庁舎内にそれも地上階に作るというのは珍しいと思う。普通は別に建てるか、庁舎内でも地下に作るもんだと思うが、それもこの梯子を隠すためだったりするだろうか。しかしまあ、初めてここに来たときはこの梯子に気づかなかつたんだが…。

この梯子の下から何かを感じることはない。何かいるなら何かしらの気配を感じるはずだが、とりあえず降りてみる。下は相当深いようで真っ暗だし、降りるまでかなりかかりそうだ。最初は少し警戒しながらゆっくり降りて行ったがだんだん面倒になつ

てきたのですー、と滑り降りていく。滑り降りたとき足元でカツン、となった。松明で足元を照らすとどうやらコンクリートらしい。勝手にヤーナム基準で水浸しのよくわからぬ石材とか思っていたがこういうところはさすが現代といったところか。近くの壁を照らしていくと、壁もコンクリートのようだ。そのまま松明の持つ手を滑らしここならあるはずのものを探す。

「……あつた。」

スイツチ、恐らく照明。そのスイツチを上にあげると少しのラグとともに一斉に照明がつく。思ったよりもずっと広い。庁舎が丸々入るんじゃないかと思うほどだ。こんなにも広いせいだ、彼女が歩きたびカツン、カツンと大げさに反響する。やがては時まで歩いたとき、そこには大きめのプールがあつた。学校よりも大きめ、競技で使うようなプールが四角形のこのスペースから突き出すように作られている。と、彼女は跪いてそのプールの水を舐めた。しょっぱい、ということはコレは海水でこのプールは海とつながっているのか。

こんなものか、何か怪しいものがあるわけでもない。この空間自体怪しいがそれ以外には何も無い。入り口が梯子で、牢にあるということだけが違和感だが、少し拍子抜けした気分で戻る。ドッグに戻ろうとしたときかすかすが声が聞こえてきた。

「道具はちゃんと持ったか？」

「はい。忘れ物はありません。」

「よしじゃあ行くぞ。」

エンジン音も聞こえてきた。ゆつくりと扉を引いて隙間から覗く。ボートに何人か人影が見える。あれは夕張と提督だ。あとは数人艦娘が乗っている。外はもう夜のようだがこんな時間に提督まで同伴でどこに行くつもりか。ついていきたいところだがさすがに潜り込むのは難しそうだし、追い付くこともできない。何か持っているだろうかと思つたが何も持っていない。道具、というのはずでに積み込まれたのか。今回はおとなしく帰ろう。

夢に戻つた彼女はその場で空を仰いだ。

「何もなかったなあ……」

今のところ詰み状態だ。これがゲームなら攻略サイトの一つでも開きたいところが生憎これはゲームじゃない。うんうんと悩んでも何も出てこない。すると、彼女がそこらまであるいてきて頭を撫でた。

「…そうねこのまま考えてたつて何も無いんだつたらしようがないわよね。ありがとう狩人様、少し気分転換に行つてくるわ。」

大聖堂によく似た、しかしどこか違う場所。右側の扉の先はこんな道だっただろうが、左側には扉があつたはずでは。真ん中の扉は空いている。その先の風景は知つていたものと少し違う。聖堂街全体に植物の根が全体に絡みついたような風景。ここは狩人の悪夢、曰く血に酔つた狩人の行き付く先だとか。彼女にはちようどいい場所だ。ここには獣のほか血に酔つた狩人どもが目映るすべてを狩りつくす。コツコツと一人階段を上る先に一人に狩人が佇む。彼女を視認すると持つている獣肉断ちを担ぎ彼女を迎え撃つ。

奴は鉈状だつたそれを鞭のように伸ばしてきた。彼女は下をかいぐつて回避して後ろにつく。鉈を振りかざすが奴は振り返りながら獣肉断ちで彼女を断ち切らんとする。すでに鉈を振っていた彼女は今から回避することができずとつさに鉈と銃で受ける。固くしなつた獣肉断ちを受けた彼女は吹き飛び壁に打ち付けられる。すかさず奴がまた襲い掛かる。さつきと同じ大振りしやがんでも単純に飛んでも当たりそうなの攻撃に、彼女は鉈の振り上げてはじき返す。獣肉断ちは上へ跳ね上がりノコギリ鉈は左下に打ち付けられる。その合間に互いが銃を撃つ。一発ずつもらつた。

大きな得物が打ちあがつた奴と小さめの得物が地面に打ち付けられた彼女なら、彼女のほうが動けるのは早い。奴が動けないうちに距離を縮める。しかし奴も腐つても狩人、人間とは思えないほどの筋力で振り下ろす。だが、彼女もまるで人間ではないのだ

から行動早い。さっきまでノコギリ鉋が握られていた右手には今なにもない。彼女の右手が奴の腹に深々突き刺さる。手に触ったものすべてを絡めつかみ引きずり出した。内臓とともに大量の血が彼女にかかる。

奴は腕を上げたまま固まっていた。彼女が体を蹴ったことで背中から倒れる。ふう、と息を一つ吐いて空を仰ぐ。空は明るい、悪夢と言うには少し明るすぎる気がする。

「……どこ、どこ何処よ……？」

「あそこっばいよね。」

「でもこれ何なのです？」

「木の根っこじゃない？」

何か聞き覚えのある声がある。おどろいて横を向くと残念ながら根っこのようなものが邪魔をして見えない。汐々階段を降りていくと、だんだん姿が見えてきた。あの4人じゃないか。どうしてここにいるんだ。

「あ、ヨアケさん！」

「……なんでここにいるのよ。」

「暁が急に空中に浮いたかと思ったら消えちゃったんだ。」

「だから私達も急いであとを追ったのよ。」

「急に走り出したかと思ったら空中に浮かれたのでびっくりしたのです……。」

なるほど、理由はわかった。さては服に釣られたな。

「…釣られたのね。」

「つ、釣られてないわよ！」

「そういう事にしてあげるわ。」

「あのお、ここはどこなのですか？」

「ん、ここは狩人の悪夢よ。あんまりここに来るべきではないわね。」

「え、何か呪われるとか？」

「敵がとても強いから。油断すると私でも余裕で死ぬわ。」

「そつち…？」

「でもヨアケさんがそう言うなら相当だね。」

「そうよ、別にここで狩りをしてもいいけど死ぬばかりじゃ意味ないから戻りましょうねえ。」

彼女は半分追い返すように4人の背中を押しして帰る。

「そういうやどうして聖堂街にいたの？森の方にいたはずでしょ。」

「えつと、あの3人を倒して、なんかでつかい芋虫も倒したわ！」

「…上位者を倒したのね。」

「そしたらなんか月が赤くなつてね、なんか変な雰囲気だったから助けた人大丈夫か

なって、だから聖堂街まで戻ったの。」

「なるほどね。」

「ヨアケさんはどうしてここに？」

「行き詰っちゃってね。牢に地下に入る梯子があったから降りてみたんだけど特に何もなくて。」

「……あ、私たちそろそろ戻らないといけないんじゃない？」

「え、あれから何日経った？」

「待ってね……あー、2日か3日ぐらい？」

「もらった非番が終わってしまうのです！」

「やばい、戻らなきゃ!？」

4人はばたばたと走り去っていく。彼女もなんとなくついていった。そういえば4人はあの艦娘たちとは全然違うな。なんでだろう。4人がこつちに来た時に一気に変わったのか、いやでもそんな一気に変わるのか。そもそも何をしたらあんなに機械みたことになるんだ。

部屋に入った時外は夜だった。廊下に出て外を見るとそそくさと走っていく4人が見えた。

「なーんなのかしらねえ。」

「何がですか？」

…鳴子か。もう流石に慣れた。

「…いや、あの4人は違うなあ、と。」

「それはどういう？」

「先日に入りましたんですけどほとんどどの艦娘がなんか様子がおかしかったんですね。なんというか人形っぽいというか…。」

「…ずっとそうでしたよ？」

「え？」

「一部の艦娘を除いてずっと、外から来た娘も次の日にはもうあんな感じですよ。」

「…なんで気づかなかったんだろう。」

「意識障害みたいな何かでもかけられてたんじゃないですか。」

「まさかそんなものが…：もしかして…いややっぱりそんなことないかしら？」

「心当たりが？」

「まあ、私にまでかかるほどなので逆にすぐに分かりましたけど、ちよつと現実的ではないですよね。」

「そうですか。暁さんはそうであることを願っていますか？」

「…そうですね。そうであれば対応は楽ですから。」

「じゃあ私は暁さんの思い通りになることを願っています。」

気配が消えた。振り返るともう誰もいなかった。まるで最初からいなかったように、彼女が最初から虚空と話していたかのように。

翌朝だった。どう動こうかと考えていると、ノックもなしに誰か入ってきた。その前から大声で彼女の名前を呼びながら上がってきたので誰かは分かるが。

「ヨアケさん！」

「…なあに？」

「みんなの様子がおかしいのです！」

「おや、どうやらこの4人も違和感を覚えたらしい。」

「なに、まるで人形みたいって？」

「そう！みんな人形みたいに…って、あれ？」

「知ってたの？」

「知ってたわよ…ずっと前から。」

「すごい！さすがヨアケさん！」

なんだろう、この気持ちは。遠い昔に捨てた罪悪感と似ている気がするが、これはきつと気のせいだろう。

「でもどうしてなんだろう？」

「ヤーナムに行く前はみんな普通だったのです。」

「多分、それはあなた達が狩人になったからよ。何らかの意識障害が狩人になったことで解かれたの。」

「何らかのつて？」

「恐らくは…：ビルゲンワースの湖にいた芋虫は覚えてるかしら？」

「うん。」

「あれはロマという蜘蛛の上位者よ。」

「え、あれ蜘蛛だったの…？」

「そういや足がたくさんあったね。」

「頭しか印象に残ってないわ。」

「…でね、ヤーナムではロマがいろいろなものを隠していたの。例えばそう…あの赤い月とかね。」

「じゃあもしかしてそのロマっていう上位者がここにも居るのですか？」

「それは分からない。私は異変には気づいたけどロマがいる痕跡は見つけてないわ。でもアメンドーズがいるならもしかしたら…」

「つまり、ロマを倒したらみんな戻るのね！」

「いや、違うと思うよ。」

「ともかく、私たちはロマを探せばいいのね。」

「いるとは断言できないわよ。」

「でもいるかもしれないんでしょう？ いなかったらまた考えればいいのよ！」

「…じゃあ、お願いできるかしら。」

「はい！」

4人がまたばたばたと去っていく。あの娘たちも数日の間ですっかり狩人だ。普通の短時間で上位者を探し出そうなんて結論は出せない。もしかしたら自分よりも才能があるかもしれない。暁には少しひいきでちよつとした英才教育もしているからそれもあるかもしれない。そうだ今度また上位者の知恵を櫃あげよう。

それにしても、そうか、ロマか…ここまでくると怪しいのは奴しかいないな…やつぱりつける必要があるな。

第20話

現在夜の約10時、彼女は庁舎の茂みに潜んでいた。視界から玄関が見える。先程残業まみれだったらしい提督が玄関を左から右へ横切るのをみた。取り出したのは青い秘薬。これで玄関を通る。例のごとお人形さんな艦娘が見張っているが、わざわざ置いてあるぐらいだ、正面から来たものには反応できるのだろう。秘薬を飲んだ状態では単純な動きしかできないから、とりあえず玄関を過ぎるところまで……

意識が戻ったとき丁度角を曲がる奴が見えた。足音を立てないように歩いて壁にく。予想だと、奴はあの部屋に入るはずだが……入った。跡をつけて例の部屋の前まで来る。念の為聞き耳をしたが、扉の前に誰かが立っているなんてことはない。

入ると、そこには誰もいなかった。だからあのはしごの下を覗いた。明かりだ、明かりがついている。降りたか、しかし不用意に自分も降りると面倒になりそうだ。

本来、彼女の目的は満足すること。故に今やっている事は全て彼女の興味から来ているものだ。その興味とは、即ち上位者。大体、この鎮守府はおかしい。なぜアメンドーズがいる。この世界はヤーンムや血の医療とは全くの無関係だ。しかし、実際にここにいる、ずっといる。さらに彼女すら気づけなかった異変。狩人が気づけない、それ即ち

上位者の仕業だろう。果たしてそれがア Mendooz によるものか、ロマ……もしくはまた別の上位者か。どっちも上位者は狩る。あとあの提督は怪しい。現にこうやって梯子の下にいるわけだし、メンシス学派の本だっただけだ。まさかとは思うがあの男、メンシス学派か？

「……アあ……」

「……？」

何か聞こえた。

「ああアアああ」

うめき声、どこかで聞いたことがある。聞き取ろうと思えば思うほどその声はどんどん不明瞭になっていく。……ああ、思い出した。あれはいつしか彼女の戦力テストに使った……

「……は？」

思わず声が出てしまった。今下で使われているのはいつしか試験的に使用した深海棲艦をおびき寄せる装置だ。なぜ鎮守府の地下でそれを使っているんだ。一体なんの目的で。

鎮守府に深海棲艦が押し寄せるかと思っただがそれから少し経ってもそんな気配は全くしない。こうして待つている間も声はずっと聞こえてきている。だがあれはもはや

声とは言い難く、音といったほうがまだあつてゐるだろう。何かの音、しかしそれを説明するのに適切なものが浮かばない。深海棲艦というのはどうも理解しがたい。ああやってわけもわからず奇声を発するものもいれば、たどたどしいが言語を発する者もいる。そういうやつはイ級やロ級が出している声を理解しているのだろうか。もしかしたら人間が動物を使役するのと同じ感じなのかもしれない。

…また余計に色々考えてしまった。最近癪づいてゐる。要はあの男があ装置を使つてこの下で何かをしている、それだけだ。問題はその何かなのだが。

不気味な声をひたすらに聞いていたがだんだん、小さくなつていく。久々の変化に感覚を研ぎ澄ませるが聞こえてきたのははしごを登る音、しまった。奴が戻ってくる。

彼女はドツグへ向かう扉の向こうに隠れた。登りきる音、ドアを開ける音がする。しかし開けたのは彼女が居るほうではない、庁舎へ戻るドア。少しだけ開けて誰もいないことを確認すると梯子に手をかけて降りていく。

降りてから前回と同じように電気をつける。と、底には予想外の光景があつた。何も無い、前に彼女がこの場にやつてきたのと同じように何も無い空間が広がっている。少なくとも奴が上ってくる少し前まで確実に深海棲艦の声がしていた。あの短時間で何の痕跡も残さずに上ってくるのは不可能だと思うが…まさかあの装置を起動しただけで何もしていないなんてことはない。そっちのほうの意味不明だ。じゃあ結局奴がこ

こで何をしていたのかということだが、上位者が隠してゐる……という考えは一度捨てよう。そう考えると何でもかんでも上位者のせいにして何も解決しなさそうだ。しかし、こうも何もないのではどうにもできない。せいぜいあの男が何かしら関与しているということが分かつたぐらい……帰るか。

どこか無駄な時間を過ごした気がする今宵。これ以上自分で何か見つけることは無理かもしれない。あの4人から何か報告があるまではまたここでおとなしくしているよ。うか。飽きたと思つていたここの風景もしばらくぶりに戻ると少し新鮮味を感じる。冷蔵庫にはあのとときもらつた蜂蜜酒がまだ結構残つている。せっかくなので蓋代わりのグラスで一杯。ああ、酒を飲み物として飲んだのはこれが最初だったが酒に魅了されたことがあるようだ。今ならヤーナムの酒も行ける気がする。今まで投げつける以外にすることがなかつたが、そうだ、自分は狩人だ。血によつた狩人。ならばこの酒だつて行けるはずだ。そう思つて勢いに任せて一杯。

「……ああ。」

こりやあいい。なんとつて香りがいいんだ。濃厚なほどに、少し下品とも言えるほどの濃厚さ。狩りをするのには向いてないがこれは酔うのに丁度いい。蜂蜜酒は美味いが、この一本しかない。ヤーナムの酒で十分なら今夜はこの移ろいゆく月を見ながら過ごそうじゃないか。

さてきて、そろそろ月も水平線近くなってきた頃。瓶をおおって飲むのもそれはそれでいいが、やはり彼女の的にはグラスで飲むのが好みなようで……いや、そんなことはどうでもいい、重要なことじゃない。月を眺めているとけたたましい喇叭が鳴り響く。時計を見ると確かに起床時間っぽい。月はまだ空の上、なるほどそういう季節か。それはそうとヤードのどこに行けばグラスが置いてあるだろうかと考えているとノックもなしに入ってくる誰か。振り返ると暁たちがそこにいた。

「あら、はやいわね。起床時間さつきでしよ?」

「何言ってるの? 起床時間は1時間前よ?」

「あら?」

確かに1時間すぎている……グラスのことを考えていただけで1時間経ってしまった。いたらしい。はてさて、酔いというのは時間の感覚を曖昧にさせてしまう。

「……あー、で? どうしたの?」

「あ、あのね! 上位者っぽいもの見つけたの!」

「本当?」

「本当よ、本当!」

予想外の言葉に響く方を見るが響も頷いているので、暁の妄言ではないらしい。

「どいどい？」

「この反対側よ。講堂からもっと向こう。旧ドッグの中にそれっぽいのがあったの。」

反対側か。彼女はずつとこつち側しか探索していなかったものでそりやあ見つからないわけだ。そうか、そういえばこの鎮守府は孤島だったか。

「なるほど。そういえば旧ドッグなんてあったのね。」

「元々ここは飛び地で挟撃をするために無理やり作られたところなの。」

「今はもう前線が違うから使ってないわ。一度に2隻までしか出撃できないし。」

「ふーん、じゃあちよつと私も様子見に行くわ。」

4人に案内されてその、旧ドッグまで行った。少し大きめの建物、その中に入ると確かに海面がビルゲンワースの湖みたいに白く光っている。

「確かにいそうね。じゃあ行こうかしら。」

「え、もう?」

「何もなかったから、もう上位者ぐらいしか疑う要因ないの。大体私そんな考えるの好きじゃないし、これでどうにかなるならそれがいいわ。」

飛び込むと海水に濡れることなく新たな湖が広がっていた。そしてあの蜘蛛も。

「…一緒ね。」

4人も彼女の後すぐに落ちてきた。

「一緒だね。」

「そうね、さあ、さっさとやりましょう。取り巻きはお願いするわ。」

ロマは一人だと苦勞するが複数人だと全く苦勞はしない。厄介なのは取り巻きの蜘蛛でそれさえいなければ全く強くない。雷を纏わせてずっと殴ってればなんとかなる。

「はい、おしまい。」

ロマが消滅し間もなく子蜘蛛も消えた。すると何か聞こえ始めた。それはだんだんと大きくなり聞こえる全てがその何か、うめき声に変わっていく。瞬きをすると光景が一変し、旧ドツグに戻ってきた。

「あれ、戻ってきた？」

「う、まだあの声が残ってる…」

彼女は4人をおいて空の様子を見に行った。やはり月が赤い。何か、変わったらしい。そして、あのうめき声、深海棲艦だ。

「わあ、月が赤い！」

暁がたつたつたと走ってやってきた。その後ろから響が雷と電に支えられながら近づいてきた。雷電コンビは顔色も大丈夫そうだが、響の顔がまだグロッキーだ。暁は

満面の笑顔だが。

「行ってみましようか。何か変わっているかも。」

目指すのはあの地下空間。ロマが何か隠していたというなら、今ならそこに何かがあるだろう。月が赤く変わったせいかわりの雰囲気の不気味に感じる。

「どこに行くの?」

「地下。」

「地下ならあつちだけど?」

暁が指すのは彼女が目指す方向とは明後日の方向だ。しかも、あの地下空間は彼女が覚えている限り梯子以外の出入り口はなかったはずだ。

「あつち?」

「うん。地下でしょ?」

なんだか情報の齟齬がありそうだがとりあえずついていってみる。

そこにあるのは狭そうな平小屋。中は下に続く階段があるだけで、そこを降りていくと真つ暗な空間が広がっていた。暁が電気をつけてくれると、いくつかの牢屋があった。

「……(ハハ)は?」

「牢だけど?」

「違反者が入るやつ？」

「そう…だけど？」

「庁舎のじゃなくて？」

「え？あそこにはないけど？」

「右奥のやつよ…しらないの？」

「あそこはいつつも鍵が閉まつてるから…。」

「…なるほど。分かった、行きましょう。」

「もういいの？」

「ええ。」

階段を上ると、響が壁にもたれて座っていた。

「大丈夫？」

「まだ吐き気がするよ…みんなはよく平気だね。」

「まあ、すぐに聞こえなくなっただし。」

「聞こえなくなったら平気なのです。」

響が復活できるまで待つておこうと思つていると、遠くから誰か近づいてくる。多分こんな夜中に何をしているのか聞かれるんだろう。どう言い訳をしたものかと思つたが、何やらやけに遅い。それに歩き方もおかしい。

「……」

「どうかしたの？」

「いや、あつちから誰か来てるんだけどなんかおかしいなって。」

「あれはたぶん川内さ……ん？」

暁が言うにはあれは川内らしいが：いやあれは絶対違うぞ。服こそ確かにそうだがそこから見える本来人の形をしているものが違う。その顔は川内の顔どころがもはや人間の顔すらしていない。腐りかけていている。

「……あれが隠されていたものかしらね。」

「え、あ、あれどうするの？」

「もちろん狩る。」

相手はゆっくりゆっくり近づいてくる。こちらも武器を手にして待ち構える。相手は何も持っていないように両手を前にかざしている。どういう攻撃をしてくるかと思つたが一定距離になると飛びついてきた。回避は簡単だし、顔同様手足まで腐りかけているのか起き上がるのにも苦勞しているようだ。

「……ねえ、これ頼んでもいい？わたしは、あそこ行きたいから。」

「え、あ、うん。」

「もし追いつくんなら、庁舎の玄関から一番右奥の中にある梯子の下にいるから。」

「わ、分かった…。」

彼女は4人を置いて一人庁舎に入る。電気は付きっぱなしだが誰一人いないそのま
ま例の部屋を指すと廊下の真ん中に誰かいる。

「あ…。」

「……吹雪。」

「久しぶりだね。」

「どうしたのこんなところで。」

「それはこつちも一緒だよ。」

「それもそうね。じゃあ悪いんだけどそこを通してもらえない？」

「……ごめんね、それはできないの。提督に言われてるから。だから帰ってくれないか
な？」

「嫌だつて言ったら？」

吹雪は艀装を付けたまま立っていた。そして手に持っていた連装砲を彼女に向けた。

「ごめんね。本当にごめんね。なんでかは分からないけど提督に言われたから…。」

「心配しなくていいわ。無理にでも通るから。」

仕方がない、とつぶやきながら一步踏み出そうとしたその時、あろうことか吹雪は屋
内で撃った。威嚇のつもりだったか彼女自身ではなく足元に撃った。それでも大きな

爆発は一発で建物を無残にし、壁や天井が崩れ二階まで見えた。

「…本気みたいね。」

「私だつて本当はこんなことしたくないの。でも提督からの命令だから…」

さっきの川内もどきは恐らくロマが居なくなつたから本当の姿が云々のせいだと思うが、吹雪は違うのか。

「いいえ。気にしなくてもいいわ。やることは変わらないもの。」

さつきと同じように一歩踏み出す。当然吹雪もまた撃つてくる。次はあててくるかと思つたが砲口からまた威嚇だと判断した。横にずれて砲撃で崩れた部屋に逃げる。艦砲は強力だが、そのせいで煙がひどい。そのすきに距離を縮める。煙を抜けたところでも吹雪の目の前になつた。吹雪はぎよつとしたがそれでも彼女に砲口を向けだ。これは逆に彼女をぎよつとさせたが体をひねり射線上からずれる。瞬間彼女の体をかすめ部屋がまた爆発した。そしてその爆発と吹雪の首が跳ねたのはほぼ同時だつた。首の切り口から血がどぼどぼ流れ出る。部屋の隅に転がった吹雪の首には彼女と最後に目が合つた時の驚きの顔があつたままだった。

彼女は転がった吹雪の首を一瞥に歩いて例の部屋へ向かう。やはりカギがかかつてるか。鍵など持っているはずがないので鍵の横とドアノブの横を撃ち抜きドアをけり開ける。そのまま梯子を下りていく。部屋に入った時から急に聞こえてきたうめき

声は、降りるたびにさらに大きくなっていく。降りた先はすでに電気がついていて、とんでもないほどの気配があった。降り切つて振り返るとそこにはあの男とその後ろになんとも形容しがたい真つ黒な異形がいた。

第21話

「やあ…待ってたよ。」

「あらそう。」

「なんだ、そっけないね。」

「予想はできたわ。にしても趣味悪いわね、その服。」

「趣味が悪いとは何だい、正装だよ。それを言うなら、僕はそっちのほうが趣味が悪いと言えるね。」

「物は言いようね…：ああ、なんか見覚えがあると思ったけどあなたドリームランドにいたでしょう。」

「ドリームランド？」

「あなた一回ぐらい変な森にいたことはない？そこで獣まで呼び出しやがって。」

「…ああ、一度夢に見たね。好きに行動できたから夢だとは気づかなかったけど後々気づいたよ。」

「あなたね、むやみやたらに獣の病をふりまかないでくれる。」

「なんだい、あそこは実在していたのか？それならもう一度行きたいね。あそこなら

研究がはかどりそうだ。それに君だつて狩りができるんなら本望だろう?」

「…はあ。で、その後ろのは何。」

「ははは!よくぞ聞いてくれたね。これこそ僕が作成した上位者さ!…:君たち狩人は獣じゃ飽き足らずあるうことか上位者まで狩り始めた。いったいどれだけの上位者が犠牲になつたと思う。なんとかミコラーシユ様は悪夢を作り出し、そこで研究を進めることができた。僕もこの世界で独自に研究をすすめ、やつと作ることができた。まあね、だから君がやつてきたときは正直驚いたさ。赤城から送られてきた写真でピンときたさ。君が狩人だつてね。僕は慌てて準備したさ。アメンドーズやロマに隠してもらつた。だが、アメンドーズに関しては逆に君に感づかせてしまったかもね。しかしまあ…あれだね。ロマまで…きつとあの副産物たちにも気づいただろう。あれも一緒に送るつもりだ。ああ、ミコラーシユ様…待っていてください!…」

「…長い自分語りお疲れ様。いくつか言っておくわね。上位者狩りをしてるのは…まあ成り行きよ。でもまあ最近は楽しんでたわね。だから今までやってきた探偵ごっこもこれのため。楽しかったわ。でも責められるのは困るわ。そんなこと言つたらあなた達だつて上位者を作るために市民を材料にしたじやない。まあもとはと言えばビルゲンワースの連中のせいだけだね。あ、あとミコラーシユなら私が殺したわよ。」

「は…?き、君はいま、なんといつた?」

「だから、ミコラーシユなら私が前に殺したし、上にいた上位者だつて狩ったわ。」
まあ、一度夢に戻ればなぜか復活するのだが。だからいまヤーナムに戻ればまたいるだろう。

「…き、君はなんてことをしてくれたんだ…そ、そんなミコラーシユ様…そ、そうだ、僕、僕だけでも…そうだ、そうだよ。なんてすばらしいことなんだ…自分で作った上位者でミコラーシユ様の願いが叶うかもしれないんだ。」

「ま、というわけでそいつ狩るからつてなにしているの？」

「やるぞ…僕はやるぞ！僕だけでもやるんだ！僕だけでも瞳を見出して見せる！さあ、深海の深淵よ僕に瞳を分け与えたまえ！」

奴は後ろの異形に呼びかけ手を広げた。異形は奴の言葉に反応したのかもどもぞと動き始める。ところどころ深海棲艦の一部が見えるので、あれは深海棲艦を材料に作られたのだろう。その中ではつきりと頭を残している部分の口が開き中から人間の上半身のような骨格が出てきた。それは奴の頭をつかみにらみ合う。やがて奴は耳から血を流し始めたかと思うと頭がはじけ飛んだ。頭を失った奴は糸が切れた操り人形のように崩れ落ちた。彼女はその様子をずっと黙って見ていた。

ああ、汝、汝よ。なんと醜い姿だろうか。そのような姿では何もできない。死すら与えられないのだろうか？死は解放であるか？否、死とは次へ進むための段階に過ぎない。だが、それはとても重要なことなのだ。多くの存在は死を乗り越えることができないのだから。上位者になりたければまずは死を乗り越えよ。

「…深海の深淵ねえ。微妙な名前ね。さて、深海の深淵とやら。私はあなたを狩るわ。」

『そなたが狩人であるか。』

「あらそうよ。話が分かるのね。」

『我は知っておる。我は上位者という存在である。たとえ低俗なものに生み出されようともそやつに好きにされることは許されぬ。そなたはその低俗とは違うな。だが我らに届くこともない。』

「…ええ、そうね。でも私はあなたたち上位者を狩る、上位者狩りの狩人よ………汝、死に興味はないかな？」

『死とな。そなた我らに死を与えられると思っっているのか？』

「狩人とはそういう存在である。もはや狩るものは獣だけではない。青ざめた血を求

めよ。狩りを全うするために。求めよ、求めよ、青ざめた血を、上位者の血を。そのためならば獣狩りも上位者狩りも、狩人狩りも行うのだ。」

『そなた、本当に我らに死を与えられるとでも?』

「試してみるか?」

『いいだろう。我らはそなたをとことん利用したい。人が人ならざる者に変化した存在、とくと興味がある。』

「狩人は狩るだけ。ただ狩るだけ。狩るためならば上位者の知恵すらむさぼりつくす。」

深海棲艦の残骸がつながってできた触腕が上から降りかかってくる。彼女は避けが先ほど頭がはじけ飛んだ奴の残骸は押しつぶされた。どかさされた地面には無残に押しつぶされたはずの残骸はなく、その触腕に引っ付いて触腕ごと内部に収められた。

『ああ、こいつには脳がなくなってしまったな。取り込んでも意味がない。そなたの脳を見てみたい。』

「私は汝の素材が欲しい。汝からはどんな聖杯ができるかとても気になる。」

『そなたは今でも墓荒らしをするのか?』

「墓荒らしとは人聞きの悪い。探索と言ってくれたまえ。」

団子上の異形の端からにゅつと何か伸びてきた。深海棲艦によく見る歯のついた大

きな艷装、つまりは砲。彼女が見たことない形をしている。確実に撃ってくる、それはわかるが口径が分からないのでどれほどの範囲があるのかわからない。大体こういう時は近づけばいい。狩りの基本だ。

撃った。コンクリートの地面は無残に砕け散っている。多分重巡かそれに近いぐらいの砲だ。爆風は当然届きはしない。だが、回避のために異形に近づくと、異形は体からいくつもさつきと同じものを生やした。それはあつという間に彼女を囲うように広がった。躲せない、そう悟った瞬間、目の前に閃光が走った。

「…軽率だったわね。」

つい癖で相手に近づいて回避しようとしてしまった。まさか全体から生えるとは思わなかった。久々に死んだ。あの部屋に戻ってきたらしい。

「あーあ、かっこつけるもんじゃないわ。」

ドアを開けると廊下を赤い光がほんのり照らしている。鳴子も真つ赤な月を眺めていた。

「あ、どうも。」

「あ、曉さん。見てくださいよ。珍しいですね、この世界でもあんなに真つ赤になるとなんてあるんですね。」

「あ、まあ、そうですね。すみません急いでるんで。」

「そうですね。じゃあまたあとで……おもしろいなあ人間って、あんなのつくつちやうんだねえ。」

外に出るとそこらにあの人間もどきが歩き回っている。

「そういえばあんな奴いたわ。面倒ね、突っ切ろうかしら。」

突っ切ろうと走り出すと遠くから爆発音が聞こえた。その音に人間もどきは反応する様子はない。彼女もそれに付き合おうとは思っていない。

戻ってきた。異形はまだそこにいる。

『戻ってきたのか。殺したはずだが、消えてしまったから不思議に思ったが……』

「狩人だから。さ、続きよ。」

ノコギリ鉋片手に突っ込む。生えた砲塔からの砲撃を避けて切りかける。刃は簡単に入り振りぬくと体の一部が飛び散っていく。青い体液も飛び散りそこから重油の匂いが漂っていく。まだ全然届いてない。異形の体はそのすべての面が正面ですべての面から砲塔が触手のように伸び、ショットガンのように生え撃ってくる。彼女はすべての面をよけ斬り、斬り、斬り、斬る。そしてスカッた。異形は彼女の視界から消え、そして彼女は死んだ。

「飛んだ。飛ぶのね、あの巨体で。」

廊下はまだ赤く光っていた。鳴子はまだ空を見ていた。

「あれ、いつの間に戻っていたんですか？」

「あ、いや、死んだだけです。」

「あーなるほど。よくわかりませんが、応援します。」

「ありがとうございます。」

外にはまだ人間もどきが歩いていて、爆発音も聞こえていた。彼女は気にも留めず走って戻っていった。

『まだ挑むか、狩人。そう何度も死んでは心が持たないぞ？』

「上位者に心配されるなんて光栄なことね。心配しないで。続きよ。」

同じように突っ込む。斬りつける。視界から消えた。上を見るとやはりあの異形が上にいる。バックステップで下がると彼女にいた場所に異形が落ちてきて、派手にコンクリートの破片が飛び散った。また斬って、避けて、避けて、斬って、斬って、囲まれて、死んだ。

廊下は赤く光っていた。鳴子は空を見ていた。人間もどきは歩いていった。彼女は走った。

狂気って何だろう。狂う。狂うって言うのはずっと笑っているって言うこと？笑うしかないって言うじゃない。でも私は笑うしかないことなんてなかったわ。あの時だつて死ぬんだつてしか思わなかったわ。響のおなかには穴が開いちやつて、私が声をかけても何も言つてくれなくて、血がいつぱい出て、痛そうで、かわいそうだった。響が死んじゃつたからとても寂しかった。寂しいのに痛くて響を見ることが出来なくて悲しかった。もつと響の顔を見ていたかつた。でも気持ち悪くて、血を吐いて、起き上がれなくて、もう響の顔を見れなくなつてとても悲しかったの。

狂気って言うのは分からないわ。

狩人は楽しいわ。最初は怖かつたけど慣れたらそうでもなかつたわ。最近のコピーも狩人になってくれたから退屈することもなさそうなの。ヤーナムはいい場所よ。あそこの人や狩人様にとつては日常かもしれないけど私にとつては観光地なの。あ、でも狩人様はヤーナム出身じゃないの。どこかは聞けなかつたけど今度聞いてみたいわ。

上位者って何なのかしら。よくわからないわ。気持ち悪い見た目して、ロマなんて蜘蛛？芋虫？だし。でも月の魔人は上位者っぽいかも。あれつて宇宙人なんだっけ？何か本で見たわ。でもメンシス学派は自分たちで上位者を作り出したのよね。あれつてメンシス学派がおかしいのかしら、それとも上位者って実はそうでもないのかしら？悪

夢の中に監禁されてたしやっぱりそうでもないのかもしれないわ。じゃあなんで私はあんな団子に苦戦しているのかしら。それは私があいつを見るのが初めてだからよ。それにあの団子は深海棲艦の集合体だもの。砲撃はどの上位者の攻撃よりも早いもの。それにあいつの砲塔はどこまでも伸びるわ。瞬間火力にリーチまであつたら苦戦するわ。でも私は挑み続けるの。狩人だから。たとえ死んでも挑み続けるわ。狩人になつてしまった私にはそれしかないの。上位者になり切れなかった私には。人間を捨てきれなかった私には。

『そなた、よく飽きもせずに来るな。もう何度死んだ。いい加減知つただろう。所詮そなたは我には勝てん。』

「
『…もう終わつてるなそなたは。まるで生気が感じられん。我が言うのもなんだが生物とは思えんな。我の一部にしてやろう。そこまでさせるそなたの脳と瞳に興味がある。』

「
触手が伸びてきた。先についている口は開かれておりその中に砲塔はない。彼女を捕まえるつもりだ。彼女はそれを切り捨てた…いや、これは罠だ。右側から伸びてきた

触手に反応した瞬間左から数本間隔をあけて伸びてきた。右手では間に合わない。持ってきた大砲で何とかする。昔のタイプの大砲だから破壊までできないだろうが軌道をそらすことはできる。一本目は彼女に追いつく直前でそれた。そのすぐ後ろからも数本襲ってくるが対応できるまでの時間は十分稼いだ。一本はよけ残りを切り捨てる。後ろから襲ってきた2本を切り捨てた。間髪入れず突撃する。ノコギリ鉋で斬るのはそのでかい図体、ではなく上半身の骨格。異形は

この骨格が目のような役割を果たしているらしい。今まで何度かこの部分をかばうような動作をしていたがやっぱりだ。ここを攻撃すると異形全体がのたうち回り骨格が内部に引き戻されダウンした。

ここ最近美しい狩りというのを意識してきた。狂気ながらもスタイリッシュに…なんてのはいいわけか。正直に言うとな彼女は彼にあこがれてノコギリ鉋を使っていた。彼はノコギリ鉋で狩りをしていたといっていたから彼女もそれを真似したのだ。だが今回はそんな余裕はない。彼女はノコギリ鉋をしまい、もともと使っていた回転ノコギリを取り出した。先につけたノコギリは火花を出しながら回っている。彼女は構えて限界までノコギリを回して勢いよく振り下ろした。回転するノコギリに異形の体は無残に引きちぎられていく。何度か振りかざしては振り下ろし、振りかざしては振り下ろし、異形の青い体液がどれだけかかろうともその手をやめない。やがて体が異形で見え

なくなってしまうんじゃないかといいるところで突然異形がはねた。彼女は飛びのき、異形が落ちてくる。今までに何度も異形がはねたせいですでにコンクリートの床はボロボロになっており小さく小さくなくなった破片が飛び散る。

上半身の骨格が再び生えそのポーズは彼女を指さすようだった。

『貴様、貴様よくも我を焦らせてくれたな。生まれてまだ日は浅いがよもや我のような存在が貴様如きにこんな感情を抱かさせられるとは到底思わなかったぞ。腹立たしいが感謝しよう。我にこのような感情を教えてくれたことを。腹立たしい、ああ腹立たしい。礼だ、後悔させてくれよう。』

異形が骨格を収めて間もなくうごめきだした。そして黒い塊をいくつか飛ばしてきた。べちゃつと落ちてきた塊はもそもそとうごめくとだんだんその形は深海棲艦へと変わっていった。黒い塊は深海棲艦に代わるとすぐに彼女に向けて砲撃を開始した。それと同時に異形も攻撃を再開した。さつきと攻撃は変わらないが深海棲艦の砲撃が加わるだけでも十分脅威だ。せいぜい駆逐艦程度なのが幸いだ。それでも艦砲は脅威でしかない。ごり押しするわけにはいかないのです。まずは深海棲艦の掃討を行う。もはや深海棲艦など彼女にとっては雑魚以下である。彼女は手際よく掃討していく。しかし、そのほとんどを倒したところで再び異形がうごめきだして黒い塊を飛ばしてくる。面倒なことをしてくれる。深海棲艦を飛ばし続けられるとジリ貧だ。黒い塊は異

形から飛ばし続けられているのでこのまま塊を飛ばさせ続けなければいずれ消えてなくなるかもしれないが大きき的に現実的ではない。

……しかし、そうだな。観察してみるとたいしたことないな。骨格を収めてから塊を飛ばすまでの数秒間、異形はうごめく以外に何もできない。他の上位者や何なら獣よりも隙が大きい。所詮は、その下賤な存在に作られた偽りの上位者だからか。彼女はこれを好機とみて行動に移した。まずは同じように深海棲艦を殲滅してく。そして異形がまたうごめきだした。その瞬間彼女は動く。異形に向かい走り出し、異形にぶつかろうかと、そこまで近づいた瞬間勢いよく回転ノコギリを振り上げた。その瞬間何か体を引きちぎった感触とは違ったものを感じた。何か硬いものを砕いたような、そう思ったのもつかの間異形が震えだした。そして叫んだ。彼女は目の前に散らばったもので察した。小さな何かのかげらそして所々形が残った白い骨格。どうやらあの上半身を砕いてしまったらしい。きつと単純に攻撃した時よりもダウンが長いだろう。なにせ根元から砕いたようだからだ。回ったのこぎりは易々と異形の体を引きちぎっていく。深海棲艦にしては柔らかかすぎる体を引きちぎっていくと、やがて彼女はその手を止めた。彼女の目の前には一つの箱が埋まっていた。両手で抱える程度の大きさの箱は金属質で中からうめき声が聞こえてくる。どこかで聞いた声、そう何時しかの試作兵器が発する、深海棲艦を引き付けるとかいう趣味の悪い兵器の発する声。

この事実に気づいたとたん彼女は瞬時にかつ単純な事柄に結び付けた。この箱が異形の核である、これを壊せば異形は死ぬ。彼女は躊躇なく回転ノコギリを振り下げた。ただでさえ火花を散らしているノコギリは箱に触れたとたんすさまじいほどの火花を散らす。しかし、その刃はなかなか進まない。5秒ほど押し付けたところで彼女はノコギリを上げた。箱には少し切れ目が入っているがこれではいつまた異形の骨格が復活するかわからない。と、彼女は回転ノコギリを収めあるものを取り出した。12cm連装砲と61cm三連装酸素魚雷、駆逐艦暁の艦装。もし使えるなら、と思い何周回かめに拝借したもののだが、これならこの箱を破壊するには十分だろう。いそいそと艦装を取り付け箱い構える。箱に向かつて一発、轟音と爆風とともに箱には大きな穴が開いた。そこまで厚くないかと思っていたが実際には相当な厚みがあったようだ。撃つたことと同時に周りの体も飛び散ったのだが彼女が見たのは箱の吐出した部分だったらしい。しまった、入っていた砲弾はさつき入っていた2発だけだったらしい。空いた穴を見ると中であの装置が浮いているのが見える。幸いにもまだ武器はある。この魚雷だ。砲弾よりもよっぽど威力が高い。だが魚雷を発射管から飛ばしてもあそこまでは届かない。届かないなら飛ばす。魚雷を投げて飛ばすだが、魚雷は重い。砲弾みたいに火薬だけが詰まっているわけではない。ならば力を借りるしかない。ゴースの寄生虫、これなら魚雷をもって飛ばすことぐらいできるだろう。

寄生虫のせいでもうろうとする意識の中魚雷を発射し、地面につく前につかむ……お、重い。これでもまだ重いか。だが投げることはできそうだ。最大限の力をもって魚雷を穴に投げ入れる。魚雷は見事穴に吸い込まれていき、その刹那爆発した。爆風が穴からこぼれだし彼女を吹き飛ばす。投げ出された彼女はまともな受け身をとることなく床を転がっていく。

寄生虫をはがした彼女は立ち上がり異形のほうを見た。しかし、そこには異形と呼べるものなどなく、黒い大きな水たまりの中に深海棲艦の破片が浮いているだけだった。

「……悲鳴も何にもないのね、狩りがいないわ。」

なんとというか、あっさり終わってしまった。何か派手に消えるわけでもなく狩った後に何かが変わるわけでもなく、核を失った異形は意識を失い、その体を保つことができなくなつて材料に戻った。それだけだ。久々の静寂もつかの間、もはや用などない空間を彼女は静かに去っていく。

第22話

梯子を上りきるとまた何かの音が聞こえてきた。砲撃音、どうやらだれか戦っているらしい。その音をたどって発生源まで行くとそこには複数の人影がいた。あの4人が見える。4人が戦っているのは、あれは長門だ。長門がああ4人に主砲を撃っているらしい。それに対し4人は避けてばかりのようだ。彼女は一番近かった響に声をかけた。

「ねえ、どういう状況？」

「あ、ヨアケさん。助けてくれ、急に長門さんが襲ってきたんだ。声をかけても聞いてくれなくて。」

「くそっ！すばしっこいな。やはり副砲で攻撃したほうがいいか。」

どうやら響の言うとおりらしい。吹雪と似たような状況だ。しかし、自分を攻撃するならまだしも4人を攻撃する理輔はよくわからない。しいて言うなら狩人だからだろうか。暁たちが攻撃される理由はそれしか思いつかない。

「ヨアケさん！」

「暁、大変そうね。」

「ど、どうしたらいいのかしら。長門さんが……」

「響から聞いたわ。狩りなさい。」

「え、か、狩るって長門さんを？」

「そうよ。きつともう長門はあなた達を敵としか見てないわ。」

「そ、そんな。きつとなにか……正気を失っているんだわ！ほ、ほら赤い月のせい……」
「それはないわ。吹雪も同じだったから。私を敵とみなして攻撃してきたわ。吹雪はちやんと理由があつて攻撃してきたわ。『あなたは敵だから、提督にそう言われたから』つて。だから私は吹雪を狩った……はあ、殺したわ」

「そ、そんな。吹雪さんが……で、でも長門さんは」

「違うって言いたいの？いいえ、同じよ。奴は……この提督はメンシス学派の人間だった。あいつは私たち狩人に敵意をむき出しにしていたわ。だから吹雪をわたしにけしかけたの。あなた達も狩人である以上、長門も提督に命令されて狩人であるあなた達を攻撃しているの。」

「そ、それは本当なの？」

「おや、いつの間にかほかの3人も集まってきたらしい。」

「ええ、本当。私はこの手で敵である吹雪を殺したわ。長門の意志は決して変わらな
い。あなた達艦娘は提督の命令には絶対逆らえないわ。あなた達は狩人になったから
支配されることはないけどね。だから殺しなさい。もうここには敵しかいないの。だ

からやりなさい。」

「…わかった。やるわ。」

「暁!？」

「しようがないでしょ。やらなければ私たちがやられるんだから。」

「……私もやるわ。」

「電も決めたのです。」

「2人まで……!」

「響、あなたも覚悟を決めなさい。3人はもう決めたのよ。」

「………うう。」

やがて響も無言で振り返り長門と対峙する。

「はい、よくできました。親切に待ってくれた長門さんに感謝しないとね。それじゃ

私は邪魔しないように離れるわ。終わったら私のいた部屋まで来てね。」

彼女はそこから離れると再び様々な音が流れ始めた。彼女はそれを無視して戻る。

そこにはまだ鳴子が立っていた。顔は赤い月の光で照らされていて鳴子もその月を見つめていた。

「ここは面白い場所でしたね。離れるのが惜しいです。」

「ええ、私もそう思います。想像よりも退屈な場所でしたが昔を思い出せました。」

「次はどこに行こうか、まだ決まっていますか？ 暁さんは？」

「私はこのあと戻ろうと思っています。あの4人がいますから。」

「ああ、いいですね。仲間がいるのは退屈に最も効果的な存在です。」

「ええ、まったく。」

「あの赤い月は美しいですね。」

「…私は、あまりそうは思えません。」

「そうですか？」

「あれは、まだこの場に上位者がいるという証。私は獣狩りで上位者狩りの狩人ですから。狩人は狩りを全うするのが使命です。」

「でも地下の存在は狩ったんじゃないあ？」

「いえ、まだ一ついますよ。ずっと張り付いて私のことを見ているやつが。」

「…ああ、そうですね。私としたことがすっかり忘れていました。」

「存在感が薄かったからですから。あいつは4人に狩らせようかと思えます。私が狩つてもいいですけど、やはりあの4人に狩らせてあげたい。」

「うふふふ。優しいですね。」

「…優しいですか？…ここにきてから私も変わったような気がします。」

「環境が変われば人というのは変わりますよ。」

「人はそう簡単には変わらないとよく聞きますけどね。」

「じゃあ、簡単に変わってしまった暁さんは人間じゃないかもしれないかもしれませんね。」

「そう…ですね。きつと私は人間じゃない。」

「ははは。暁さんはまだ人ですよ。じゃなきゃ私も人型であなたとお話ししてませんか。」

「なら嬉しいですね。」

彼女は鳴子と別れて部屋に戻った。結局一度も使わなかったこのベッド、せっかくだから最後に使ってやろうか。どうせ待たなきゃいけないのだ。本を一冊引き抜きベッドにダイブする。

「おおあ…この感触久しぶりだわ。こんなに気持ちよかったのね…眠気はないけどそこまで贅沢は言えないわね。束の間の人間の娯楽を楽しみましょうかね。」

「…はあ、はあ…ヨアケさんやってきたわよ。」

「ん、あらお疲れ。見事に血まみれね。それはあなたの血かしら、相手の血かしら？」

「相手に決まってるでしょ。みんながみんなこんなに出血してたら死んでるわよ。」

「…それもそうね。」

「ヨアケさんの常識がちよつとおかしいのです。」

「な、なんでみんなそこまで落ち着いているんだ。私たちは仲間を殺したつていうのに…」

「響、いい加減慣れる。吹雪と長門がいなくなつてもここにはまだもう数人いるんだから。とりあえず…一度戻るわよ。私も久々に苦戦して輸血液とかすつからかんよ。」

「ヨアケさんが苦戦する相手…出会いたくないわ。」

「安心なさい、ここはヤーナムじゃないから死んだ奴は復活できないわ。ちよつと残念ね。さ、無駄話はこれでおしまい。早く戻りましょう。」

夢に戻ってくるのは久々な気もしたがよく考えてみればそうでもなかった。彼女は4人にアイテムを補充するように諭す。

「さ、戻るわよ。」

「え、戻るつてどこに…」

「決まつてるでしよ、鎮守府よ。」

「なんで？」

「なんでつて、あそこにはほら、まだアメンドーズがいるし。せつかくならあなたたちに倒してもらおうと思つて。」

「な、なんで私たちがなのよ。」

「せっかくだからって言ったじゃない。ほら、予習予習。」

「えー……」

4人はしぶしぶ彼女についていき、またあの場所に戻ってきた。夢のような明るい空間とは違って以前暗い夜を赤い月が不気味に照らしている。

「……あれ、そういえばまだ夜が明けてないのね。」

「そうよ、ちゃんと夜を明かすためにもアメンドーズを倒して狩りを全うしないとね。」

「だからなんで私たちにそれを押し付けるのよ……」

「文句言わない、やる、いいね?」

「……」

なんだかこちらをずっとにらんでいるようだがそれは無視する。奴はずっと同じ場所にいた。庁舎の正面の壁に張り付いたままこちらをずっと見ている。しかし全員で近づいたとたん奴は飛び上がりこちらに落ちてきた。

「ほー、やろうってのね。じゃああとは任せたわ。」

「うえ、本当に私たちがやるのね。」

「もうやるしかないのです……」

彼女は遠目から戦闘を観察する。いまだに未熟な部分も見えるがチームで戦うことを考えるなら互いにカバーできてるから、十分だと思う。さて、彼女はなにもただずつと観察しているわけではない。4人を邪魔する輩から守るためだ。例えば：

「あんた、吹雪をやったのね。」

「だとしたら…?」

「殺す!」

そう提督の奴隷どもとかだ。わざわざ話しかけてこずに後ろからズドンとすればよかつたのに。まあ、そんなに殺気を出していたら後ろからでも普通にばれてるが。殺すといつていたが、確かに殺す気満々だ。持つてる槍をでたらめにさしてきている。だが、ちゃんと冷静さもあるみたいでちゃんとこちらの攻撃は避けてきやがる。生意気な。我を忘れているなら適当に避けて一発切りつけてやれば終わるのに。

「あんた、なんで吹雪を殺したのよ! あんなになかよくしてやったのに!」

「殺されかけたんだからしようがないじゃない。」

「じゃあ、おとなしく殺されときなさいよ!」

「それは無茶な話ね。」

「いやってんなら今ここで私が殺してあげるわ。」

「お断りするわ。」

叢雲が槍を突き出したのを避けた一瞬のスキをついて彼女は叢雲の右腕を切り落とした。その激痛に叢雲は府毒うめきながら後ろによるめいた。彼女はそ個に追い打ちをかけるようにさらに切り付ける。

「う……くっ。」

「残念よ。もう少し仲良くできると思っていたのに。」

「くっ……この化け物。」

「ふふ、化け物で結構。」

彼女は叢雲の首へ刃を滑らす。叢雲の首は彼女を恨む表情のまま後ろへ落ちていった。

「雑魚いわね。はー、これで3人目かしら。あと……3, 4人つてどこかしら。来るのかしらね。来たら来たでやるし、来ないならそれでもいいんだけど。」

後ろではまだどっしんどっしん音がしているのでまだまだ戦闘は長引きそうだな。

「……ん、どうしたのあんた。」

「死んじやったのです……おしつぶされて……」

「あー、なるほど。ま、がんばって。」

向こうから電がやってきたのでどうしたのかと思っただが、なんだただ死んだだけか。押しつぶされたといっていたな。

その後もなんだか死んでは戻っていくのが見えたが。やく1時間後やつと4人が戻ってきた。

「遅かったわね。」

「これでも頑張ったのよ……あれ、これは……叢雲さん？」

「殺そうとしてきたから殺し返してあげたのよ。それにあなたたちの邪魔されたら困るしね。」

「そう。」

「……」

「あ、月が戻っていくのです！」

電の言う通り赤かった月が元の色に戻っている。同時に雰囲気もロマを倒す前に戻ったようだ。と、月の様子を見ているとその影を何かに通っていった。

「ん？あれは何？」

「あれは……なにかの飛行機ね。」

「飛行機？どこから……というか、あれどこに向かっているのかしら。」

「えーと、まっすぐ行つたとしたら……本土、かしら？」

「本土？ああ、そういえばここ孤島なんだっけ。でもどうして本土に飛行機なんて飛ばす必要が？」

「も、もしかして私たちのことを報告するつもりなんじゃ?」

「まさか。だとしても何か困るわけでもないし。そもそも今のこの現状……あー、はいはい。なんとなくわかったわ。」

「目的が?」

「犯人もね。多分赤城か加賀でしょうね。目的は……多分響の言うとおりかしら。」

「え、赤城さんと加賀さん!? な、なんで。」

「そりゃあ、いままともに艦娘してる空母ってあの二人だけだし、本土に艦載機よこして何をするつもりなのかは……よくわかんないけど。ま、結局私たちにはそんな影響はないでしょ。ここに來ることもそうそうないでしょうし。」

「え、もう來ないの?」

「私はね? 別にあなたたちが來たければ好きだけ行けばいいのよ。」

「そっかー。」

「じゃ、今度こそ帰りましょうか。まだまだヤーナムの狩りは終わらないわよ。」

「うげえ、まだあるの?」

「なーにいつてるの。これから本番よ。アメンドーズともまた戦うわ。」

「もう踏みつぶされるのは勘弁なのです……。」

「あのレーザーもね……。」

「響?…どうしたの?」

彼女は4人を引き連れて帰ろうとしたが響だけが依然として叢雲の死体を見つめて動こうとしない。

「どうしたの響。帰るわよ。」

「ど、どうした3人ともそんなに平然としていられるんだい!いくら狩人になったからって、いくらヤーナムであんなに死んだからって急に冷酷になりすぎじゃないか!私でもさっきのアメンドーズだとかあの艦娘の恰好した化け物とかは平然と殺せるけど、いくら何でも仲間に対してあんなに冷酷にはなれないよ!」

「響、あれは敵なのよ。もう仲間ではないの。」

「でもまだ会話できたじゃないか。」

「話しはできたけどまるで聞いてくれなかったじゃない。」

「それに響ちゃんももう殺すしかないってわかってたじゃないですか。一緒に長門さんを殺したのです。」

「それは…本当に話を聞いてくれなかったから…そ、そうだ。私は殺してしまった。でも私はそのあとに弔った!ちゃんと手を合した!でも暁たちはすぐにその場から去ったじゃないか!手ぐらい合わせたらどうなんだい!」

いまだにグダグダいう響を無理やりにも帰らそうかと思つた彼女だったが動いた

のは意外にも暁だった。ゆっくりと響に近づき何か見せているらしい。何を見せているのかはここからは見えない。

「……響。」

「な、なんだい？」

「これ。」

「これ？この頭蓋骨がどうかしたのかい……まさかこれ！」

「なんだと思う？」

「暁……なんてことをしたんだ……！暁、狩人になってからどこかおかしいよ！私の姉はこんなことする奴じゃなかった！」

「……私は変わってないしそこまで残酷じゃないわよ。」

途端に響が気絶した。暁は気絶した響を重たそうに運んできた。

「なーんしてきたの。頭蓋骨とか言ってたけど……」

「ん、ちよつと狂人の智慧をね？」

「……はあ、また狂人の智慧で気絶したの？響は耐性ないわね……」

「しょうがないわよ。一番周りを見てたんだもの。一番精神がまともだったのよ。」

「……それ、遠回しに自分が狂ってるって言ってるようなものよ？」

「自分のことは自分が一番知ってるの。」

暁が響を抱えて歩いていている背中を眺めていると雷電姉妹が寄り添ってきた。

「ねえ、最近暁が怖く見えるんだけど。」

「電もちよつと怖く感じる時があるのです…」

「うーん、私も我ながら少し恐ろしく感じるわ…私あんな感じに見える?」

「え…うーん、たまに?」

「そう…」

まあ、今いる艦娘は自分たちのコピーだから似ているのは当然なのだが。しかし、人はそのつもりじゃないかもしれないが暁は変わったと思う。多分自分より変化が激しい。

「あー、上位者の叡智はやりすぎたかしらね。」

多分最初に上位者の叡智を与えたのがまずかったのだろう。あの時はちよつと雰囲気酔っていたという好奇心に負けたというか…。実はあの後に少しだけ反省してたりしたのだ。あの後も暁は狂人の智慧やらなんやらよく砕いていたし、啓蒙がたくさんあるのだろう。

「…うーんまあそれはそれでいいか。」

別に彼女は協調性だの人間性だのくそどうでもいいので、狩りさえ楽しんでくれれば

それでいい。むしろ彼女が心配なのは響の方だ。

「…帰りましょうか。」

再び彼女に暇な時間が訪れた。あの花畑、樹の前に立つ石碑のさらに前で机を置き、彼女は紅茶を飲みながら読書をしていた。机を挟んだ向かいでは彼も同じように読書をしているが両手に本が握られており頭も左右を行ったり来たりしてる。

「…そんなに無理して読まなくてもいいのに。」

「……」

「うふふ。狩人様は勤勉ね。」

あちらから戻ってくるときに彼女は4人に手伝わせてあの部屋にあった本をすべて運び出した。すると彼が彼女が持ち帰った本に興味を示したのだ。夢から離れられない彼女にとって新たな娯楽になり得そうなものだったからだ。だが当然彼は日本語は読めない。そこで彼女がわざわざ辞典を用意してきたのだ。

「あ、そうだ。聞きたかったんだけど死にかけの私を助けたのって狩人様?」

「……」

「え、違うの?じゃああれ誰だったのかしら。」

「あー、もうー！」

ふとどこからか叫び声が聞こえてきた。暁の声。また何かにぼこぼこにされて帰ってきたらしい。

「……」

「ええ、ほんと。おかげで聖杯ダンジョンに専念するしかなかったわ。」

「……」

「…その時がまだ来ないことを願うわ。」

「……」

「ええ、すつかりね。なーんか、変な友人もできたし、今思えば結構いい経験だったかもね。」

静寂が多かった夢も今は騒がしいことが多くなった。彼はそのことをどこか喜んでるらしい。まだ4人と会話することができないのが残念らしいが。きつといつか4人も会話できるようになるだろう。

「…はあ、4人が私を超えるのはいつになるかしらね。」